朝鮮の始祖檀君

「檀君を始祖とする朝鮮民族が 5,000 年の悠久な歴史的期間、ひとつの血筋、ひとつの言語、ひとつの文化伝統をひきついで強く生きてきた事実は、7,000 万のわが同胞が北にいようと南にいようと海外にいようと、政見と信教、財産の違いにかかわりなく、民族分断の悲劇に終止符をうち、祖国統一の正義のたたかいに力強く立ちあがるよう励ましています」
（朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第 9 期第 6 回会議の報告）

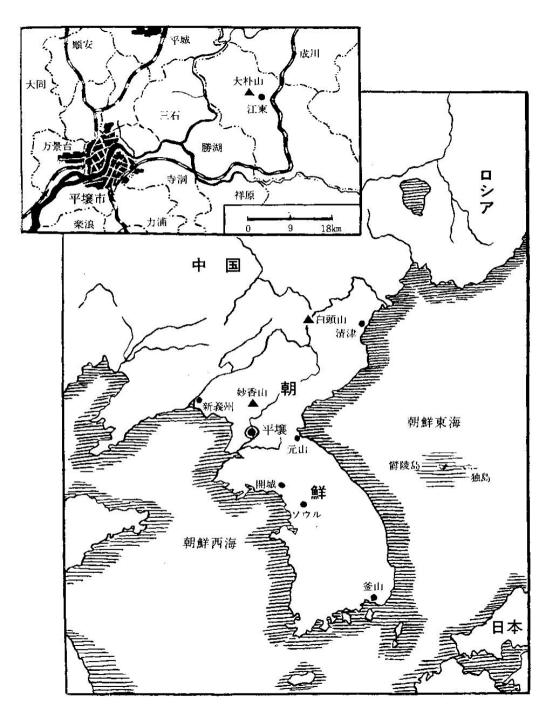
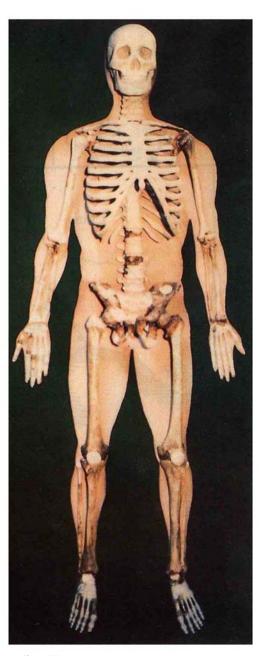
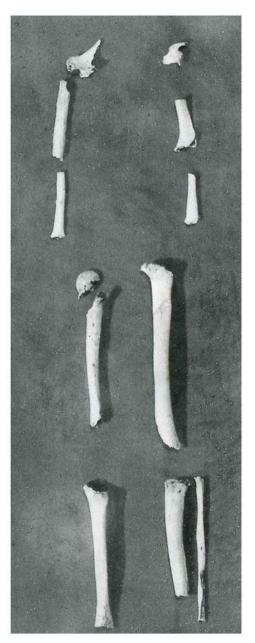
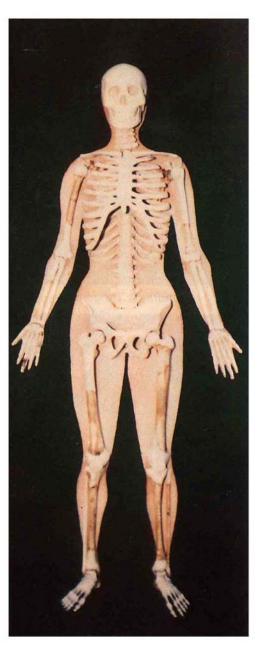
写真提供；考古学研究所
文化保存研究所
遺物復元製作；鄭恩官
翻訳；外国文出版社

朝鮮の始祖檀君

（研究論文集）

朝鮮・平壌
外国文出版社
1994

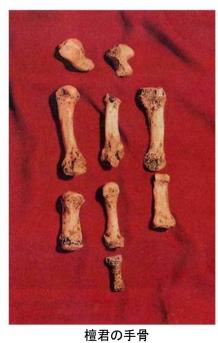
順安
平城
成川
大同
大朴山
江東
三石
万景台
勝湖
寺洞
平壌市
祥原
楽浪
力浦
0
9
18km
ロシア
中国
白頭山
清津
朝
妙香山
新義州
平壌
元山
朝鮮東海
鬱陵島
独島
開城
鮮
ソウル
朝鮮西海
釜山
日本

檀君陵位置図

檀君陵で出土した檀君と妻の遺骨および復元図

檀君の遺骨とその復元図

檀君の妻の遺骨とその復元図

檀君の大腿骨

檀君の骨盤

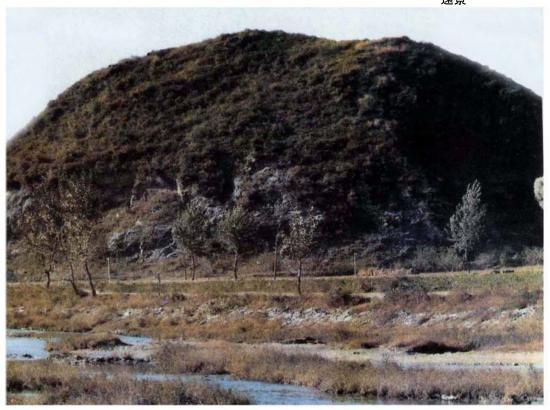
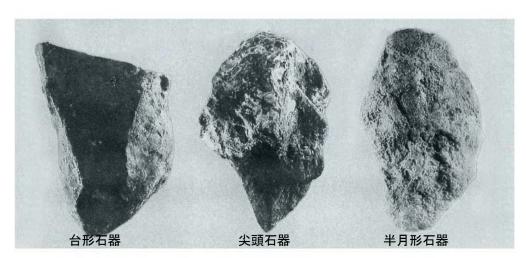
檀君の手骨

檀君の脛骨と腓骨

檀君の上膊骨、尺骨、撓骨

檀君陵で出土した金銅帯の板片と金銅王冠の
前立て部の装飾および巻き帯の破片

檀君陵記績碑と前面の碑文

コムンモル遺跡（平壌市祥原郡黒隅里）

遠景

コムンモル遺跡で出土した原人が使用した石器

大峴洞遺跡

（平壌市力浦区域大峴洞）

全　景

「力浦人」（旧人）復元彫刻

「力浦人」の
頭蓋化石

万達里遺跡（平壌市勝湖区域万達里）

「万達人」（新人）の頭蓋化石

正　面

後　面

側　面

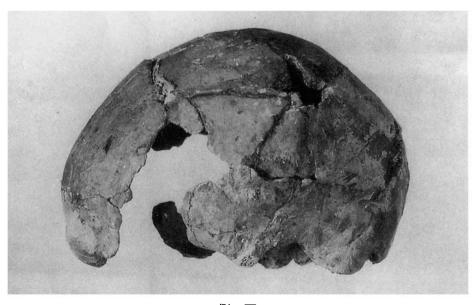
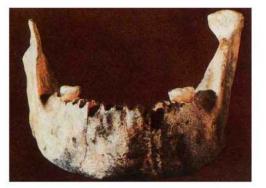
正　面

下顎骨

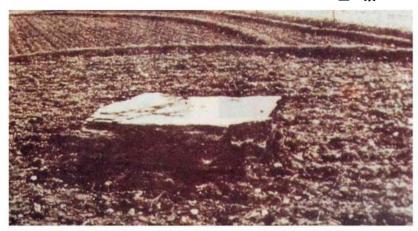
側　面

黒曜石器

「万達人」の復元彫刻

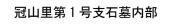
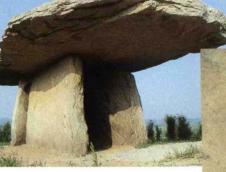
側　面

正　面

沈村型支石墓

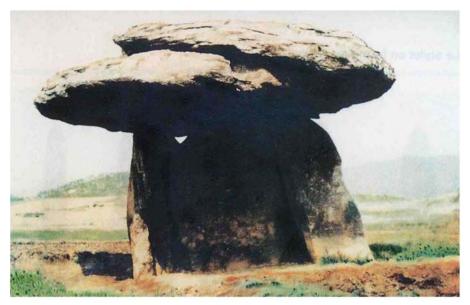
全　景

近　景

五徳型支石墓

黄海南道殷栗郡冠山里第１号支石墓の近景

冠山里第１号支石墓内部

側　面

連結部

黄海南道安岳郡
路岩里支石墓

黄海南道白川郡竜東里の支石墓

墨房型支石墓

全　景

墓室の内部

琵琶形短剣

琵琶形短剣と
琵琶形青銅槍先

獣図帯鉤

目　次

檀君陵発掘報告

朝鮮民主主義人民共和国
社会科学院

朝鮮民族の始祖檀君は5,000 年前、平壌に都を定め、東方ではじめて「朝鮮（古朝鮮[1]）」という国を建てた。檀君の古朝鮮建国によって、朝鮮民族は百余万年の長きにわたる原始時代に別れを告げ、国家時代、文明時代へ入っていったのである。これは、朝鮮民族史において実に画期的な出来事であった。

偉大な金日成同志はつぎのように述べている。

「朝鮮人民は5,000 年の長い歴史をもつ人民であり、輝かしい文化を誇る聡明な人民であります」（『金日成著作集』第2巻、日本語版429 ページ）

朝鮮民族の5,000 年の悠久な歴史は、檀君が国を建てたときからはじまった。

古朝鮮の建国始祖檀君が生まれたのは平壌一帯であった。『三国遺事』と『応製詩註』の著者たちは、檀君神話を伝え、桓雄（檀君の父）が天から地上に降り立ったという「太白山」は妙香山であると指摘している。『八域志』では、妙香山のマユミ（檀、朝鮮語でパクタル）の木の下に檀君が生まれた石窟があるとし、『寧辺誌』では妙香山の香盧峰の南側に檀君が生まれた洞窟があるとしている。

檀君は現在の平壌に国を建てたあと、周辺の小国を統合しながら次第に領土を拡大していった。その後檀君が建てた古朝鮮は3,000 年近くも存続し、その間遠く中国の万里の長城付近まで領域を拡大し、アジアの強大な古代国家として発展を遂げた。檀君が死んで埋葬された場所も、やはり平壌一帯であった。

しかし、檀君と古朝鮮の歴史は過去、事大主義者と日本帝国主義の御用学

者たちによって歪曲、抹殺され、正確な解明ができなかった。
　このような実態を見きわめた金日成主席は、朝鮮の民族史を主体的立場から正しく確立するためには、過去、日本帝国主義によって抹殺された檀君と古代朝鮮の歴史から正すべきだと述べ、檀君陵の発掘にかんする重要な指針を与えた。
　主席の指示を得て最近、社会科学院の考古学者たちは檀君陵の発掘作業をおこなった。
　朝鮮民族の始祖檀君の墓、檀君陵は朝鮮人民の 5,000 年の悠久な歴史を実証する貴重な史跡である。
　現在の檀君陵は、平壌市江東郡江東邑から西北方向に少し離れた大朴山の東南側傾斜面のふもとにある。大朴山の「朴山（パクサン＝明るい山)」を昔は「パクタル（マユミ＝檀)」と言ったのだが、それは「パクタル王[2]」を指す檀君と関連して生まれた呼び名である。陵の東北側には阿達山がある。この阿達山も『三国遺事』で檀君が都を定めた場所とされている「阿斯達」と関連して生まれた名である。
　陵の前には少し広い平地があり、その向こうには東西に山が連なっている。
　平地中心部のやや南側を水晶川が東から西に向かって流れ大同江にそそぎこんでいる。陵の前方、水晶川のほとりに臨鏡台がある。ここには檀君の足跡があるという洞窟と、それにまつわる伝説が伝えられている。
　陵から西へ向かってそう遠くないところに「檀君湖」と呼ばれてきた湖がある。また檀君陵がある村は少し前まで「檀君洞」、その東側の村は「阿達洞」と呼ばれていた。
　檀君陵は石を積み上げた高句麗様式の石室封土墳である。半地下に作った墓室は玄室と羨道からなる単室墳であり、その方向は西側に若干偏した南向きである。玄室の大きさは東西 273㎝、南北 276㎝ であり、床から天井 3 角持送りの 1 段目までの高さは 160㎝ である。玄室の床には棺台が南北方向に並べられている。壁は石を丹念に積み上げており、天井は 3 段の 3 角持送りで作られ、その上に蓋石をのせている。羨道は玄室内壁の中央から伸びており、その入口は荒石を積んでふさいでいる。

この墓は解放前、日本帝国主義者によって盗掘されたため、今回の発掘では遺物があまり出てこなかった。しかし、もっとも注目されるのは、2 体分の骨が発掘されたことである。

墓には、全部で 86 片の骨があったが、主に腕、脚、骨盤のものである。そのうちの一方は男の骨であり、もう一方は女のものだった。性別の鑑定は骨盤の骨にもとづいておこなった。骨盤の骨に性差が現れるのは 10 歳ころからで、それは性成熟期にいたってもっともはっきりする。この墓から発掘された一対の骨盤の骨からは男の特徴が明確に見て取れ、もう一方の骨のなかには骨盤はないが、その他の骨には繊弱な女の骨の特徴がよく現れている。男の骨は主人公の骨であり、女の骨は主人公とともに埋葬された妻の骨と認められる。

骨盤の骨を通じて年齢も鑑定された。骨盤の耳型部分と恥骨の結合面は年齢によって微妙に変化していく。それによると、男は長生きした長寿者であったと認められ、女は比較的若い年齢だったと推定される。男の骨はどれも長くて太く、身長は 170㎝ 以上だったと見られる。

人間の身長は時代をさかのぼるほどに低く、現代に近付くほどに高くなるが、檀君が生存した時代は、一般的に男の身長が 163㎝ を越すことはないと認められている。したがってこの墓に埋葬された男は当時としては身長が相当に高く、体格もりっぱであったとみることができる。

檀君陵から出土した男の骨の年代測定もおこなわれた。骨の年代は、現代物理学の先端技術のひとつである電子スピン共鳴法（電子常磁性共鳴法）を適用し、二つの研究機関が所有する測定器具でそれぞれ 24 回、30 回測定したところ、いまから 5,011 年前（1993 年基準）のものであることが科学的に証明された。その骨はほかでもない檀君の遺骨である。

檀君の遺骨が長い間朽ち果てずに保存されていたのは、有利な地層に埋まっていたためである。遺骨は石灰岩地帯に埋葬されていたのだが、その地点の土壌は骨を朽ちさせない特性をもっていた。石灰岩地帯では土壌の中に石灰岩がとけて形成された水溶性鉱物質が多いため、骨が化石化する可能性が高い。檀君の遺骨にも化石化の進行傾向が濃く現れている。

数千年前の古い墓で骨が保存されている実例は珍しいが、朝鮮でもほかに数例ある。咸鏡北道会寧市南山里にあるコムンケボン遺跡から出土した骨は、その1例である。

墓からは人骨以外にも金銅王冠前立て部の装飾と巻き帯の破片が1個ずつ出土した。前立て部の装飾は、厚く金の鍍金を施した青銅板で作られている。上の部分は桃の種の形になっていて中央に穴があいており、下の部分の両側はまっすぐになっている。巻き帯は細長い青銅板で、やはり厚く金で鍍金が施されている。

墓からはまた青銅帯の板片が1個出土した。長方形の青銅板で、片側にだけ小さな穴が2個あいている。本来、金の鍍金を施したものだが、現在は大部分がはがれ、やっとその痕跡をうかがえる程度である。

このほかにも玄室からはいくつかの陶器の破片や棺に打ちこまれていた棺釘6個分が出土した。

墓の前には 1936 年に「檀君陵修築期成会」が有志から集めた基金で設置した墓域施設がある。

墓の前には漢字で「檀君陵」と記した墓標碑の台石があり、その前には花崗岩をよく磨いて作った重さ2t200kgもの大きな祭壇が置かれ、墓前の左右には石獅子が1個ずつ置かれている。祭壇の8m前には「守護殿」と呼ばれる亭があった。その東側には檀君の記績碑がある。碑石の高さは191㎝で、前面には漢字で檀君の業績をたたえる文が刻まれている。

碑文は、檀君を偉大な神人であるとして、檀君によってわれわれの先祖が礼儀と道徳をそなえた文明人に開化されたと高く賞賛し、檀君は中国の3皇5帝に匹敵する聖人であるから檀君を含めて4皇6帝とすべきだとしている。裏面には朝鮮文字で檀君陵の修築の経緯が簡単に記されている。それによると、日本帝国主義による占領初期にかなり崩れていた檀君陵の修築工事問題が1921年に提起され、論議を重ねた末、1932年に「檀君陵修築期成会」が結成されて、1936年に修築工事が完成したことがわかる。

檀君が実在の人物で古朝鮮の建国始祖であること、そしてわれわれの先祖が、はるか昔から江東にある檀君陵を実在した檀君の墓とみなし祭祀をして

まつってきたことは、古い文献にもはっきりと記録されている。
紀元 3 世紀に編纂されたと推定される中国の史書『魏書』は、「2,000 年前檀君王倹[3]がいて、都を阿斯達に定め、国を開いて朝鮮と号した」として、檀君が古朝鮮を建てたことを明らかにしている。
高麗時代の史書『三国遺事』は、檀君を古朝鮮の建国始祖とし、「朝鮮」という題のもとで『古記』の檀君神話と『魏書』の檀君記事を紹介している。また『帝王韻紀』は、民族史の冒頭部分で檀君を朝鮮の開国始祖とし、かれが「朝鮮（古朝鮮)」を建国した史実を伝えている。
1392 年に礼曹典書の趙璞は「朝鮮の檀君は東方ではじめて国を建てた王」とした。学者権近（1352～1409 年）は「わが東方で国を建てたのは檀君の朝鮮からはじま」ったとし、1412 年、礼曹の太宗王への上奏文には「檀君は事実わが東方の始祖」と指摘している。
「檀君朝鮮」の歴史が正史にはじめて登場したのは『高麗史』(1451 年編纂）からであり、民族史の記述を「檀君朝鮮」からはじめたのは、1484 年に編纂された『東国通鑑』からである。その後、李朝の全期間にわたって国史の冒頭の部分は例外なく「檀君朝鮮」について記述しており、教育用の歴史教科書でも同様であった。
檀君陵にかんする文献記録も少なくない。江東にある檀君陵を実在の檀君の墓として明確に記録した最初の文献は、1530 年に完成した『新増東国輿地勝覧』である。ここには、江東県に 2 基の大きな墓があって、1 基は県の西方 3 里（1.2ｋｍ）の地点にあり、周 410 尺に及び、民間では檀君の墓だと伝えられている、と書いてある。それがほかならぬ今回発掘した檀君陵である。さらに 1626 年に編纂された『江東誌』にも、これとまったく同じ記録がある。
江東に檀君陵があるということについては、『李朝実録』でも数か所に記録されている。『粛宗実録』は 1697 年 7 月 14 日、粛宗王が江東の檀君の墓と平壌の東明王の墓を毎年修理することを上奏した李寅樺の建議を承認したと書かれている。また『英祖実録』にも、1739 年 5 月 23 日と 1763 年 4 月 22 日に英祖王が平壌監司に対し、2 度にわたって檀君の墓をりっぱに補修し、

管理するよう指示を与えた内容が記録されている。さらに『正祖実録』は、1786 年 8 月 9 日に正祖王が平壌監司に檀君の墓を巡視したあと、付近の住民で墓守りを定め、江東の首長が春と秋に直接墓を見回ることを制度化するよう指示した内容を伝えている。

　これらは、李朝封建政府が江東にある檀君の墓を重視し、国家的な関心のもとで保存、管理していたということを示している。

　『高麗史』地理志には、江東県に「朴達串村」という檀君と関連した村があるという記録がある。

　「朴達串村」は檀君陵があったことから生まれた名前だということが推測でき、したがってこれは高麗時代にも江東に檀君陵があったことを伝えるものである。

　今回の発掘の過程で、墓の前で高麗時代のうわぐすりを塗った瓦の破片が発見されたが、それは高麗時代にその墓の前に祭堂があり、そこで祭祀をしたということを示している。

　これらすべてのことは、江東にあるその墓が檀君の墓であることをはっきりと証明している。

　檀君の墓が高句麗様式でできているのは、高句麗時代にその墓を改築した事情と関連している。高句麗の人たちは自分たちの始祖である東明王とともに檀君も崇拝した。『三国遺事』の王歴には高朱蒙が「檀君の息子」と記録されており、『帝王韻紀』に高句麗の人びとが檀君の子孫だと記されていることは、それを物語っている。事実、高句麗の人たちは自分たちを古朝鮮の継承者と称していた。だからかれらは檀君陵を自分たちの様式で改築したのである。

　すべての事実は、われわれの先祖たちが数千年間、檀君を朝鮮の建国始祖として認識してきたということを物語っている。

　しかし、朝鮮民族のこのような伝統的観念は、朝鮮を占領した日本帝国主義者の檀君抹殺政策によって踏みにじられた。

　かれらは、昔の記録が伝える檀君朝鮮の建国年代が自分たちの荒唐無稽な建国神話が伝える国家起源年代（前 660 年）より 1700 年近くも早いために、

檀君朝鮮にかんする歴史記録を無視し、檀君朝鮮を抹殺せずには「優秀な」大和民族が「劣等」な朝鮮民族を同化させ、支配しなければならないという強盗的な植民地支配説を正当化できないと考えた。

日本帝国主義の初代総督、寺内正毅は朝鮮の歴史から檀君を抹殺するために警察を動員し、全国各地の書店と個人の家をくまなく捜索し、檀君関係の歴史書をはじめ貴重な朝鮮民族の歴史、文化、地理にかんする書籍を数十万冊も押収し、焼却する許すまじき蛮行を働いた。

かれらは悠久な朝鮮民族史を日本の歴史より遅れたものにするために、1915 年から総督府中枢院に朝鮮史編纂機関を設けた。そして歴代朝鮮総督と政務総監の指揮のもとに「朝鮮史編纂委員会」を設け、組織的な朝鮮史偽造行為をはたらいた。

狡猾なかれらは、「朝鮮史」を「編纂」するにあたり資料が足りないという口実をつくって「檀君朝鮮」の歴史を捨て去り、今西龍のような歴史偽造の「名手」たちを利用して、檀君が後世につくりだされた神的存在であり、実在の人物ではないということを努めて「論証」させ、檀君は神話的人物だから「朝鮮史」に叙述できないと頭ごなしに断定した。かれらはまた、檀君を抹殺するうえで邪魔になる者は、たとえかれが日本人であっても仮借なく朝鮮史編纂機関から除いた。このようにして「檀君朝鮮」の歴史は日本帝国主義が編纂した『朝鮮史』第１編から除かれ、檀君は神話的人物、荒唐無稽な存在であるという観念が世の中に広まることになった。

もし朝鮮民族がかれらに国を奪われなかったなら、檀君を実在の人物、古朝鮮の建国始祖と認識してきた祖先伝来の伝統的観念は今日まで完全に伝承されたであろうし、檀君朝鮮の歴史研究でも相当な前進があったであろう。近代朝鮮民族の亡国史は、国亡き民族は祖先をも失うという血の教訓を残した。

檀君陵の発掘とときを同じくして、言語学会では檀君時代から古朝鮮で使われていた固有な民族文字があるということを明らかにした。これは、朝鮮民族が古朝鮮時代からかなり洗練された民族文字を持って文化を発展させてきたことを示している。

檀君陵が発掘され、そこから檀君の遺骨が出土したことは、大きな歴史的意義を持っている。

これまで神話的・伝説的人物と思われてきた檀君が実在の人物だったことが科学的に明らかにされ、これによって朝鮮は、実際に5,000年の悠久な歴史と燦然とした文化を持つ東方の先進文明国だったことが明らかになった。

檀君が古朝鮮を創建し、都を定めた平壌が山紫水明なところとして、コムンモル遺跡の主人公と「力浦人」(旧人),「万達人」(新人)、朝鮮旧時代類型人[4]として続く人類発祥地のひとつであり、朝鮮民族の発祥地であり、最初の国家の発生地であったという事実が強く証明され、朝鮮民族は檀君を始祖とする単一民族であることを堂々と誇ることができるようになった。

檀君が実在の人物であることが明らかにされ、檀君朝鮮以来、朝鮮民族が単一の民族として文化を発展させながら、たくましく生きてきたことが証明された結果、檀君の後裔としての朝鮮民族の誇りはさらに高まり、ひとつの血筋を引いた7,000万同胞が祖国統一の偉業を成就する道でさらにかたく団結してたたかっていけるようになった。

朝鮮民族の運命を憂慮する北と南、海外のすべての同胞を政見と信教、財産の有無の違いを越え、檀君を祖先とする同じ民族だという、水よりも濃い血の同質性を優先視しながら、外部勢力によってこの地球上から朝鮮民族だけが体験している分断の悲劇を朝鮮民族の魂、民族愛の広い度量をもって終わらせるうえで重要な寄与をするであろう。

檀君朝鮮の歴史、5,000年の朝鮮の悠久な歴史と文化を確認しえたことは、まさに民族史研究で主体性の確立をはかった金日成同志の正しい指導のすぐれた結実である。

金日成同志は、朝鮮民族の始祖であり、民族的魂の象徴である檀君を実在の人物として見いだしただけでなく、朝鮮民族の5,000年の歴史の始祖である檀君の陵を最上の水準で再建するために、檀君陵復旧委員会をつくり、国家的な力を入れて再建事業を進めるよう適切な措置をとった。

檀君陵が再建されれば、それは単一民族の英知と誇りを広く世に伝える貴重な文化的財産になるであろう。

朝鮮民族の歴史を深く研究し、輝かすべきわれわれ学者は、国を愛し民族をたっとぶ金日成同志の崇高な思想にのっとり、チュチェの方法論と朝鮮史研究の方向にそって檀君と古朝鮮の歴史を研究し、そこに燃える忠誠心と創造的知恵を傾注するであろう。

1993 年 10 月 2 日

檀君陵の発掘状況

社会科学院考古学研究所研究士
博士　副教授　朴晋煜

最近、考古学者たちは江東郡の檀君陵を発掘し、それが檀君の本物の墓であることを確認した。

檀君陵は平壌市江東郡江東邑から西北方に少し離れた大朴山の東南側傾斜面のふもとに位置しており、その東北方向には阿達山がある。大朴山は檀君を象徴する「朴（パク）達（タル）」に由来し、阿達山は『三国遺事』に記された、檀君が都を定めたという「阿斯達」と関連してついた名である。

陵のある土地は解放前まで「檀君洞」と呼ばれていた。

陵の前（南側）は広い平地で、その向こうに山なみが東西につらなっている。平地の南側を水晶川と呼ばれる小川が東方から西方へ向かって流れ大同江にそそぎこんでいる。現在陵のある地面はあまり高くなく、前方の平地が見おろせる。

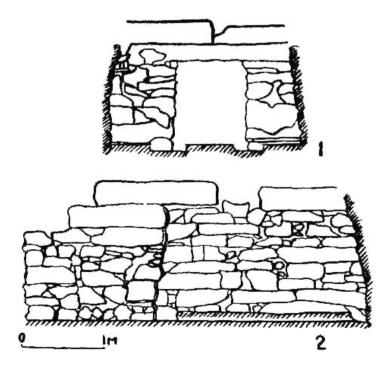
檀君陵は石で墓室を作り、その上に土を積み上げた石室封土墳で、玄室と羨道からなる単室墳である。陵を築いた当時の地面から約 1m 掘り下げて墓室をつくった半地下の墳墓であって、その方向は西寄りの南向きである。

玄室の平面は南北 276cm、東西 273cm のほぼ正方形で、床から天井 3 角持送りの 1 段目までの高さは 160cm である。

玄室の床は約 20cm の深さに掘り、石を敷き、土をかぶせて固めたもので、その上に石灰を塗ってある。床には棺台が南北方向に並べて置いてあるが、荒石を積み上げて作ったもので、やはり石灰を塗ってある。玄室の壁は荒石やざっと削った石を積み重ねて作られているが、東西の壁は大体 7 層、北の壁は 9 層に積まれている。壁面には本来石灰を厚く塗ってあったが、発掘当時は大部分がはがれて床に落ちていた。

玄室の天井は3段の3角持送りで作られ、その上に蓋石が置かれている。持送りは厚さ約40㎝の3角形板石である。南側の2枚の持送りは羨道の天井石の上に置かれている。

南側の壁の中央から南の方へ羨道が伸びている。幅113㎝、長さ125㎝、高さ130㎝である。羨道の床にも石を敷き、土をかぶせて固め、その上に石灰を塗ってある。羨道の先の部分では南北に1mほどの荒石を積んで入口をふさいでいる。羨道の両側の壁の上には長さ210㎝、幅120㎝、厚さ35㎝の天井石が渡されている。

本来この陵には壁画が描かれていた。張志淵の文集『韋菴文稿』にはつぎのように書かれている。

第1図墓室の断面図　1横断面図　2縦断面図

「平安道江東県の西方3里に大きな陵がある。周410尺で、民間では檀君陵と呼ばれている。何年か前に日本の考古学者たちがそれを発掘したところ、内部はすべてれんが様の石で積み上げ、4 面の壁には昔の仙人と不思議な将帥の像が描かれていた。その姿は婉然とし、変質していなかった」

ここにいう「昔の仙人」と「不思議な将帥」が檀君であったと推察するのは容易である。『三国史記』でも檀君を「仙人王倹[5]」と述べているが、それと「昔の仙人」はうまく符合するからである。高句麗壁画古墳には、仙人、神仙を描いたものがいくつかあるが、それらは古朝鮮時代のそうした伝統を継承したものである。ところで、高句麗壁画古墳には仙人や神仙だけを描いたものはなく、すべてが他のものを主題にした壁画に仙人や神仙を小さく添えて描いている。これとは違って、檀君陵には「昔の仙人」と「不思議な将帥」だけが4面の壁に描かれていたらしいが、それが高句麗壁画古墳とは異なる檀君陵の特徴である。これは、この陵が檀君の陵であることを表現するためのものであったとみられる。

発掘過程で確認された資料によると、この陵はその後も数回にわたり日本帝国主義者によって破壊、盗掘されたが、その過程で檀君を描いた貴重な壁画がすべてなくなってしまった。その結果、今回の発掘では壁画の痕跡をまったく見つけることができなかった。これは日本帝国主義者が檀君を抹殺するためいかに狂奔し、朝鮮の民族文化遺産をいかに悪辣に破壊、略奪したかをよく示している。

この陵は、解放前に日本帝国主養者によってひどく破壊、盗掘されたため、今回の発掘では遺物があまり出土しなかったが、なかにはいくつか注目されるものがあった。

第1に、2体分の人骨が出土した。それは主に腕、足の骨と骨盤である。

第 2 に、金銅王冠前立て部の装飾と巻き帯の破片が 1 個ずつ出土した。前立て部の装飾は、上部が桃の種のような形で、中央に穴があいており、下部の両側はまっすぐで青銅板に厚く金で鍍金されている。装飾の高さは6.5㎝、上部の幅は 4.6㎝ である。巻き帯の破片は細長い青銅板でやはり金で厚く鍍金されている。長さは8.7㎝、幅は1㎝である。

第３に、いくつもの牌片を連結して作った金銅帯の牌片１個が出土した。6.4cm×5.7cm の長方形青銅板であるが、片方に小さな穴が２個あいてあり、厚さは非常に薄い。本来は金で鍍金したものだが、いまでは大部分がはがれて、その痕跡がやっとうかがえる程度である。

第４に、鉄製の棺釘が棺台上に６本分あった。みな錆びて折れており、本来の状態で残っているものは１本もなかったが､大体の形は見分けがついた。上の部分には直径 2～3cm の笠形の頭部があり、釘の直径は７㎜程度、長さは 16cm 程度である。どれも赤く錆びていたが、高句麗古墳でしばしば見られるものであった。

第５に、陶器のかけらがいくつか出土した。色はすべて灰色である。そのうちのひとつは水平に開いた口の部分で、厚さは1cm である。口部から推して、かなり大きな壷であったことがわかる。ほかに腹部に取っ手のついたかけら、網の文様をもつかけら、線を浮き彫りにし、指で一つ一つ押したような文様をもつかけらもあった。そのなかには、線を２重にまわしたものもあり、二つの線の間隔は４ｃｍであった。高熱で焼いたもので陶器はたいへん固い。

檀君陵の構造形式と出土した遺物は大体このようなものであるが、こうしたことからみて、この墓は高句麗様式のものであることが明らかである。

この陵の前には、1936 年に「檀君陵修築期成会」が有志たちの基金で作った墓域施設がある。

まず、陵墳の正面下部に高さ 52cm、幅 40cm の板石を並べて基壇石としたものがある。陵墳の両側面と裏面には基壇石が見えない。

陵墳の正面中心部の前には長さ（東西）115cm、幅（南北）98cm、高さ 26cm のコンクリート基礎施設があり、その上に長さ（左右）86.5cm、幅（前後）68cm 高さ 51cm の墓標碑の台石がある。その上面の中央には長さ 41cm、幅 19.5cm、深さ 7cm の溝があった。もちろんそれは碑体を挿入するためのものである。台石は花崗石で作られ、四つの角には膳の足をかたどった浮き彫りがあり、正面には中央に下向きの二つの３角形文、その両側の二つの半円文が、また二つの３角形文の下には花文、両側の半円文の下にはそれぞれワラビ文が陽刻されている。側面には上部中央にやはり二つの３角形文があり、

その両側に半円文、3 角形文の下に花文が陽刻されている。
　墓標碑台石の基礎施設の前には長さ 90㎝、幅 30㎝のよく磨かれた花崗石板（複数）が置かれている。その前に長さ 173㎝、幅 76㎝、厚さ 20㎝の板石 2 枚を継いだ基礎施設があり、その上に祭壇を置いている。祭壇は長さ（左右）171㎝、幅（前後）108㎝、厚さ 43.5㎝で、重さは 2t200kg である。これは 4 個の台石の上に置かれているが、台石は球の上と下の部分を平行に切り取ったような形をしている。球の腹部にはひとまわり浅く掘られ、そこに円形の鬼面文が四つ陽刻されている。腹部は直径 36㎝、高さ 30㎝である。
　祭壇の前には香炉石が立っている。6 角形の香炉石には動物の足が陽刻されている。上部がいくらか壊れており、残りの高さは 43㎝である。
　祭壇の基礎施設前部の両側に区画石が置かれてあるが、それらは長さ 373㎝、厚さ 14㎝のきわめて長い一枚石である。右側のものは端が少し欠けている。左側の区画石の端に断面が 8 角形の望柱石の下部が立っているが、右側にはない。区画石の前の両側に石獅子が 1 個ずつ置かれている。頭を南側に向けてうずくまっている姿勢である。口から尾までの長さは 70㎝である。台石と獅子を一続きにして彫ったもので、その全体の高さは 75㎝である。
　祭壇の 8m 前に「守護殿」と呼ばれる亭が立っていた。
　亭の東およそ 5m のところに檀君陵の記績碑がある。碑石の高さ 191㎝、幅 50㎝、厚さ 39㎝で、前面には漢字で檀君の業績をたたえる文章が刻まれている。それを翻訳すると、つぎの通りである。

　前朝鮮檀君〇〇略

　謹んで考えるに、世界を大きく教化して〇〇神々しい聖人が現れたが、その聖人に爵位を授けることができなかった。偉大な聖人の恵みは天地に満ち、万代に及ぶこと限りがなかった。その方がほかならぬわが国の始祖檀君である。
　檀君は天帝の神孫で、この地の民〇〇をもどかしく思い、天地開闢後、甲子年に……太白山の朴達の木（マユミ＝檀）のもとに降りて…

…天帝の指示を宣布した。人びとはかれを神人とみなした。戊辰年に王に推戴されて国を建て、国号を朝鮮と称した。
彭虞に命じて……治山治水をおこない、民の居留地をつくらせ、神教を創設し、（人間の世界の）360 の事柄を総轄するようにした。〇〇〇〇〇〇甲子に阿達山に入り再び天神となった。天下を治めた年数は 1,017 年におよぶ。
天のごとき檀君よ、檀君がおはされなかったなら、本当に檀君がおはされなかったなら、われわれは……の境遇を免れなかったであろう。
わが国を礼儀之国と呼ぶのはひとえに檀君から授かった恵みによるものである。〇ひげはたとえ昔日の面影を残していないとはいえ、玉〇は今日までも四散していないのだから（かれの姿は描き見ることができないが、その業績はいまも残っているという意味ー訳注）官を置いて陵を守る礼法がなくてもよかろうか。
けだし歴代のわが王朝、在野の士民に暇がなくてそうしたのでもなければ、誠意に欠けてそうしたのでもなかった。ただ偉大な神人のきわめて大きな徳をどう表現してよいかわからなかったからである。
……
人びとの志向が成就し、偉大な神人の恵みがいよいよあらたまると考え、ぬかずいて頌歌をささげる。
すぐれて偉大な方がお生まれになり、〇〇かぐわしきかな。その徳は天地を合わせたかのよう、その光は日と月のようである。国を建て、都邑を定めて東方を治めれば、牡丹峰は高くそびえ、大同江は悠々と流れる。こうして朝日が輝く国と呼ばれるようになった。綱紀を正し法が定まり、貴賤の別なくすべての人平和を享受する。
……
王たり。〇助け、鑑となし、天〇〇明るく、輝かしい功績を立てたり。
その功は高く偉大で形容しがたいゆえに 3 皇を 4 皇、5 帝を 6 帝と称してもよいほど「大徳をそなえし人」というのである。
寿、名と位禄〇〇湖中の竜のなびかすひげはつかめなくても、野の

〇〇〇真珠はおのずと山をなした。竜、虎、馬が前後に伏せもすれば、立ってもおり、笏を手にした文官と剣を着けた武官が左右で護衛している。格子戸は高く、香閣は〇〇〇

阿達山は崩れも変形もせず、以前の時代の聖人の恵みは歳月の流れとともにいよいよ伸び広がるばかり。後世の人たち〇〇〇ぬかずいて、この文を刻み、頌歌をささげるゆえに億万年とこしえに伝えよ。

朝鮮建国紀元 4269 年（1936 年）丙子年 9 月 1 日

碑文の内容を要約すると、檀君を偉大な神人であるとして、檀君により先祖たちが礼儀道徳をそなえた文明人に開明したと大いにたたえ、檀君は中国の 3 皇 5 帝に匹敵する聖人であるので、檀君を含めて 4 皇 6 帝と称すべきであるとしている。

碑石の裏面には、朝鮮文字で檀君陵の修築経緯が簡単に記されている。それによると、日本帝国主義の占領初期にかなり破壊された檀君陵の修築工事問題が 1921 年から提起され、論議の末 1932 年に「檀君陵修築期成会」が結成され、かれらによって 36 年に修築工事が完成したことがわかる。

この陵は遠い昔から先祖たちのあいだで檀君の陵として伝えられてきており、『新増東国輿地勝覧』『江東誌』『李朝実録』にも明白に檀君陵と記録されている陵である。今回の発掘でそれが科学的に立証された。

檀君陵から出土した骨が檀君の骨であるのは言うまでもないが、ここにひとつ問題になるのは、その陵が高句麗様式であるということである。つまり、古朝鮮の始祖である檀君の遺骨がどうして高句麗様式の陵から出土したかという問題が提起されるのである。

檀君陵が高句麗様式になっているのは、高句麗時代にその陵を改築した事情と関連している。

高句麗の人たちは自分たちの始祖である東明王とともに檀君も崇拝した。『三国遺事』の王暦には、「高朱蒙（東明王）は檀君の息子」と記録されており、『帝王韻紀』には高句麗人が檀君の子孫であると記されていることがそれを物語っている。実際、高句麗人は自分たちを古朝鮮の継承者だと称してい

た。したがって、かれらは古い檀君陵を見て、自分たちの墳墓様式で改築したのである。そのときの陵は非常に大きかった。李朝時代にも、陵の周が410尺つまり陵墳の1辺の長さが30余mであったことと考えあわせて、改築された当時の陵がきわめて大きかったであろうことは容易に推察されよう。

江東に檀君陵があるという事実は、檀君の死んだ地が平壌であることをよく示している。高句麗時代にそれを改築したにしても本来の檀君陵が平壌付近にあったことは疑うべくもない。これと関連して『三国史記』の記録はその史料的根拠となる。『三国史記』高句麗本紀東川王21年の記事には、「平壌は本来仙人王倹が住んでいたところである。または王の都王倹と言う」と記されているが、仙人王倹が檀君を指していることはよく知られた事実である。

檀君が暮らしていたところが平壌であり、檀君の都が平壌であったのだから、かれが死んだところも平壌であり、現在檀君陵のあるその位置に檀君の本来の墓があったということは言うまでもない。

檀君が死んだところが平壌であるということから、江東に檀君陵があるのはきわめて自然なことである。始祖王の墓はつねに首都からそう遠くないところに作られているが、それはわが国の歴代王朝の実例がよく示している。ところで、江東は昔から平壌に属していたのである。『高麗史』の地理志巻58には、「江東県　仁宗14年に京畿を分けて六つの県としたときに…この県を設けて県令を置き、そのまま平壌府の所属県とした」と記されている。これからみて、江東はすでに高麗時代にも平壌に属していたことがわかる。したがって平壌で死んだ檀君の陵を江東に設けたのはいささかも疑う余地がない。

檀君陵が発掘され、そこで檀君の遺骨が発見されたのは大きな歴史的意義をもっている。

それは第1に、従来神話的・伝説的人物とみなされていた檀君が実在の人物であったことが科学的に立証され、これによって朝鮮が実際に5,000年の悠久な歴史と輝かしい文化をもつ東方の先進的文明国であったことが明白になったことである。

第2に、檀君が死んだところと、したがってかれが都を定めたところが平壌であったことが科学的に立証されたことである。以前われわれは、檀君

が死んだところが遼東地方で、古朝鮮の首都王倹城も遼東地方にあったとみなしていた。しかし、江東で檀君陵が発掘された結果、檀君が死んだところは平壌であり、古朝鮮の首都王倹城も遼東地方にあったのではなく、平壌であったことが確認されたわけである。これは、人類発祥地のひとつである平壌が朝鮮民族の発祥地であり、最初の古代国家古朝鮮の首都であったことを示しており、平壌の由緒深い歴史を確認している。これは朝鮮人民に高い民族的誇り、自負心をいだかせ、平壌をよりよく愛し光り輝かせる意志を高めるものである。

檀君陵から出土した人骨の年代学的研究

社会科学院考古学研究所室長
準博士　金教京

最近、平壌市江東郡で古朝鮮始祖王の墓である檀君陵が発掘された。

檀君陵から出土した人骨の絶対年代を明らかにすることは、檀君陵の歴史的地位を解明し、5,000 年の悠久な民族の歴史を体系化するうえでかなめの意義を持つ。

現在まで人類が研究開発した絶対年代測定法には放射性炭素 ^{14}C 法、熱ルミネッセンス法、ウラン・トリウム法、フィッション・トラック法、アミノ酸定量法など 10 余種があるが、われわれ研究チームはそのなかから電子スピン共鳴年代測定法（ESR 年代測定法——電子常磁性共鳴年代測定法）で、檀君陵から出土した骨の絶対年代を測定した。

この年代測定法のすぐれた点は、測定試料に制限がなく、貝殻、骨、土器など考古学的対象試料はほとんどすべて測定でき、また測定試料が何ｇかさえあれば十分であり、測定精密度が高く誤差が少ないことである。

現在この年代測定法は世界的にみても地質——考古学分野に適用され、第 4 期地質学的年代はもちろん、青銅器時代や新石器時代の遺跡の年代測定に広く応用されている。

この年代測定法では、200 万年前までの遺跡遺物の測定が可能であり、試料によっては数千万年前のものも測定できる。

電子スピン共鳴法はまた、他の年代測定法では困難な堆積岩の年代も測定できるきわめて有力な方法である。

わが研究チームはすでにこの年代測定法を用いて朝鮮最古の旧石器時代遺跡である祥原コムンモル遺跡をはじめ、数十に達する旧石器時代遺跡と化石産地の絶対年代を測定しており、この研究成果と経験にもとづいて檀君陵

から出土した人骨の絶対年代測定をおこなった。

1　電子スピン共鳴年代測定法の原理

電子スピン共鳴年代測定法は 1944 年に開発され、1980 年代には考古学や地質学、地理学分野でもその原理が広く適用されはじめた。

一般的に宇宙線を含めて自然放射性元素から放出される放射線は不断に他の物質にあたって、そこに損傷（欠陥）を作る。このような微弱な自然放射線の電離作用によってできた欠陥ないし不対電子数は照射放射線量に比例して増える。自然放射線によって生じたこのような欠陥は色彩を帯びるが、これを色中心という。動物の死骸や人骨も宇宙線を含めて土壌内の自然放射線元素から出される放射線を不断に浴びながら多様な損傷を受けることになるが、この欠陥の量または不対電子の数は照射された放射線量に比例して増える。

さて、電子は自転しているため自転（スピン）による環電流はそのまわりに磁場をつくる。だから自転する電子は小さな磁石と考えられる。この電子が外部磁場内に置かれ、これにマイクロ波を送ると、不対電子はマイクロ波を吸収してスピンの向きを反対方向に変える。

さて、外部磁場Ｈとマイクロ波の振動数νが式

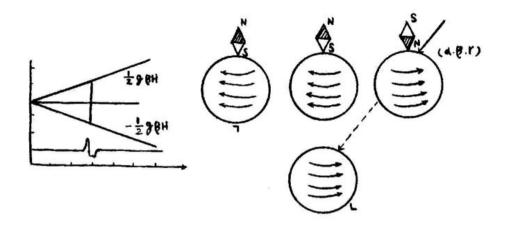
$$h\nu = g\beta H \quad \cdots\cdots ①$$

を満足させるとき、不対電子はマイクロ波を吸収してスピンの方向を変えながらより高いエネルギー準位に遷移する。これを電子常磁性共鳴という。ここで h, g, β は常数である。

電子は普通スピンの方向が反対のもの同士で対をなしているが、これが放射線を受けると不対電子が生じる。この電子を電子スピン共鳴法で検出すれば、欠陥の濃度が計算できるのである。

自然放射線によってできた欠陥には､つぎのようないくつかの特徴がある。

①　欠陥は電子スピン共鳴法によって検出される。

②　欠陥は熱や強い光線、圧力にたいし不安定で、ゼロの状態になりうる。

第２図 不対電子の発生　　第３図 磁場内のエネルギー準位

③　欠陥の濃度は照射された放射線量に比例する。

欠陥のこのような特徴を利用すると、考古遺物や地質学的対象の年代が求められる。

動植物や鉱物が外部から放射線を浴びると欠陥つまり不対電子の数はその量に比例して増加する。

したがってこの不対電子の数が物質に体現された時間の累積量つまり、経過した時間を決定するのである。

この不対電子の数つまり欠陥の濃度を放射線量に換算し、それが埋もれていたところで１年間に照射された放射線の量（年間放射線量）で割れば、その物質が生成した年代を求めることができる。

累積線量の測定公式はつぎのとおりである。

$$C(Q)/C_o=(TD+Q)/TD \cdots\cdots ②$$

または

$C(Q)=Co(1+Q/TD)$ ……………………………③

ここで Co は人工放射線照射前の欠陥の濃度、C(Q)は人工放射線をQ線量照射したあとの欠陥の濃度であり、TD は累積線量である。

上の式に最小2乗法を適用して累積線量 TD を計算する。

年間線量の測定は、その物質が埋もれていた場所から ^{238}U とその崩壊産物、^{232}Th とその崩壊産物、^{40}K などから放射される1年間の放射線量とその一帯の宇宙線を測定して計算する。

その測定公式はつぎのとおりである。

$D=K_{\alpha}D_{\alpha}+K_{\beta}D_{\beta}+K_{\gamma}D_{\gamma}+K_cD_c$ ……………④

ここで K_{α} は単位線量にたいする欠陥生成効率であり、$D_{\alpha}, D_{\beta}, D_{\gamma}, D_c$ は各々α, β, γ線および宇宙線の1年間の分量である。この公式で K_{β}、K_{γ}、K_c は骨にたいし1とみた。

年間線量の測定には多通路分析による核種分析法、イオン化線量計による測定法、化学分析法、熱ルミネッセンス法などいろいろな測定法がある。われわれは年間線量測定にイオン化線量計法と熱ルミネッセンス法を適用した。

これによる絶対年代測定公式はつぎのとおりである。

$$T=\frac{(K_{\alpha}TD_{\alpha}+K_{\beta}TD_{\beta}+K_{\gamma}TD_{\gamma}+K_cTD_c)}{(K_{\alpha}D_{\alpha}+K_{\beta}D_{\beta}+K_{\gamma}D_{\gamma}+K_cD_c)} \quad \cdots\cdots\cdots⑤$$

われわれは実験を簡素化するために自然放射線のうちα線とβ線の影響を無視してもよいよう試料を加工した。つまり骨の外面を 2～5 ㎜程度はいでγ線と宇宙線の影響だけを考察した。

そうすると絶対年代測定公式はつぎのようになる。

$T=(TD_{\gamma}+TD_c)/(D_{\gamma}+D_c)$ …………………⑥

われわれはこの公式を使って檀君陵から出土した人骨の年代を測定した。

2　試料の選択と準備

試料の正しい選択と加工は、年代測定の精度を高めるきわめて重要な実験工程のひとつである。

放射線損傷は高温ではゼロの状態になり、強い刺激つまり圧力や光線によっても不安定になるため、試料の加工時、高温、圧力、光の影響を受けないようにすることが重要である。われわれは遺骨の緻密質部分を数ｇ採り、外面を 2～5 ㎜はいで磁器製のすり鉢で粉末状にし、0.1～0.2 ㎜のふるいにかけた。そして光の影響が無視できるようにするために赤色燈の下で加工した。

試料に含まれている水分はシグナルの感度に影響を及ぼす。水は電気双極子であるためマイクロ波を吸収する。それで水分のある試料を空洞共振器に入れると、水分子がマイクロ波を吸収するため年代測定が困難になる。そこでわれわれは試料を十分乾燥させ、液体窒素浴（77°K）で測定した。

準備した試料をいくつかに等分し、^{60}Co のγ線をそれぞれ違ったやり方で照射した。

照射線量率は $2.6 \cdot 10^{-2}$C／kg・分±1%にし、γ線源からの距離 40㎝、2 次標準線量計 2,570Å型で測定した。この測定装置の誤差は±1%であり、受感部は空気イオン化箱である。

照射線量を測定した結果はつぎのとおりである。

照射線量	照射時間
19.2 Gy	19 分 58 秒
38.4 Gy	39 分 56 秒
57.6 Gy	59 分 54 秒
77.8 Gy	79 分 52 秒
96.0 Gy	99 分 50 秒
115.2 Gy	119 分 48 秒
134.4 Gy	139 分 46 秒
153.6 Gy	159 分 44 秒
172.8 Gy	179 分 42 秒

照射線量誤差は±3%であるが、これは試量の厚さによる前後線量誤差である。

3　檀君遺骨の累積線量の測定

電子スピン共鳴年代測定法では、骨や鍾乳石などの 2 次生成物が形成される際、自然放射線による損傷はゼロであったと仮定する。

電子スピン共鳴法で骨試料にたいする累積線量を測定する際、コラーゲンの分解によって生じるシグナルが観察されるが、このシグナルは自然放射線の照射によるシグナルとは異なる位置に生じるので容易に区別できる。

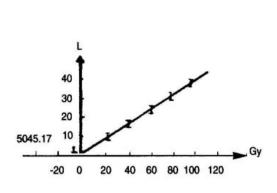
自然放射線照射によってできる骨試料の損傷は外部磁場Hが 3,360±50.0 ガウスの近くで観察される。このシグナルのｇ値は 2.0011 である。

準備された試料をつぎのような条件のもとで測定した。

マイクロ波の出力を過度に高めるとシグナルの強度が飽和傾向を呈するため、4 mＶに固定して試料を測定した。そしてシグナル検出の効率を高めるため、100KHz の磁場変調をかけて微分曲線を得た。一般的に変調幅によってスペクトルが異なる。変調幅が小さいとシグナルの強度は劣るが分離は良好である。それで磁場回復時間を 16 分にし、応答時間を 1 秒に保った。装置の増幅度は 5×10^{3}、試料は 60 mgを採った。標準試料は MgO を使い、相対的シグナル強度を計算した。もちろん、Mn^{2+}のシグナルを内部標準試料に利用できるが、γ線照射によって Mn^{2+}のシグナルが減少する傾向があるので適当でない。それで MgO を空洞共振器の底に置いて測定した。

われわれは電子スピン共鳴装置で累積線量を 30 回測定した。この測定装置にコントロール用コンピューターとＡ－Ｄ変換機をつないで検出感度を高めた。実験の再現性は十分に保障されていた。この装置で測定した総累積線量は 5,026.92±0.29mGｙであった。

他方、この年代測定値の正しさを検証するために、他の研究機関の最新型電子スピン共鳴装置を使ってさらに 24 回測定したが、その際の檀君骨の総累積線量は 5,045.17±0.29mGｙであった。

測定したスペクトルと結果はつぎのとおりである。

第４図　累積線量の計算グラフ

第５図 骨の電子常磁性共鳴微分曲線

4　檀君の骨が出土した場所の年間線量測定

自然放射線の線量は自然界で一定であると仮定した。

自然放射線の線量を計算するためには原則として試料内に含まれている放射性元素からのα線、β線, γ線と外部からのβ線およびγ線、宇宙線を測定しなければならないことはいうまでもない。しかし、宇宙線の影響はきわめて弱く、地球上で普通 20～25μGy／yr である。年間線量の計算に当たって、檀君陵内の土から ^{238}U 系列と ^{232}Th 系列の放射平衡を仮定し、γ線と宇宙線だけを測定して評価した。新しい骨では ^{238}U や ^{232}Th などの放射性核種が少ないとみて初期の浸透を無視した。

シンチレーション・カウンターに記録計をつないで相対測定誤差を 1%に保ったという実験経験にもとづいて、われわれはシンチレーション・カウンターに計数器をとりつけたが、このとき相対測定誤差は1%程度であった。

この測定装置で檀君陵内の土から ^{238}U 系列、^{232}Th 系列、^{40}K が放出する年間線量を測定したところ、1,006.75μGy／yr であることが確認された。

われわれは年間線量測定値の正確性を検証するため、熱ルミネッセンス計器（$CaSO_4$：Tm）を 3 か月間土中に埋めて測定した。その値は 1,005.98μGy/yr であった。

5　檀君の骨の絶対年代とその信憑性にたいする考察

檀君陵から出土した人骨の絶対年代は、いまから 5,011±267 年前である。相対誤差は 5.4%で、信頼確率は 95%である。

この絶対年代値が信頼できるのは、まず最新科学分析設備で測定されたからである。電子スピン共鳴装置は自動化のレベルが高く、その測定感度は 10^{-11} モルまで測定できる超微量分析機である。そして、年間線量測定機は従来の測定機に計数器を組み合わせたもので、文化層（土壌）から放出される放射線をより正確に測定できる設備である。

つぎに、檀君の骨の年代測定数値は統計学上の見地からみても十分信頼できるものである。われわれが測定した年代値は相対誤差が 5.4%で非常に正確であるばかりでなく、標準偏差も±267 であまり大きくない。これは統計学的に 2σの信頼区間にあるということを示している。

この年代値の信憑性は最後に、実験工程が科学的におこなわれたことで保証できる。試料の選択とその加工処理はα線、β線そしてγ線の走行距離を考慮しておこなったので、試料の全処理工程が科学技術的に裏づけられ、^{60}Co のγ線照射も第 2 次標準器具で測定したばかりでなく、試料の厚さによって吸収線量率を確かめ、3%であることを確認した。

したがって檀君遺骨の絶対年代測定数値は、実験装置の信憑性からみても、数値処理の統計学上の要求からみても、実験の科学技術的工程の側面からみても確実に信頼できる数字であるといえる。

このように檀君陵が発掘され、そこから出土した人骨の絶対年代が 5,011 年と確認された結果、檀君が神話的存在でなく、平壌の一角に古朝鮮国家を

建てた朝鮮民族の始祖であるということが解明され、かつて檀君を抹殺し、それを通じて朝鮮民族の歴史を中傷してきた日本帝国主義者とその御用史家の罪業が明らかになり、5,000 年の悠久な朝鮮民族の歴史を世界にいっそう強く輝かせるようになった。

檀君陵人骨の人類学的特徴

社会科学院考古学研究所室長
博士　副教授　張宇鎮

このたび発掘された檀君陵からは古朝鮮の建国始祖檀君の遺骨とともにかれの妻の遺骨が発見された。陵の玄室内には鑑定の結果、2 体分に相当する 86 片の各部人骨が保存されていた。そのうち比較的よく保存された 42 片が檀君の骨、12 片がかれの妻の骨であった。残り 32 片も両人の骨だと思われる。

骨は原状通り棺台に置かれていたのでなく、片隅で混ざりあっており、頭蓋骨は残っていなかった。日本帝国主義侵略者が朝鮮占領初期から数回にわたって檀君陵を盗掘したからである。このひとつの事実からしても、かれらが檀君朝鮮の歴史を抹殺するために、いかに悪辣に策動したかを知ることができる。

檀君陵の発掘状況についての報告を受けた偉大な金日成同志は、陵から出土した遺物のうち人骨が基本であるとし、骨の鑑定を正確におこなうよう指示した。

陵の遺骨の人類学的研究は、大きく二つの目的をもっておこなわれる。そのひとつは、陵に埋葬された人物の個人識別、つまりかれが誰であるかを明らかにすることであり、いまひとつは、埋葬された人物を通じて当時代の人びとの人類学的特徴を解明することである。

この陵で発掘された 2 体分の遺骨は、陵に埋葬された人物が檀君とかれの妻であることを示す重要な個人識別資料のひとつである。

まず、陵で発掘された人骨の性別を調べてみた。

遺骨の性別鑑定は骨盤と体骨にもとづいておこなわれた。

骨盤の性別は 10 歳ごろから現れるが、性成熟期には顕著になる。それは

女の骨盤が男の骨盤と異なる機能を果たすからである。女の骨盤は妊娠時胎児を支え、分娩のときには産道の役割を果たす。したがって男の骨盤は女のそれとは形態構造的に明確な区別がある。

出土した一対の骨盤は厚く頑丈であるうえ、高さも高く幅は狭い。恥骨下の各部位は弓形でなく 60° 以下の角度をなし、腸骨櫛は厚く粗い。腸骨の間隙はそれほど離れていずやや垂直に位置し、閉鎖孔は高く比較的丸い。恥骨結合部分の高さは高く、耳型部分は平らで横の溝は形成されていないか、形跡（狭く浅い）があるだけである。このようにどこから見ても男の特徴的な様子がはっきりと現れている。つまりこれは間違いなく男の骨である。

女の骨の性別鑑定は骨盤が残っていないため、手足の骨によっておこなった。女の骨は相対的に小さくて細い。そして骨の外殻が一様で、筋肉が付着する部分の骨のひだの発達程度も非常にわずかである。女の骨がどれも繊弱であるのは、男より力が弱く肉体的負担が少ないことにある。幼いころから力仕事をした女の場合は、骨が男の骨のように太く頑丈にみえる特徴もある。

檀君陵に埋葬された女は労働をしないで育った貴族出身の人であったため、体の骨のどの部分からも繊弱な女の特徴が典型的によく現れている。このように檀君陵には陵の主人である檀君とともにかれの妻の遺骨が安置されていた。

つぎに、檀君陵に埋葬された二人の生存年齢を調べてみた。

人骨は形態構造的に不変でなく、年とともにたえず変化するため、その変化の特徴が年齢鑑定の基礎として利用される。とくに成長期にあたる人であると、骨の変化ははっきりと現れる。この時期に化骨核が作られ漸次骨となる過程や骨端軟骨が骨化もし、骨端部と骨幹部が互いに融合したり退化したりするなど一連の変化過程が順次規則正しくおこなわれるので、成長期の人の年齢はかなり正確に推定することができる。しかし、老年期の遺骨の年齢鑑定は容易ではない。この時期には主に頭蓋骨の結合部分がどれだけ融合あるいは閉鎖されているかなどで鑑定される。

檀君の年齢は現在良好な形で残っている骨盤で推定した。骨盤の耳型部分と恥骨の結合面が年齢によってかなり鋭敏に変化することが明らかにされ

てからは、それが年齢鑑定の指標としてよく利用されているのである。例をあげると、耳型部分では20歳から60歳までの年齢をおよそ5歳間隔で規定することができ、恥骨結合面では18～50歳までの年齢を10段階に区別して推定することができる。

鑑定結果、檀君は当時としては非常に長生きした長寿者であったことが明らかになった。それは骨盤の恥骨の結合面と耳型部分の形態構造的変化による。

周知のように恥骨の結合面では 50 歳、耳型部分では 60 歳までが年齢に応じた形態構造的変化がはっきり現れる。つまり骨盤ではそれ以下の年齢しか鑑定できない。ところが檀君の骨盤には年齢鑑定に利用できる各部分に最高限界の表徴がはっきりと形成されていたばかりか、高齢の老人たちにみられる特徴もあった。骨盤の耳型部分と恥骨の結合面から骨質の外面が崩壊、吸収されてなくなる現象が広い面積にわたって現れていたのである。したがって、檀君はきわめて高齢の老人として一生を終えたといえる。

檀君が長寿者であったことを評価するうえで必ず念頭におかなければならないことは、人びとの平均寿命である。檀君時代には、成人男子の平均寿命が世界的に40歳未満であった。.

檀君の妻の骨からは若い女の特徴が現れている。それは多くの骨から骨頭と骨端が分離される現象が認められたことにある。

つぎに、檀君の体格について概括する。

身長は手足の骨から推定した。それは、身長と手足の骨には一程の比例関係があるからである*。

＊　トロッターとグレッサーの身長推定基準表（1958年）

1.22×（大腿骨＋腓骨）＋70.24±3.18

1.22×（大腿骨＋脛骨）＋70.34±3.24

2.40×（腓骨）＋80.56±3.24

2.39×（脛骨）＋81.45±3.27

2.15×（大腿骨）＋72.52±3.80
1.68×（上腕骨＋撓骨）＋71.18±4.14
1.67×（上腕骨＋尺骨）＋74.83±4.16
2.68×（上腕骨）＋83.19±4.25
3.54×（尺骨）＋82.00±4.60
3.58×（撓骨）＋77.45±4.66

檀君の身長を足の骨から推定すると 171.3㎝ であり、腕の骨から推定すると173.2㎝であった。したがってその身長は170㎝以上であったといえる。檀君は身長の分類上長身に属していたのである。

人間の身長は時代の流れにつれてしだいに大きくなる方向で変化する。だから時代をさかのぼると身長はしだいに低くなる。変化の大きさは地域と時代によって格差があるが、その変化の方向はどの地域、どの時代でも共通している。ここ100年間に10㎝程度身長が伸びた民族も珍しくない。

朝鮮の場合も時代とともに身長は漸次伸びている。資料によれば先鋒郡西浦項遺跡の新石器時代の人は身長が 157.2ｃｍであったが、同じ遺跡の青銅器時代の人はそれよりかなり大きく164㎝であった。そして檀君とほとんど同じかその時代よりややおくれた時代の人の場合にも背丈は中背、それも低目の中背（160～164㎝）に属している。実例として咸鏡北道会寧市のコムンケボン遺跡の住民は 163㎝、羅津一先鋒市羅津区域の草島遺跡の住民は164.1㎝、咸鏡北道茂山郡の虎谷遺跡の住民は 162.1㎝ であった。それよりかなり後世になる高句麗人の身長も 165～168㎝ の域を出なかった。黄海南道安岳郡の故国原王陵、慈江道時中郡の魯南里塚、平安南道大同郡の徳花里塚などの資料がそれである。

また、檀君は手足の骨が長いだけでなく太い。したがって、当時としては身長が相当高く、体格が非常にりっぱな人物であったと認められる。

檀君が生まれ育ったころは衝突と戦争が頻繁に起きた時代である。かれは原始時代の末期に平壌一帯で種族連合をつくり、周辺の種族を統合あるいは征服して朝鮮最初の古代国家古朝鮮を建国した。したがって、檀君は抜きんでた軍

長から王になった朝鮮民族の始祖である。当時の軍長は誰もが武人にふさわしく体格がすぐれていた。武人の偉容はすぐれた体格によって担保される。それは戦場でつねに先頭に立つべき軍長にとって欠かせぬ基本的要素であったといえる。

鑑定の結果が示しているように、檀君は当時、誰にもひけをとらない大きく頑丈な体格の所有者であったのである。

体格を規定する背骨指数によると、檀君は老年ではあったが、背中がまっすぐのびた体形であり、三つの体格指数からおして、体格は調和がとれ発達していたことがわかる。

では、どうして陵に安置された檀君の遺骨が 5,000 余年後のいままで腐らず、このようにりっぱに保存されていたのだろうか。

それは一言でいって、檀君の遺骨が腐敗腐食作用も風化作用も受けない有利な場所に埋葬されていたことにある。このような埋葬条件がととのってさえいれば、どんな骨でも腐るどころか化石となって永久に保存されることもあるのである。

この陵で檀君の遺骨がいままで保存できたのは、第 1 にそれが石灰岩地帯に埋葬されていたからだといえる。

檀君陵は浸食されてくぼんだ石灰岩の間を深く掘って、その岩盤の上に玄室がつくられている。したがって埋葬された遺骨は石灰岩に含まれた水溶性鉱物質が多く溶解している地下水ないし水分の浸透をずっと受けてきた。

周知のように、最近では以前には想像すらできなかったはるか昔の地層からも人骨が発掘されている。はなはだしくは、200 万年前の人骨が保存されている例もあるが、それは骨が化石化したからである。

人骨の化石化は骨の中にある有機質が鉱物質と入れ替わり、骨の中に生じた空隙に鉱物質が充たされ石のように固くなる現象である。石灰岩地帯の地下水は石灰石中の水溶性鉱物質を溶解もし、また溶解した鉱物質を沈殿させたり結晶にしたりもする。石灰岩が溶けてできた鉱物質の多い地下水や水分がたえず遺骨に作用すれば、骨の細胞のなかに鉱物質が析出してそこを埋め、さらに腐ってできる空隙にも鉱物質が入りこむ。このような現象は水溶

性鉱物質が多く含まれた地下水の流れる石灰岩地帯で見られる。世界中で人類の化石が石灰岩地帯の自然洞窟や石灰岩の陰で発掘されるのもそのためだといえる。朝鮮にも「力浦人」「万達人」「勝利山人」「豊谷人」「竜谷人」などと呼ばれるすべての人類化石が石灰岩洞窟の堆積層から出土している。

したがって、檀君の遺骨がいままで保存されてきたのは、水溶性鉱物質が多く溶解している石灰岩地帯の土壌のなかに埋葬されていたためだといえる。

この骨も一定の化石化過程を経ているため、骨が相対的に重く、叩くと若干金属性の音がする。

この陵で檀君の遺骨がいままで保存されたのは、第 2 に遺骨の腐食作用がない土壌の中に埋葬されていたためだといえる。

周知のように、5,000 余年前に作られた墓に骨が残っていたこと自体は少しも不思議な現象ではない。もちろん、つねに見られることではないとしても、そんなに珍しいことではないのである。

朝鮮にも数千年前の墓穴からほとんど完全な人間の遺骨が少なからず出土している。咸鏡北道会寧市南山里にあるコムンケボン遺跡からは、小高い丘陵性山地の斜面で点式発掘をしただけでも 10 余体の人骨を発見した。そしてその対岸の延吉県小営子遺跡からもかなり多くの人骨が発掘されたという資料が伝えられている。

中国の黄河中・上流一帯の西安半坡遺跡からは 100 余体に達する人骨が発掘されたが、これを ^{14}C 年代測定法で絶対年代を推定したところ、前 4300 ～前 3600 年のものであったという。さらにシベリアのバイカル湖付近でもセロボ期（前 3,000 年紀）とグラズコボ期（前 2,000 年紀）の墓が多数出土したが、そこでも数十体の人骨が保存されていた。

原始墳墓で骨が良好に保存されているのは大体二つの埋葬条件によるものといえる。それらは貝殻の堆積場を墓にした場合と砂質土中に墳墓をつくる場合である。

貝殻の堆積場で骨が腐食しないのは、石灰岩地帯のようにその土壌のなかに水溶性鉱物質を多く含む水分があるからだといえる。貝殻も水溶性鉱物質を含んでいる。もちろん、雨水のはけがよく乾燥条件が保たれることとも

関連している。これからおしはかってみても檀君の遺骨が保存される条件は十分ととのっていたといえる。

砂質土の墓地で骨が腐ったり浸食されたりせずにりっぱに保存されるのはよく知られていることであるが、粘土層の墳墓でも骨が残る場合がある。それはコムンケボン遺跡の発掘によって知られた。粘土層に埋葬された二つの墓穴でも骨がかなりよく保存されていた。これはその埋葬地の酸度と関係がある。

埋葬地の土壌が酸性を帯びている場合には、たとえそれが弱酸性であっても骨の無機質が徐々に溶解されるため骨の組織が保存されず、しだいに浸食されてなくなる。しかし、檀君の遺骨が安置された陵内の土壌は酸性ではなく、骨が腐食せず保存のよくきく典型的な中性土壌であった。檀君陵が石灰岩地帯に位置し、また陵の土壌が中性であるため、檀君の遺骨がじつに5,000余年間も保存されたのである。

檀君陵から出土した遺骨を鑑定した結果、檀君が伝説的ないし神話的人物でなく実在の歴史的人物であるということが判明した。

それはまず、遺骨が昔の文献記録に檀君の墓と伝えられた陵から出土したことにある。檀君が実在した歴史的人物であったため、その陵から遺骨が出土したのである。それを箕子墓の実例をあげて説明することができる。高麗粛宗（1096〜1105年）の時代から平壌には箕子の墓があると伝えられてきた。しかし、それがにせの墓であったため、朝鮮戦争後その墓を調査してみたものの、そこには遺体を安置する棺施設すらなく、煉瓦や磁器のかけらが出土しただけであった。これは前3世紀末に書かれた『尚書大伝』の「箕子伝説」つまり「箕子東来説」[6]がつくりごとであることを物語っている。

檀君のように実在した人物の墳墓にのみ棺施設があり、また、棺台に遺骨が残りえたのである。

檀君が実在の歴史的人物であるということはさらに、その遺骨が数千年間保存のきく埋葬条件のととのった地域に埋められていたうえ、化石化の程度からその遺骨の古さが確証されたことにある。

檀君が実在の歴史的人物であるということは、最後に檀君が長寿者であ

り、武人の体格をそなえた人物であったということにある。
　檀君についての古記録はかれが長寿者であったことを伝えているが、実際に檀君の遺骨も当時としては珍しく長寿した老人の遺骨であった。そして檀君は世襲的な王ではなく、朝鮮最初の古代国家を建てた朝鮮民族の始祖であったことから、当然武人にふさわしい体格の持ち主だったであろう。この遺骨の鑑定結果はかれが大きく頑丈な体格の持ち主であったことを示している。
　したがって檀君陵に安置されている男の骨は疑いなく檀君の遺骨であり、先に分析したような人類学的特徴をもつ実在の人物なのである。

檀君陵についての史料

金星政治大学研究士
教授　李畯永

　過去朝鮮を占領した日本帝国主義の狡猾な檀君抹殺策動によって、多くの檀君関係歴史文献資料が消失した。しかし、江東にある檀君陵については、朝鮮人の先祖の間で古くからそれが檀君の墓であると語り伝えられており、また同様なことが明記されている現存資料も少なくないのである。

　檀君陵については1530年に完成した『新増東国輿地勝覧』に記されている。勝覧の江東県条古跡欄には「大きな墓がある。1基は県の西方3里の地点にあり、周410尺に及ぶ。民間では檀君の墓だと伝えられている」と書かれている。

　江東県西方3里（1里は約400m）の地点にある大きな墓とは今回発掘された檀君陵のことである。現在の江東邑から檀君陵までの距離は約1㎞であり、その方向も西北方である。付近にこの陵のほかに古墳とくに大きな陵は見当たらない。

　勝覧の江東県条古跡欄にはいまひとつの大墓についてつぎのように書かれている。その大墓は、「県の北方 30 里に…位置しており、民間では昔の皇帝の墓であると伝えられている」と。それは江東県からの距離と方向からして、現在の平城市庚申里にある庚申里第1号古墳を指している。

　檀君陵について記されている史料にはまた、1626 年に編纂された『江東誌』がある。『江東誌』に書かれている檀君陵についての記録は『新増東国輿地勝覧』のそれと同じである。

　檀君陵についての記録は、『李朝実録』にもいくつか見られる。

　まず『粛宗実録』の 1697 年 7 月壬午日条には、西方の政事にたいする王の質問に答えた李寅樺の言葉と関連して、「江東の檀君の墓と平壌の東明王

の墓を毎年修理することを上奏し承認を得た」と書かれている。

つぎに『英祖実録』には檀君陵についての記録が 3 か所ある。この実録の 1739 年 5 月戊辰日条には、英祖王が「檀君と…諸王の墓を修理するようにと命じた」と書かれており、1763 年 4 月己酉日条には、英祖王が「前王朝（高麗王朝）の旧陵と檀君、…新羅、高句麗、百済の始祖陵を修理するよう命じた」と記されている。また『英祖実録』1774 年 5 月癸酉日条には、英祖王が「檀君の墓から前王朝の諸陵にいたるまで、いまなお祭祀をおこなうことがのりとされている陵は、監司が直接巡視し…適時に補修するが、それはすべて募集した人夫によっておこない、経費は保管米から控除するようにと命じた」と記載されている。

『粛宗実録』とは違って『英祖実録』の檀君陵関係の記録には、ただ「檀君の墓」となっており、「江東にある檀君の墓」とは書かれていない。しかしそれは当時、檀君陵が江東にあるということが周知の事実であったためである。それはその後に編纂された『正祖実録』の記録を見れば明らかである。

『正祖実録』1786 年 8 月己酉日条には、承旨徐瀅修の建議をいれて、「檀君の墓を修理し墓守りの家を置いた」と書かれているが、記録によればそのとき徐瀅修はつぎのように建議している。「臣（徐瀅修）が江東県令であったとき、県の西 3 里ほどのところに、周 410 尺の墓があるのを見ました。故老の話によれば、それは檀君の墓だと伝えてきたものであり、柳馨遠の『輿地志』にもそう記されています」

徐瀅修の言葉にある、墓が江東の西 3 里（約 1,200m）のところにあるということ、墓の周が 410 尺であること、故老がその墓を檀君の墓だと伝えていることなどは、『新増東国輿地勝覧』の記録とまったく同じである。

そのとき、徐瀅修の建議によって、墓が修理され墓守りが置かれただけでなく、江東の県令が春と秋墓を巡視し、平安道観察使（監司）も巡視の際墓へ行ってみることが制度化されたのである。また墓の付近で薪を切り出したり牛馬を放し飼いすることは厳禁された。このことは、当時、江東に檀君陵があることがよく知られた事実であったことを示している。

以上の文献資料をつなぎあわせてみると、江東の檀君陵は 17 世紀末即ち

粛宗時代に李朝封建政府によって補修、管理されるようになったといえる。

しかし、それより古い『世祖実録』の記録によれば、江東檀君陵の管理がそれよりはるか以前からおこなわれていたことがわかる。

『世祖実録』によれば、1456 年 3 月丁酉日、集賢殿直提学梁誠之が国王につぎのように建議している。「当該官吏が前朝鮮、後朝鮮、三国、高麗などの王朝が都に定めていた開城、江華、慶州、平壌…地方などにある王陵の地をこまかく探し、功徳を残した王には 3 戸の墓守りを、功徳のない王には 2 戸の墓守りを置き、王妃の陵にも 1 戸ずつおいて賦役を控除し、薪を切り出さぬよう見張らせるとともに、陵のある地方では春と秋に陵を見まわり、祭祀をおこなうようにすること」と。ここでいう「前朝鮮」とは「檀君朝鮮」のことである。

梁誠之の建議がいれられたとすれば、古朝鮮と高句麗の首都であった平壌地方の王陵を残らず探し出し、墓守りを置くことにしたのであるから、江東にあった檀君陵も当然その対象になったであろう。だとすれば、『新増東国輿地勝覧』に書かれている江東のその墓が民間で檀君の墓だと伝えられていたというのが、当時急に語り出されたのでなく、それよりはるかに遠い昔から言い伝えられてきたのは明らかである。

これについては『高麗史』の記録をみてもわかる。『高麗史』(58 巻)地理志にはつぎのように記されている。「江東県は仁宗 14 年(1136 年)、京畿を分け六つの県にしたとき、仍乙舎（インウルサ）郷、班石（パンソク）村、朴達串（パクタルゴツ）村、馬灘（マタン）村を合わせて本県をつくり、県令を置いて平壌府の所属県にした」と書かれている。

この記録で平壌府に所属する江東県の朴達串村は、大朴山、阿達山など周辺の山名とも結びついており、檀君とかかわりのある村名であったといえる。朴達串村は『新増東国輿地勝覧』の江東県古跡欄にも記載されている。これらは朴達串村が檀君と関連した古跡地であることを示している。今回の檀君陵発掘の過程に、墓の前で高麗時代のうわぐすりを塗った瓦の破片が発見されたことと、墓の様式が高句麗墳墓様式であることは、高麗時代はいうまでもなく、それ以前の時代からこの墓が檀君陵であると認められていたことが十分に推定できる。

後世の記録であるが、1935 年に編纂された『江東誌』と 1936 年に編纂された『平壌誌』にも今日の檀君陵のある村の名前が「檀君洞」または「檀君殿洞」と記されている。これは 1930 年代までその墓は檀君陵であるとされ、保存されてきたという根拠のひとつとなるものである。

以上すべての文献資料は、江東にあるその墓が檀君陵であることを確認している。それはまた、平壌を首都として古朝鮮を建てた建国の始祖檀君が死んで埋葬されたところもまた平壌地方である江東だということを明確に示している。

檀君陵についての史料が明白であるにもかかわらず、神話的存在とされた檀君とその陵が実在の歴史的人物とその陵であることが明らかにされたのは、ひとえにチュチェの歴史観を踏まえて檀君の文献資料研究を深めたたまものである。

檀君の出生と活動

社会科学院歴史研究所室長
博士　副教授　姜仁淑

平凡な人間の一生は人びとから容易に忘れ去られるが、檀君のように民族のための偉業をなしとげた人びとの業績はいつまでも民族の魂に宿り、永遠に生きつづけるものである。檀君にまつわる伝説や記録が5,000年の昔から今日まで伝わっていることはその証左である。

檀君にかんする史料は、かれの出生と活動についての一連の事実を伝えている。

まず檀君の出生についてみることにする。

檀君が生まれるはるか以前から今日の平壌一帯には天神を最高神、族祖神として崇める種族があったが、動物を信仰していた種族を統合し、一つの共同体を形成していた。この共同体で支配的地位を占めたのは、天神を族祖神とする種族で、その頭が共同体の酋長となった。『三国遺事』や『応製詩註』に引用されている『古記』の檀君神話では、その最後の酋長が桓雄であったとしている。

神話のなかで、桓雄が天から降りたとしているのは、天（太陽）神を族祖神として信じていた種族が自分たちの頭を天の下した人物として崇拝した事実に神秘的な粉飾をほどこしたものである。

桓雄は、近隣村落の動物信仰種族の頭の娘と結婚し、檀君をもうけた。このように檀君は当時もっとも権威のある名門に生まれたのである。

檀君陵から出土した檀君の遺骨の年代測定によれば、かれが生まれたのは5,011±267年前である。

檀君の生地は、いまの平壌であった。

平壌が檀君の生地であるという根拠はまず、平壌市江東郡に檀君陵があ

ることである。昔からわれわれの先祖は死者をその故郷に埋葬するのをならわしとしてきた。この風習は現在にもうけつがれて同姓の村落などでは先山（先祖の墓所）を大事に管理し、死人はそこに葬っている。海外に住む老齢期の同胞たちが死後故郷に骨を埋めたいと願うのは、こうした祖先伝来の風習に根ざすものである。

このようにみると、平壌に檀君陵があるということは、檀君が平壌で生まれたことの明らかな証拠となる。

檀君の生地が平壌であるという根拠はつぎに、多くの史書の記録が檀君の生地を平壌一帯としていることである。『三国遺事』と『応製詩註』の著者たちは、檀君の父桓雄が天から地上にはじめて降りた（檀君の生地）という太白山が、妙香山であると指摘している。『東史纂要』『東国歴代総目』『増補文献備考』などでは神々しい聖人檀君が太白山に降りたとし、『東史補遺』では太白山で生まれたとしているが、これらの史書の著者たちは太白山とは妙香山のことであるとしているのである。『八域志』では妙香山のマユミ（檀）の木の下に檀君の生まれた石窟があるとし、『寧辺誌』は「妙香山香盧峰の南側のふもとに檀君窟」があり、民間ではそこが檀君の生地だと伝えているとしている。近世の『東国歴史』『東史輯略』『東国史略』などでも檀君が妙香山で生まれたとしている。妙香山にはいまでも檀君の出生にまつわる伝説がある。

古来われわれの先祖はもっとも高い山を指して太白山と呼びならわし、さらには天神崇拝の観念から天神が降るという聖山を太白山と呼んだ。そういうわけで、かれらは、建国始祖の出生と建国という特異な出来事を聖山太白山と結びつけたのである。

桓雄や檀君のほかにも、高句麗の始祖東明（高朱蒙）王の出生を太白山と結びつけたり、渤海の建国の地を太白山のふもととしているのもそうした事例である。太白山という名の山は随所にあったが、朱蒙王の出生や渤海の建国と関連して言われている太白山は今日の白頭山である。朱蒙王の出生や渤海の建国を高句麗ないし渤海の首都から遠く離れた太白山に結びつけたところからみて、檀君が妙香山で生まれたという歴史の記録や伝説も、かれが

平壌で生まれた事実をその一帯の聖山太白山（妙香山）と結びつけたものと思われる。九月山で檀君が生まれたという民間伝説もそうしたたぐいのものである。
　檀君が平壌で生まれたことは、金富軾が『三国史記』のなかで、首都丸都城が魏の毋丘倹の侵略軍によって破壊されたので、247 年、高句麗は平壌城（今日の平壌）を築き、住民と宗廟社稷を移したとし、つづいて、「平壌は本来仙人王倹が住んでいたところ」であったと述べていること（高句麗本紀東川王 21 年）からも理解できる。
　金富軾の言う「仙人王倹」とは誰か。1325 年に李叔琪が書いた司空趙延寿の墓誌銘は「仙人王倹」が三韓以前の人で 1,000 年以上生き、平壌城を開いたとし、かれを「平壌君」と書き記している（平壌はプルナの吏読式表記、ナは原を意味し、プルは檀君のことである）。かれがほかならぬ『三国遺事』『応製詩註』で桓雄の子とされている檀君であり、『三国遺事』に明記されている「檀君王倹」である。
　したがって、金富軾が平壌を指して「仙人王倹が住んでいたところ」と言ったのは今日の平壌が檀君の本籍地であり、生まれ育ったところであることを意味する。
　このほかにも、『高麗史』『新増東国輿地勝覧』以来多くの史書は、今日の平壌を檀君朝鮮の首都だとしているが、それらは檀君が平壌で生まれたことを前提にした記述である。したがってこれも平壌が檀君の生地であることの根拠となるのである。
　平壌一帯は風光の美に富み、丘や平野をひかえ、気候も温和で昔からひときわ住みよいところとして知られた。だから 100 万年前祥原コムンモル遺跡を残した原人このかた力浦人（旧人）、’万達人（新人）、朝鮮旧時代類型人たちがこの地方に住みつづけたのである。
　民族の始祖檀君も山紫水明の地平壌で生まれた。平壌は民族の聖地にふさわしい土地なのである。
　つぎに檀君の活動についてみよう。
　檀君が生まれ成長したのは、種族間の戦争が絶えなかった時期であった。

この戦争で勝ち残り、他の種族を支配するためにはなによりも武術に長じていなければならなかった。

それで檀君も少・青年時代に弓術、槍術、剣術など武芸の練磨に励んだものと思われる。妙香山の香盧峰に檀君が武術をねったという檀君台と矢を射る標的にしたという天柱石の伝説が伝わっているのは、檀君の行跡を名山の珍しい形をした岩に結びつけたものである。

檀君の生涯と活動において特筆すべき出来事は、かれが建国偉業を果たしたことである。この歴史的出来事は決して一朝にしてなしえたものではない。

小さいときから自然と社会のことわりを理解するために人一倍努めた檀君は、青年時代になると共同体内の一連の深刻な社会的問題に関心を向けるようになった。

檀君の成長期の社会の構成員たちは、共同体の酋長（桓雄）と氏族の貴族（風伯、雨師、雲師）と共同体の一般構成員たち（3,000 人の民）からなっていた。

酋長と貴族は共同体の一般構成員の上に君臨した特権層であり、酋長は祭事と政事をともにつかさどった。

当時の社会は定着農業を基本とする農耕社会で農業が生産の基本的分野をなしていた。より多くの財富を得るための種族間の征服戦争で戦利品を独占し、裕福になった特権層と一般構成員間の貧富の差は大きくなり、種族間の対立が激化し、戦争捕虜は奴隷に転落した。

こうして従来の血縁的なつながりのかわりに、支配する種族と支配される種族、富裕な特権層と奴隷をはじめ貧困な共同体構成員間の対立と闘争がしだいに基本的社会関係をなすようになり、このような対立を抑制する手段としての刑罰が萌芽の形ではあったが適用されるようになった。こうして原始的共同体を維持することはもはやむずかしくなった。　　　、

酋長の子に生まれ、成長の過程でそのような社会的現実を目撃しながら活路を模索していた檀君は、父親のあとをついで酋長になったあと、共同体の政治機構を階級間、種族間の対立を抑制する暴力機構に漸次変革、発展さ

せていった。

檀君はそれまで社会の維持、強化のために遂行した酋長の重要な任務（穀物、生命、疾病、刑罰、善悪）を分けもつようにし、穀物、疾病、刑罰、善悪などを主管する官吏と官職を置いた。

それと同時に酋長が直接指揮する部隊を根幹にして支配階級の利益を擁護する軍隊を新たに編制し、軍事担当官職を置いた。

天を祭るなどの信仰行事は従来酋長が管掌したが、そのころからは後世に天君と呼ばれるようになった人びとの専門の仕事となり、信仰行事も支配階級の支配に仕えるようになった。

このような社会的変革にもとづいて、檀君は前 3000 年紀初に都を平壌城に定め、東方で最初の国を建てた。この国の国号を古文書では「朝鮮」と呼び、創業者を「パクタル（ペダル）王」と呼んだが、後世漢字で「檀君」と表記されるようになった。

元来「パクタル」とは檀君の父系種族の古くからの名であった。太陽を燃えさかる火の塊とみたこの種族の族祖たちは、太陽を指す「プル（パル、パク）」を種族名にしたのであったが、その後その居住地であった山の古い朝鮮語「タル」を加えて、自分たちを「パクタル」族とも呼んだ。「プル（パル、パク）」や「パクタル」という言葉は今日では「明るい（光明）」、太陽の昇る「明るい山」というきわめて平凡な意味に解釈されるが、もともとこの種族名は、われわれの先祖は太陽（火）であり、われわれ（種族）自身は太陽の後裔であるのだからこの世でもっともすぐれた種族であるという強い自負心に根ざしていた。このような視点からみるとき、「檀君」という名称には、われわれの建国始祖は天が降した王である、という深い意味がこめられているのである。その後「プル（パル、パク）」「パクタル（ペダル）」はわが民族の通称となった。中国の史書である　『史記』『逸周書』『漢書』『左伝』などの伝える「夫婁（プル）、不（プル）、発（パル）、亳（パク）」は、われわれの祖先の名称であり『管子』軽重甲で「発朝鮮」と書かれたのは、「朝鮮（古朝鮮）」を建てた住民が「パク（パクタル）」であることを示す明白な証拠である。

建国後、檀君は人民を農耕、機織り、畜産などの生業に専念させ、たち

後れた生活方式から抜け出して、新しい文化生活を営むよう教えた。古文書で檀君が人びとに髪の結い方を教え、食事、服飾、住居生活における君主と臣下、男性と女性との区別を守るよう礼儀を教えたというのは、そうした事実の一端を示すものである。

このような変革を通して国の経済力をはぐくみ、文化を発達させ、国力を振興した檀君は、周辺の種族を統合して領土を広げた。『高麗史』や『新増東国輿地勝覧』など古文書は、江華島の摩離山（摩尼山）で檀君が天を祭ったという塹星壇があり、檀君の 3 人の息子が築いたという三郎城があったと伝えているが、それは檀君時代に古朝鮮の領域が拡張された事実を物語っている。もともと平壌を中心にしたさほど広くない領域を占め小国として発足した古朝鮮は、檀君の積極的な活動によって広大な領土を領有した国家に発展しはじめた。

長生きした檀君は出生地の平壌で死に、そこに葬られた。

檀君の一生はわが民族史において一瞬にすぎない。しかし、かれが東方最初の国家を建てたことによって、わが国では長い原始時代が終わりを告げ、朝鮮民族は国家時代、文明時代を迎えることになった。それは檀君の最大の功績であり、わが民族史におけるひとつの画期的な出来事であった。

古朝鮮の成立と首都の問題

金日成総合大学歴史学部室長
教授　博士　玄明浩

古朝鮮は5,000年前檀君が建てた朝鮮民族最初の古代国家である。

広く知られている朝鮮の民族古典『三国遺事』『帝王韻紀』『世宗実録』地理志などは、朝鮮人民のあいだに古くから伝承されてきた『古記』『檀君古記』『檀君本紀』などの古記録を引用して、わが国の歴史で檀君という人物がはじめて朝鮮という国を建てたと明記している。

とくに『三国遺事』朝鮮条に引用された『古記』には、古朝鮮国家成立の礎が檀君の父親桓雄の時代に強固に築かれたと伝えている。桓雄の記事は、3,000 人の人びとを従えて人間界に降った天神桓雄が風をつかさどる風伯、雨をつかさどる雨師、雲をつかさどる雲師などを引き連れて農業生産と人間の生死運命、疾病、刑罰、善悪など人間社会の万事を主管したとしている。

桓雄にかんする話は神話のベールで包まれているが、それをはがしてみれば、原始社会末期、国家発生前夜の社会相がはっきりとみてとれるのである。桓雄記事に登場する天神（桓雄）は当代社会の最高首位者、原始共同体末期の酋長を天にたとえたのであり、風伯、雨師、雲師などは、最高首位者を補佐する側近を指し、3,000 人の人たちは統制と圧迫のもとで生活した一般大衆であろう。

このことは、当代社会が社会全般にたいして統一的指揮をする最高首位者などの上層部と、かれらの指揮、統制のもとにある下層部にはっきり分化されていたことを示している。

他方、社会の最高首位者とその側近たちが主管したとされる五つの主要事項を検討すると、社会生活における「善」と「悪」にたいする判断を示し、それを原始的な倫理道徳的教化手段に使うという旧来の社会管理方法がなお

持続していたとはいえ、当時すでに「罪」を問い、刑罰を加えるなどの権力的支配方式が適用されていたことがわかる。これは当時、社会の上層部が権力を行使する特権支配層に、下層部が被支配階層に転化し、特権支配層が権力手段を利用して社会を支配しはじめてはいたが、それでもまだ原始的道徳規範をもって社会を導いていた原始社会末期、国家発生前夜の社会発展の様相を見せているものと思われる。『三国遺事』『帝王韻紀』そして『世宗実録』地理志に引用された『古記』『檀君古記』『檀君本紀』などで桓雄の子とされている檀君は、ほかならぬこのような国家発生前夜の父親桓雄の時代を継承して朝鮮の民族史に登場した人物であった。

檀君時代に入って社会の階級的分化過程が促され、社会生活がいっそう複雑になるにつれて、社会全般にたいする統一的指揮を保障し、下層人民にたいする支配を強めるうえで、全一的な権力的支配機構を設ける問題が特権支配層にとってもはや差し迫った要請となった。檀君はこのような機の熟した要請をとらえて、原始的社会組織を全一的な権力機構である国家に変え、国号を朝鮮と称したのである。こうして朝鮮の民族史にはじめて朝鮮という国家が形成され、それ以後朝鮮史に現れる歴代王朝の国はすべてこれを源流として綿々とつづいてきたのである。後世の朝鮮人が朝鮮の建国者檀君を朝鮮単一民族の始祖、崇拝の対象としたのはゆえなきことではない。

最近、朝鮮の学界では、檀君陵から出土した遺骨を測定し、その結果、檀君がいまから 5,011 年前に出生した人物であることを科学的に判定した。

では、いまから 5,011 年前に生まれた檀君が実際に朝鮮（古朝鮮）という国をいつ建てたかという問題が提起される。

檀君の建国年についてはこれまで一般的に前 2333 年であるとされてきた。しかし、それは檀君の生年がその遺骨によって科学的に判定されたいまではまったく意味を失った。古朝鮮の建国年が前 2333 年、つまりいまから 4,326 年前であるとすれば、檀君が数百歳にもなって国を建てたことになるが、実際の人間生活でそんなことはありえない。

檀君の建国年が前 2333 年であるという説は、高麗 13 世紀末の李承休の『帝王韻紀』に由来するものであるが、そのとき李承休は朝鮮民族の始祖檀

君の朝鮮建国年が中国の帝堯の建国年とまったく同じ戊辰年とみて、それ以後の歴代王朝の存続年代を収録している。『帝王韻紀』は朝鮮の歴代王朝の存続年代だけでなく、中国の堯以来の歴代王朝の存続年代も同様に収録している。この両国の年代を対照して通算してみると、その戊辰年はいまから4,326 年前の戊辰年であることがわかる。李承休は具体的な資料にもとづいて檀君朝鮮の建国年と中国の堯の建国年が同じだとしたのではなかった。ただかれは、檀君が朝鮮ではじめて国を建てた朝鮮民族の始祖であり、中国では堯がはじめて国を建てた中国漢族の始祖であるというところからそのような論法を立てたのである。李承休は固陋な他の漢学者にくらべて朝鮮の民族史に深い関心を向けてはいたが、それでもやはり、当代社会を支配した中国の天子中心主義史観から完全に脱皮していなかったため、朝鮮の始祖を中国の始祖より先行させることができなかったのであろう。

当時、中国の史書には司馬遷の『史記』五帝本紀におけるように、堯より 257 年も先行しているとみる軒轅黄帝を自国の始祖とする見解もあった。しかし、李承休は司馬遷の『史記』より数百年前に孔子によって編纂されたとされる『尚書（書経)』をより権威ある史書と認め、漢族の始祖を軒轅黄帝ではなく堯であるとみたのである。

他方、中国の堯の建国年を戊辰年とする説は李承休が生存していた当時の高麗では通説となっていたが、中国ではそれ以前から戊辰年より 24 年前の上元甲子、甲辰年説をとっていた。朝鮮でも李朝初以来それを受け入れて堯の建国年を戊辰年ではなくそれ以前の甲辰年とみるようになった。しかし事大主義に染まった李朝の官僚学者・文人は、檀君の建国年を従来の戊辰年に固執し、中国堯の即位 25 年にあたる戊辰年に定着させてしまった。こうして中国堯の建国年は内外の学界で前 2333 年＋24 年＝前 2357 年にくりあげながらも、檀君朝鮮の建国年は従来通り前 2333 年として通用させられたのである。檀君朝鮮建国年が前 2333 年であるとした説の内幕はおよそ以上のようである。

上に見たようにこれまで通用された檀君朝鮮建国年を前 2333 年とする説は実際の史実を無視し漢族の始祖とされる堯の年代を参考にして設定したも

のだけに、その適用上の錯誤いかんにかかわりなく、今日ではなんの意義ももたなくなった。

今日では檀君の遺骨によってかれの絶対出生年が科学的に判定されたのであるから、われわれはそれを基準にして建国年を確定すべきである。もちろんそれを絶対年として指定することはできないが、いまから 5,011 年前、つまり前 31 世紀末に檀君が出生したことから、かれによる朝鮮建国年を前 3000 年紀初とみるのがもっとも当を得たものだといえよう。

このように朝鮮民族は、前 3000 年紀初にこの国を建てて未開な原始状態から抜け出し、文明への発展の道を切り開いた先進民族、5,000 年の悠久な歴史をもつ誇り高い民族になれたのである。

古朝鮮の首都、檀君の都は平壌であった。

檀君と古朝鮮問題の研究では、檀君による建国過程と建国年問題とならんで、かれが国を建てるさいに定めた都、首都の問題も同様に明白にすべき問題のひとつである。最近おこなわれた檀君陵の発掘結果は、この問題を新しい角度から考察することを求めている。

過去の社会では、王の陵墓を首都の付近に設けるのが一般的な慣例であった。そのような見地からみるとき、江東の檀君陵が本物の檀君の墓であると確認された今日の時点で、檀君の都もはるか遠くの遼東地方ではなく、当然檀君陵がある平壌に求めるべきである。

古文献の記録は檀君の都、古朝鮮の首都がここ平壌であったことをはっきり示している。前述の『三国遺事』朝鮮条に引用された『古記』には、檀君が朝鮮建国にさいして都に定めたのは明らかに平壌だとしている。それは檀君の都と関連した最古の史料のひとつだといえる。『三国遺事』の著者一然は、『古記』に現れる平壌がほかならぬ著者の生存当時の名西京だと強調している。このような文献記録の内容を檀君陵の資料と結びつけてみるとき、古朝鮮の首都が今日の平壌だと断定できるのである。

今日の平壌が檀君朝鮮当時の首都、その中心地であったということは、高句麗東川王のときの 247 年の遷都記事を通じても確認できる。『三国史記』高句麗本紀東川王 21 年条には、東川王のとき人民と宗廟社稷を平壌に

移したという内容を記し、その「平壌は本来仙人王倹が住んでいたところである」と書き加えている。この記事は247年に高句麗が臨時首都を平壌に移した事実を伝えた資料であるが、問題はそこに添えられた平壌にかんする回顧内容である。仙人王倹とはすでに広く知られているように檀君王倹つまり檀君朝鮮始祖を指しているのである。ここで平壌を本来檀君王倹が住んでいたところであるとしたのは、言葉をかえていえば檀君王倹の旧都だという意味である。これは檀君から数千年、古朝鮮が崩壊したときから千数百年がすぎた時期にも朝鮮人が檀君の旧都が平壌であったことを忘れていないことを示している。平壌が檀君の都であったことを伝える文献記録は枚挙にいとまがないほど多い。

　国家は一般的にまず、生産に有利で防御に便利な地帯に、そして原始時代以来文化が発展してきたところで発生する。

　平壌とその一帯は元来早くから朝鮮の先祖たちによって切り開かれた人類発祥地のひとつであった。つとに祥原郡コムンモル一帯で原人が発生し、その後旧人である「力浦人」、新人の「竜谷人」「万達人」「勝利山人」などと、さらにその血を引いた朝鮮人民の祖先である朝鮮旧時代類型人が平壌とその一帯に広く分布して暮らした。かれらはこの一帯に居住地を定めて自然を征服し、経済と文化をたえず発展させた。平壌とその一帯は大同江と多くの支流に恵まれて農業生産と交通に便利であったばかりでなく、大小の山や川に囲まれて防御にもきわめて有利な地帯であった。

　平壌一帯のこのような自然地理的条件と先行時代から蓄積してきた社会的・歴史的要因は、この一帯にどの地域よりも先に国家が発生する可能性をもたらした。山河の麗しい平壌に生まれた檀君は、平壌一帯のこの有利な条件を最大限に利用してここに都を定め、朝鮮という国を建てたのである。

　平壌はこのように人類発祥地のひとつであり、朝鮮民族の始祖檀君の魂を宿した民族の発祥地であり、朝鮮最初の古代国家古朝鮮の都であった。5,000年の悠久な民族史は古朝鮮の首都平壌にはじまり、平壌を拠点にして連綿と発展の道を歩んできた。長い歳月にわたって朝鮮の祖先が平壌を崇めてきたのはいわれのないことではなかった。

われわれの祖先は代々檀君が生まれた古朝鮮の首都平壌を朝鮮民族の原故郷とみなして神聖化し、平壌の伝統的地位を重視し、それに依拠して民族の代を継いできたのである。

わが民族史のこのような流れは、高句麗時代にはっきりと現れた。古朝鮮につぎ東方の大強国として登場した高句麗は、自らを古朝鮮の継承者であるとして、檀君の都平壌を大いに崇め、重んじた。

高句麗は早くも 247 年に平壌を副首都と定めてここに宗廟社稷を移し、427 年には国内城（集安）から平壌に首都を完全に移した。従来多くの人たちは、高句麗の平壌遷都を主として三国統一の見地から説明した。もちろんそうした解釈も正しいが、平壌遷都問題の全面的把握にもとづく説明だとはいえない。

高句麗が首都を平壌に移したのは、平壌の長い歴史と高い文化を誇る朝鮮民族の原故郷であったという事情と切り離して考えることはできない。高句麗の平壌遷都は檀君の都平壌に首都を移し、その伝統的地位に依拠して三国の統一を果たし、わが国を単一の民族国家につくりあげようという意図に根ざしたものであるとみるべきである。247 年に高句麗が平壌を臨時首都とした事実を述べながら、平壌が仙人王倹すなわち檀君の都であったと強調した『三国史記』高句麗本紀東川王条の記事は、その一端を伝えているのである。

高句麗の継承国高麗もまた、平壌を崇めて平壌重視政策を実施し、たびたび平壌遷都を試みた。

高麗の執権者たちが平壌をいかに重視したかは、918 年の高麗建国後まっさきに推進した最大の事業が平壌の再興であったし、南方の情勢がきわめて複雑多端であった建国初期に、太祖王建が毎年のように平壌（西京）地方を巡察したという一事をもってしても十分に推察できるであろう。

高麗が平壌を重視し、その建設に力を集中したのは、平壌が東方の大強国高句麗の首都であったからばかりでなく、すすんでは朝鮮民族の発祥地であったという伝統的地位とも関連している。高麗は平壌に首都を移し、平壌を拠点にして国土を統一し、古朝鮮や高句麗と同じような強国をつくる考えであった。932 年に王建は「最近西京を復興し民を移住させてそこを強化したのは、その地力に依拠して三韓を平定し、そこに首都を定める」ためであ

ったとし、当時さまざまの事情でただちに実行に移せなかったことにたいし遺憾の意を表した。

　平壌へ首都を移そうという高麗人の志向は、940 年代に本格的な準備段階に入った。もっとも遷都の準備は平壌遷都を主張する定宗と王式廉らの死によって中断されたが、高麗人のそのような志向と動きはその後もつづいた。1130 年代中期、仁宗王の代に妙清らによっておし進められた平壌遷都運動はその明らかな例証である。

　朝鮮の民族史は、高句麗、高麗など平壌重視政策を高くかかげた国によって統一運動が力強く進められ、その過程で檀君を始祖とする朝鮮民族の統一国家が形成され、民族的尊厳を輝かせたということを示している。

　檀君が実在の人物であり、古朝鮮の建国始祖であることが立証され、古朝鮮の首都檀君の都が平壌であったということが明らかにされたのは、朝鮮の古代史分野で達成されたひとつの成果だといえよう。

檀君の建国史実を伝えた『魏書』

金亨稷師範大学講座長
博士　副教授　金柄竜

朝鮮の史書のなかで檀君神話をはじめて伝えた『三国遺事』は、その冒頭で『魏書』に書かれていたという檀君の建国記事を紹介している。

それはつぎのとおりである。

「魏書には、2,000 年前檀君王倹がいて、都を阿斯達に定め、国を開いて朝鮮と号したが、それは堯と同じ時であったと述べられている」

『三国遺事』に引用されたこの記事は簡単ではあるが、建国者とかれが建てた国の名、首都、建国の時など、古朝鮮の建国にかかわる主要史実を伝えている。

『三国遺事』の著者一然は『魏書』からこの記事を引用している。だから『魏書』は『三国遺事』に檀君の話の素材を提供した文献である。

『魏書』という名をもつ本で現在残っているのは、3 世紀晋の学者陳寿が著した『三国志』中の魏書と 6 世紀中期北斉の魏収が編纂した『魏書』の 2 種である。

ところでこの二つの本には、『三国遺事』が『魏書』の引用であるとした檀君記事が掲載されていない。それで以前、今西龍をはじめ日本帝国主義御用学者たちはこれを根拠として、『魏書』の檀君記事は一然のつくりごとであると主張し、あまつさえ『古記』の檀君神話まで否定した。

しかし『魏書』に類する本は今日まで伝えられているものより散逸したほうがはるかに多いということを考えあわせるとき、そのような見解は正しいといえない。

中国の史書には『魏書』という正式の題名をもつものや俗に『魏書』と呼ばれていた史書が非常に多かった。

『魏書』とは魏の歴史を記録した本のことであるが、中国の歴史には「魏」という国号をもつ国がいくつかあった。春秋戦国時代に周の諸侯国のひとつで、のち「戦国7雄」のひとつとなった魏、前3世紀末晋と楚のあいだにあった魏、三国時代の魏、南北朝時代の魏などがそれであるが、そのうち三国時代と南北朝時代の魏を扱った名のある史書だけでも 20 種近くにのぼっている。

まず三国時代の魏（曹魏）の史書で現在まで伝えられている陳寿の『三国志』魏書をはじめ南宋の学者裴松之が『三国志』を注釈するさい引用した王沈の『魏書』、夏侯湛の『魏書』、魚豢の『魏略』、陰澹の『魏記』、孫盛の『魏氏春秋』と『魏世籍』、魏文帝の『魏典論』そして著者不詳の『魏武故事』『魏名臣奏』『魏世譜』『魏末典』などがあり、それらより少しおくれて編纂された唐の元行沖の『魏典』、孫寿の『魏陽秋異同』まで加えると実に 14 種にのぼる。

つぎに、南北朝時代の魏（拓跋魏）の史書と伝えられるものとしては魏収の『魏書』があり、これに先立つものとして鄧淵、崔浩、高允らが編纂した編年体形式の史書、李彪、崔光らが編纂した紀伝体形式の史書、そしてのちに編纂されたものとしては隋の時代の魏澹の『後魏書』、張大素の『後魏書』、裴安時の『元魏書』がある。

上に列記したように、『魏書』といわれる史書は何冊もあった。だから現在まで伝わっている『三国志』の魏書と魏収の『魏書』に檀君の記事がないとして、『三国遺事』に引用された『魏書』の記事は信用できないとするのは荒唐な主張である。

それに、現在までに伝わっている『魏書』にしても、必ずしも編纂当時の姿をそのまま保っているのではない。魏収の『魏書』は宋の劉恕らが校正したとき散逸していたものが 29 編にものぼっていた。

したがって、現在残っている『魏書』を本位にして論ずるのは事理にあわないのである。

それに、一然が古朝鮮の歴史に言及しながら、わざわざ著書の冒頭からありもしない『魏書』を捏造して叙述するなど考えられないことである。

このようにみてくると、『魏書』の檀君記事を否認する根拠はどこにもなく、一然が、今日まで伝えられてはいないが、『三国遺事』の編纂当時は残存していたどれかの『魏書』から檀君記事を引用したのは確かだといえる。

では、どうして中国の文献である『魏書』に檀君の記事が叙述されたのであろうか。

『魏書』の著者が他国の建国にかかわる史実を捏造するはずがなく、そんな必要もなかっただろうから、著者は朝鮮の史書あるいは朝鮮人の話から得た資料にもとづいてそう書いたに違いない。『魏書』の檀君記事をみると、それが『魏書』の著者の文体ではなく、朝鮮の先祖が書いたものをそのまま引用したものであることが容易に判断できる。「2,000 年前」「堯と同じ時」に国を建てたと、その建国時期を中国の文明開始と同時だとしているのは、自国の悠久な歴史に強い誇りをいだいていた朝鮮の先祖たちによってのみ堂々と書ける記事である。

こうした事実に照らしてみるとき、檀君の記事がいつか中国に知られ、『魏書』に記述されたものといえるのである。

実際、中国との歴史的な関係をみても、そのような事情は十分にくみとれる。三国時代の魏や南北朝時代の魏が中国のどの王朝よりも朝鮮の古代史料を容易に入手しうる状況にあった。246 年、毋丘倹の率いる魏軍が高句麗を侵略したさい、侵略軍は高句麗の首都を一時占領し、高句麗軍民の反撃にあって敗走したが、そのさい、大々的な略奪をおこなった。略奪品のなかには、文化財として高句麗初に編纂された『留記』をはじめそれまで蓄えられた書籍が入っていたことは推察に難くない。これについては、『三国志』魏書東夷列伝の序文で編者の陳寿自身も言及している。実際、『三国志』は朝鮮古代の史料をどの本よりも豊富に扱っている。『三国志』の場合のような状況は、他の『魏書』にもあてはまるであろう。

後魏の時代も、436 年に高句麗と国境を接して以来、一貫して和親関係を維持し、使臣が毎年のように往来していたから、朝鮮の歴史がかれらに伝えられる機会はいくらでもあった。つまり、どの『魏書』であれ、朝鮮古代の史料を容易に得ることができたといえるのである。

他方、一然には『魏書』から檀君記事を引用するのに好都合な条件が十分にそなわっていた。

高麗王朝は修書院など国家的な学問研究機関に中国の多くの古書を所蔵していたが、そこには中国ですでに散逸していた書籍もあった。それで、1091年（宣宗 9 年）、宋はその国に滞留していた高麗の李資義を通して書籍を送ってくれるよう要請さえしている。それらのなかには、上に列記した孫盛の『魏氏春秋』、魚豢の『魏略』など『魏書』のたぐいも数種あった。

一然は当時、高麗王朝の諸文化事業に深くかかわった国師であった関係上、そのような史書を十分に参考にすることができた。だからかれは『古記』の檀君神話を考証する目的で『魏書』の檀君記事を引用したと思われるのである。

それでは、檀君記事を伝えた『魏書』は具体的にどの本であったろうか。

一然は『三国遺事』を著述したさい、『三国志』魏書を『魏志』、魏収の『魏書』を『後魏書』と書いている。それにこれらの本には檀君記事がないのだから、問題の『魏書』はすでに散逸した『魏書』に求めるべきであろう。

ところで、南北朝時代の拓跋魏の歴史を伝える史書は、三国時代の魏の『魏書』よりあとの時代の歴史を著述したものであるから、論議の対象としては適切でない。

反面、曹魏の『魏書』のなかには、3 世紀中期の魏の学者魚豢が著述した『魏略』のように、朝鮮の古代史にかんする資料をかなり詳しく載せ、扶余の建国伝説まで記した史書などがあった。こうした点からみても、曹魏の魏書類に檀君の建国記事を紹介した歴史書籍『魏書』があったとしても不思議ではない。

以上の事実からして、日本帝国主義御用史家が檀君記事を伝えた『魏書』を一然の捏造であるとしたのは、檀君神話を抹殺するための詭弁にすぎないことがわかる。

したがって檀君と古朝鮮にかんする『魏書』の記録は、檀君が「朝鮮」（古朝鮮）建国の史実を伝える貴重な資料であると認められるのである。

中国の史書である『魏書』に古朝鮮の始祖檀君の建国記事があったとす

れば、それは朝鮮で広く知られていた檀君説話が『魏書』編纂当時より前の時代に中国にまで知られ、記録されたに違いない。

古朝鮮の建国後、朝鮮人民は檀君を始祖とし悠久な歴史を生きてきた民族としての高い誇りをもって、始祖檀君の建国事績を伝えてきたのであった。

ところで、ここで問題になるのは『魏書』に記された古朝鮮の建国時期をどうみるべきかということである。

『魏書』の記事には、古朝鮮が建てられたのは「2,000 年前」の「堯と同じ時」であるとされている。これは古朝鮮の実際の建国時期とは異なる。

檀君記事を伝えた『魏書』が曹魏の歴史を扱った『魏書』のたぐいだとすれば、それらは概して 3 世紀中期～5 世紀初の晋または東晋の時代に編纂されている。このときから 2, 000 年さかのぼって計算すると、『三国遺事』に引用された『魏書』のいう「2,000 年前」とは、現時点からみて 3,500～3,700 年前になる。これを檀君陵から出土した檀君の遺骨の年代測定値 5,011±267 年前と比較すると、そこには 1,300～1,500 年の差が生ずる。

その差はどうして生じたのだろうか。『魏書』の著者が朝鮮の先祖から得た資料にもとづいて檀君記事を書いたことはすでに指摘した。

しかし、『魏書』に資料を提供した朝鮮の先祖は建国始祖檀君のときよりかなり長い時代がすぎた後世の人たちであったろうから、檀君の建国時期を正確に知っていたわけでなく、ただ檀君がかなり昔に国を建てたという莫然とした認識しかなかったと思われる。それでかれらは檀君の建国年を自分たちが知っていた最古の王とくらべて、檀君が中国の「堯」と同じ時期に国を建てたものとみ、「2,000 年前」「堯と同じ時」と表現したのであろう。そのような記録をそのまま伝えたのが『魏書』の記録であるのだから、その年は信ずるに価しない。だからその建国時期は当然、遺骨の年代測定値にもとづいて修正されるべきである。

このように『魏書』の記録は檀君の建国史実を伝える資料ではあったが、建国時期にかんする叙述は正確でなかったと言える。

『檀君神話』の主な特徴

金日成総合大学朝鮮語文学部研究士
教授　申亀鉉

朝鮮最初の建国説話『檀君神話』は史上もっとも古い時代につくられ、後世に伝えられた貴重な文化財のひとつである。

『檀君神話』は朝鮮における古代国家の出現と発展過程、原始・古代人の生活と周囲世界にたいする思考方式、文化などを研究するうえで貴重な史料ともなっている。

『檀君神話』は諸文献に見られるようなたんなる記録というよりも、長い歴史的な期間に言い伝えられて内外の諸文献に記録された口承文学に属する説話作品である。

したがって文学的側面から朝鮮最初の建国説話『檀君神話』の特徴を明らかにするのは、文学的ファンタジーに包まれている史実を確認し、論証する先決問題のひとつである。

文学的側面から考察するとき、『檀君神話』の主な特徴はまず、神話形式で朝鮮民族の始祖、民族の魂の象徴である檀君とその事績が幅広く盛られた最初の建国説話として、5,000 年の悠久な民族の生活に深く根を張り、それぞれの階級、階層によって潤色、補充されながら伝承されてきたということである。

周知のように、『檀君神話』は古朝鮮の建国始祖檀君を主人公とし、その出生にかんする話が主としてくりひろげられている。

『檀君神話』における檀君の出生にかんする話には、建国始祖としての檀君の性格を神格化する先祖崇拝心が反映されている。

『檀君神話』はこのように神話形式でストーリーが構成されてはいるが、今回の檀君陵の発掘を通して確認されたように、神話の主人公は実在の歴史

的人物で、古朝鮮の建国始祖である。
　神話形式でストーリーが構成されているからといって、神話の主人公を架空の人物とみ、その事績もつくりごとであるとするのは、史実にまったく合わないだけでなく、社会的意識の発展過程や芸術的形象創造の歴史的過程からしてもまったく誤った見解であるといえよう。
　檀君説話が神話形式で構成されているのは、それが太古の古代人によって語られはじめたものであるからであり、それが史実に裏打ちされながらも族祖崇拝の心と結びついて久しい年月にわたり連綿と語り伝えられていくうちに、民族の生活に深く根をおろしたものであることを実証しているのである。
　こうした意味でわれわれは神話的ファンタジーにたいし正しい認識をもつべきである。
　神話的ファンタジーは、人間の創造力がまだ弱く、思想・文化水準がきわめて低かった人類社会の黎明期における人びとの周囲世界にたいする原始的な思考方式と表象の産物である。
　朝鮮には『檀君神話』のような建国説話が多い。『解慕漱神話』『朱蒙説話』『赫居世説話』などの建国説話はいずれも神話・伝説形式をとっており、そのような形式で建国始祖の建国事績が盛りこまれているのである。『檀君神話』も例外ではない。
　『檀君神話』が神話的ファンタジーで朝鮮の建国始祖檀君の事績を盛りこんだ最初の建国説話であるということは、それが古くから『本紀』や『古記』などに記され、伝えられてきたものであり、その過程で桓因は帝釈または上帝に、桓雄は桓雄天王または檀雄天王に潤色されるようなこともあったが、檀君の場合だけはつねに「檀君朝鮮」「檀君王倹」などとそこに権威づけがなされていることでもみられる。
　これは檀君が神話的ファンタジーで描かれてはいるが、実在した歴史的人物であり、朝鮮の建国始祖、朝鮮民族の始祖、民族の魂の象徴として神聖化されてきたということを実証しているのである。
　文学的側面から考察した『檀君神話』の主な特徴はつぎに、神話的な形式で朝鮮原始・古代人の民族的生活を建国始祖檀君の形象を中心にして幅広く一

般化した最初の建国説話であるということである。国家と民族が存在し、国ごとに人びとの生活と思考方式がそれぞれ異なるため、説話にも国境がある。
　したがって、各国の説話には界線があり、どの国、どの民族にも属していない「汎世界的説話」などありえないのである。
　朝鮮の最初の建国説話『檀君神話』がそれを実証している。
　それぞれの国と民族の説話に界線があるというのは、それらがあくまでも民族的であるということに示されている。
　どの国、どの民族の説話であれ、そこには必ず当該民族の生活と情緒的要請および民族的嗜好が反映されている。
　そのことは、『檀君神話』と中国の殷の建国説話『玄鳥神話』を比べてみればよくわかるであろう。
　『檀君神話』には長年月にわたる朝鮮原始・古代人の生活と思考方式が一般化され、民族生活の趣が濃く、民族の独特な郷愁が漂っている。これについては、『檀君神話』の主人公檀君とその父桓雄や母の形象を通してうかがい知ることができる。
　檀君の父桓雄と母の形象からわれわれが感得しうることは、第 1 に、その性格が穏やかで気品があるということ、第 2 に、自主的な生活への志向が強く、勤勉で進取の気性に富み、楽天的でロマンチックな気質をそなえているということである。このような気質をそのままうけついでいるのがほかならぬ檀君の形象である。
　檀君の形象で見のがせない点は、建国始祖、古代英雄としての檀君が疲れを知らず、活気にみちていることである。
　これについては、檀君が 1,500 年間も国を統治し、1,908 年間も生きて、阿斯達から唐蔵京へ、唐蔵京から再び阿斯達へ移ったという説話からもおしはかれよう。
　これは檀君が縦横無尽に活動し、今日の平壌に国を建てたのち、周辺の小国を統合し、しだいに領土を拡大してついに古朝鮮を建国したこと、その後古朝鮮がおよそ 3,000 年間存続しながら、中国最古の信憑性ある殷・商時代の甲骨卜辞と西周の銅器銘文の記録にもあるように、殷と周のたえざる侵

略企図を制圧し、はるか中国万里の長城の界線まで領域を拡大して、東方でもっとも強大な古代国家として名をはせた史実を反映しているのである。
　檀君が穏やかで気品があり、勤勉で進取の気性に富み、楽天的な気質をそなえている人物として形象されているのは、長い歳月にわたる生活過程で形成された朝鮮人民の民族的特性の反映であると考えられ、そうした意味で『檀君神話』がどれほど貴重な民族的財宝であるかがいまさらのように思い起こされるのである。
　古朝鮮建国説話『檀君神話』はこのように、朝鮮労働党と金日成同志の正しい指導のもとに、檀君陵の発掘でおさめた貴重な成果を、文学的側面から確認しているのである。

平壌は古代文化の中心地

社会科学院考古学研究所研究士
副教授　準博士　石光濬

平壌市江東郡における檀君陵の発掘によってわが国が5,000年の悠久な歴史と燦然たる文化をもつ、東方で最初の先進文明国家であったことが確認された。

歴史遺跡遺物は過去の歴史の実証資料である。平壌とその一円からは古朝鮮がどのような文化を創造し、どのような過程を経て発達してきたかを示す多くの考古学的資料が発掘されている。

古代文化の中心地の問題はわが国最初の古代国家である古朝鮮の都と直接関係がある。それは、古朝鮮がわが国の古代国家のうち建国年代がもっとも早く、地域的範囲や文化的内容のうえで特別な位置を占めているからである。

平壌をはじめ西北朝鮮一円で発掘された支石墓[7]と、コマ形土器関係住居址遺跡は古朝鮮の代表的な遺跡である。

支石墓は両側に二つの板石を向き合わせて立て、その両端を閉塞石でふさいで石棺をつくり、その上に1枚の大きな蓋石をのせた古墳である。これは地上ないし半地下に築いたわが国最古の巨石建築物だといえる。

平壌とその一円で発掘された支石墓とコマ形土器関係住居址遺跡を調べると、その地域が古朝鮮文化の中心地、発祥地であることが確認できる。

平壌が古代文化の中心地であるという根拠は、第1に、古朝鮮の代表的遺跡である支石墓が平壌とその一円にもっとも多く集中しているからである。

支石墓は咸鏡北道北部の豆満江流域を除く朝鮮全域と中国東北地方に広く分布している。アジア地域では、古代の朝鮮人たちが住みついていた東部一帯でのみ見られる墳墓形式で、朝鮮の古代国家と隣接していたシベリア、内蒙古、中国本土内では見ることができない。したがって支石墓は古代朝鮮

人の創造物であるといえる。

これまで全国各地で調査発掘された支石墓の資料によると、そのもっとも多いところが平壌一円である。

平壌を中心に北は平原郡、粛川郡、順川郡、西は温川郡、南は黄州郡、燕灘郡を含めて銀泉郡、安岳郡、殷栗郡、東は江東郡、成川郡などの一円に、ざっとみても数千基の支石墓がある。

とりわけ黄州郡と燕灘郡の一部を含む黄州川流域の支石墓は 1,100 余基に達する。この膨大な支石墓の数は 100 基未満の咸鏡南北道、20 基にしかならない両江道、90 基近い江華島の支石墓をはじめ現在までわずか 108 基しか知られていない遼東地方の支石墓に比べて圧倒的に多い。

とくに平壌とその一円の支石墓分布で注目に価するのは、数十、数百の支石墓が密集している支石墓群が多いということである。平壌とその一円には 100、200 基の群をなした支石墓群が多い。竜岡郡石泉山周辺一帯と台城湖中に水没した支石墓を合わせると 250 余基で構成された支石墓群もある。

黄州郡沈村里および沙里院市広石里一帯と正方山のふもとには 360 余基の支石墓がある。黄海北道燕灘郡杜茂里に約 150 基、五徳里には 230 基、銀泉郡正東里には 200 余基の支石墓の大群がある。西北朝鮮一帯で 100 基を越える支石墓群は 6～7 か所が知られているが、そのほとんどが平壌一円に密集している。

今日まで咸鏡南北道一帯、両江道および遼東地方でも支石墓が発見されているが、平壌一円のような支石墓大群があるところは知られていない。

支石墓は当代住民の墓であり、したがってこれは平壌一円の首都近郊に多くの住民が集まって暮らしたことを物語っている。つまり、平壌地方は古代文化の中心地であり、古朝鮮国家の中心地であったのである。

平壌が古代文化都市の中心地であるという根拠は、第 2 に、平壌一円に支石墓の発祥地、起源とかかわる初期型から中期型、末期型にいたる多様な形式がすべて見られるという事実である。

支石墓は巨石を地上あるいは半地下に構造物として築造しなければならないため、支石墓の変遷は支石墓築造者の築造経験と建築力学技術の発達、墳

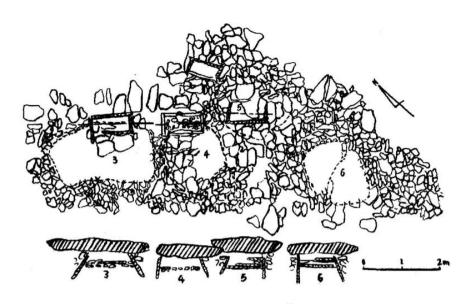
墓風習の変化、それに生産力の発達が前提となる。したがって支石墓は時代につれてその構造形式は漸次変化した。一般的に支石墓は地表から一定の高さに屍体を安置する石棺を組み立て、その上に重い蓋石をのせた地上の墓であるため、蓋石と板石のバランスが保たれなければならない。ところが支石墓の初期型である黄州郡沈村里キンドン（長洞）、天真洞などの支石墓は、蓋石の重量が 7～10ｔであるにもかかわらず、それを支えている石棺は厚さ3～4ｃm程度の薄い板石で組み立てた小さい石箱のようなものであった。

この支石墓はきわめてアンバランスである。そのかわり蓋の重圧から石棺を保護するため、石棺の周囲に一定の幅で石を積んで補強した墓域施設がある。それに蓋石と板石（支石）の規模も小さく細工の粗い貧弱なものであった。このような形式の支石墓はひとつの墓域に 5～6 基密集している。この形式を沈村型支石墓と呼び、朝鮮でもっとも初期の形態の支石墓だとみられている。

このような初期の形態から石棺を構成した支石のかたわらに厚い板石を立てて 2 重にした中間段階を経て、高さの高い五徳型支石墓と、板石の代わりに石片を積んで石棺をつくり、その上に大きな蓋石をのせた墨房型支石墓へと発達した、このように朝鮮の古代国家領域内で平壌一円には、規模と構造形式上最古の沈村型支石墓から規模の大きい発達した五徳型支石墓、墨房型支石墓へと連綿と変化していく過程を示す各種形式の支石墓がある。しかも、初期型の支石墓は今日まで知られている朝鮮の数万基の支石墓のうち平壌一円だけで発見されており、この地域以外ではまだ発見された例がないのである。

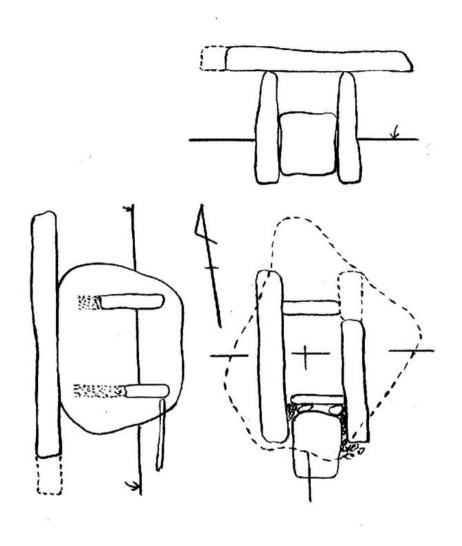
咸鏡南北道、両江道、江原道そして南部朝鮮や中国東北地方には五徳型支石墓と後期の個別的墓域の沈村型支石墓、墨房型支石墓だけがある。したがって、平壌とその一円が朝鮮の支石墓の発祥地であり、古代文化の中心地であったことは明らかである。

平壌が古代文化の中心地となる根拠は、第 3 に、平壌およびその一円には一定の地域を占める支石墓群のなかで特別規模の大きい支石墓が多いということである。

そのなかには蓋石の面積が 50 ㎡以上、重量 40～70ｔもある大型支石墓が

第 6 図 沈村型支石墓

ある。江東郡、祥原郡のものとならんで朝鮮の 3 大支石墓とされる燕灘郡五徳里支石墓、殷栗郡冠山里支石墓、安岳郡路岩里支石墓それに竜岡郡一帯の支石墓が代表的な例である。このような大型支石墓は朝鮮にある支石墓の全分布区域のなかで平壌一円にとりわけ多く集中していることが目立ち、江原道板橋郡に 1 基、咸鏡南道咸州郡に 1 基、虚川郡に 1 基、黄海南道延白地区の代表的なものとして白川郡に 1 基、遼東地方には蓋県石棚山支石墓をはじめ 2〜3 基があるだけである。

しかし、平壌および平壌一円には少なくとも 15 基以上ある。それに安岳郡路岩里支石墓は世にまれな傑作である。路岩里支石墓は蓋石の重量が 40ｔと見積もられているが、破壊以前はそれ以上で、その大きさは長さ 910㎝、幅 640㎝、厚さは 70㎝と推算されている。

支石墓の地面からの高さは270㎝である。
　この支石墓は今日まで知られている朝鮮の支石墓のなかで最大のものである。蓋石ばかりでなくそれを支えている支石と閉塞石まで合わせると、総重量がおよそ 70ｔになるものと推算されている。この大型支石墓は基礎施設、墓域施設、支石、閉塞石、蓋石を組み合わせてきわめて緻密に構築されている。支石と閉塞石、蓋石はしっかりと結合し、支石は蓋石の重さを考慮して内側に 5°～6°傾斜させている。殷栗郡冠山里の蓋石は全般的に厚さが 31㎝ になるよう滑らかに加工され、支石と閉塞石は台形に規模よく加工されている。
　このように大型支石墓に反映された精巧な石材加工術や洗練された工法など高度の建築術は、平壌一円の文化の発達程度を集中的に示している。
　それでは、この支石墓の主人公はどのような人物であろうか。
　規模の大きい支石墓は一般に、きわだった尾根あるいは丘の上に特別に目立つように建てられている。例えば殷栗郡冠山里支石墓は九月山の支脈である標高 80 余ｍの火山峰の項上に位置している。蓋石だけでも 40ｔに達する重量物を岩盤から採掘して高い峰まで引きあげ、高さ 2ｍを越える支石の上にのせるには、数千名の青壮年が非生産的な墓の築造に動員されたことであろう。ところが、このような大型支石墓から出土した遺骨は一人分のものである。悠遠な昔のこの遺跡は当時の人たちの動きをわれわれに再現させてくれる。つまり、きわだったこの支石墓の蓋石はおびただしい古朝鮮住民の集団労働と知恵を体現しており、埋葬される一人の人間のために骨のおれる肉体的および精神的力をささげなければならなかった社会関係の一面を物語っている。大型支石墓の中からは青銅鏃、石鏃や青銅短剣、石刀、青銅の琵琶形槍先、装飾青銅ボタン、美しい天河石管玉、骨製の玉、指揮棒の星形石斧や半月形斧などがしばしば出土している。このように雄大な墳墓の構造形式や規模の大きさ、暴力用具である武装装備が多く出土していることから推して大型支

第７図　安岳郡路岩里支石墓

石墓に埋葬された人物は、財富と権力を独占した権力者、奴隷主であるといえる。
　支配者である奴隷主の墓が首都の近郊に埋葬されたのは中世紀の史実によっても証明される。平壌に首都を置いた高句麗の王たちが山水の秀麗な平壌近郊である力浦区域竜山里や江西郡、竜岡郡、安岳郡などに埋葬されたということからして平壌一円の数多くの大型支石墓の主人公は、首都で暮らしていた奴隷主たちであり、このような権力者、支配者が文化の中心地である首都に集まるのは当然なことである。
　平壌およびその一円が古代文化の中心地である根拠は、第4に、この一円の村落址遺跡と出土した遺物からもそういえる。
　大同江流域と黄州川流域をはじめ平壌とその一円では数百の古代住居址が発掘された。とりわけ平壌市三石区域南京遺跡からは、前3000年ごろから前1000年紀中期にいたる長い期間人びとが住みついていた22か所の住居址が発掘された。試掘を通じて確認された住居址まで合わせると40～50か所である。そしてこれらの遺跡から焦げた籾をはじめアワ、ダイズ、キビ、モロコシが発見された。つまり、すでに3,000年前に5穀の農耕がおこなわれたことが確認されたのである。生育条件が似通っている稲をはじめ5穀の農耕を同時におこなったという資料は世界の考古学上珍しいことである。村落址は寺洞区域金灘里遺跡と北倉郡大坪里遺跡でも発掘された。とくに都市を彷彿させる150余の住居址が確認された松林市石灘里遺跡は、平壌一円に多くの住民が密集して暮らしながら文化を発展させた根拠となる。この一円で発掘された数百の住居址で構成されている村落址遺跡は、住みよい平壌一円に多くの人が集まり、主に農耕を営みながら生活していたことを物語っている。
　古代文化の中心地としての平壌一円の文化の歴史的地位は、この地域の文化が隣国の古代文化に及ぼした影響からも見うけられる。
　古朝鮮住民が最初に住んだ平壌とその一円の外にある辰国の領域

南部朝鮮には後期の支石墓だけがあり、その地から出土する遺物は古朝鮮のコマ形土器や細形青銅短剣など遺跡遺物の特性をそのまま引き継いでいる。

扶余の固有な西団山子型の土器や吉林・長春地区から出土する琵琶形短剣[8]は、古朝鮮の美松里型土器や琵琶形短剣の後身である。

古朝鮮の辺境であった遼東地方にも100余基の支石墓があるが、それらも平壌一円の支石墓形式を引き継いだものである。

朝鮮で始祖鳥化石や翼竜、恐竜などの化石が発見され、平壌で原人が残したコムンモル遺跡をはじめ旧人、新人、朝鮮旧時代類型人とつづくヒトの遺骨と古代遺跡が多数発掘されたのは山水の麗しい平壌地方が人類発祥地としての有利な自然環境にあったことを物語っている。古朝鮮住民がこのような有利な自然環境のなかで連綿と生活を営み、支石墓を数多く築造し、古代文化を発達させたのは当然なことである。

日本帝国主義の檀君抹殺策動

金日成総合大学歴史学部研究士
院士　教授　博士　朴時亨

最近、檀君陵の発掘を契機として深まった檀君研究成果が示しているように、われわれの先祖のあいだで檀君を実在の人物、古朝鮮の建国始祖であるとする伝統的観念が形成され数千年間伝えられてきたことは歴然たる事実である。

しかし、朝鮮民族のこのような伝統的観念は朝鮮を占領した日本帝国主義の陰険な策動によって余すところなく踏みにじられた。

偉大な金日成同志はつぎのように述べている。

「日本帝国主義者は朝鮮人民の民族的自覚を麻痺させるために、5,000 年の長い歴史をもつ朝鮮の民族文化を抹殺しようと企て、日本の言語、風習、文化、『神道』などを朝鮮民族におしつけました」（『金日成著作集』第 4 巻、日本語版 241 ページ）

日本帝国主義は朝鮮占領当初から朝鮮人民の民族自主意識を抹殺し、朝鮮の侵略と支配を合理化するため、朝鮮民族の 5,000 年の悠久な歴史の夜明けを輝かせた古朝鮮の始祖檀君の史実からまず抹殺しようと悪辣に策動した。日本帝国主義侵略者は檀君朝鮮の歴史を抹殺し、さらにその後のすべての史実をもかれらに有利なように歪曲、捏造することを朝鮮植民地政策の重要な一環とした。

日本帝国主義の第 3 代朝鮮総督斉藤が「文化統治」を標榜して、なによりも朝鮮人に自国の歴史と伝統から目をそむけさせて自民族の魂、民族の文化を失わせる一方、日本の歴史を誇張し、美化宣伝して日本を崇拝させることが、その重要政策であると公言してはば

からなかったことにはっきりと示されている。
　日本帝国主義の檀君抹殺策動と朝鮮史の歪曲・捏造策動は、植民地支配の全期間にわたっておこなわれた。
　かれらが檀君と朝鮮古代史抹殺策動を植民地政策の一環とした重要な目的は、なによりも檀君を始祖とする単一民族としての朝鮮人民の民族の誇りと自負を抹殺することによって、植民地支配を容易にしようとしたところにあった。かれらの植民地支配政策で最大の障害のひとつは、檀君が東方で最初の国家を建てたときから単一民族として5,000年の悠久な歴史と輝かしい文化を創造し、発展させながら力強く生きてきた民族の大きな誇りと自負心に歴史の支柱を置く朝鮮民族の強い民族自主意識であった。
　日本帝国主義はこのような朝鮮人民の強い民族自主意識を抹殺することなしには、朝鮮を容易に支配することができないと認め、朝鮮人民の民族自主意識を生む歴史的支柱としての朝鮮民族史の悠久性と先進性を歪曲、抹殺することにとりくみ、そのためにまず、朝鮮史のルーツである檀君朝鮮の歴史を抹殺しようと悪辣に策動したのである。
　かれらが檀君と檀君朝鮮の抹殺策動を朝鮮の植民地支配政策の一環としたいまひとつの陰険な目的は、朝鮮民族の「劣等性」と日本大和民族の「優越性」を捏造して説教し、朝鮮侵略と支配を歴史の名で合理化しようとしたところにあった。
　日本帝国主義は古文献が伝えている檀君朝鮮の建国年代（前2333年）が日本の荒唐無稽な建国神話が伝えている国家起源の年代（前660年）より約1,700年も先立っているため、檀君朝鮮の歴史記録を無視し、檀君朝鮮を抹殺せずには、「優秀な」大和民族が「劣等な」朝鮮民族を支配すべきであるという強盗さながらの植民地支配説を正当化しえないと認めたのであった。
　このような凶悪な目的から、かれらは檀君と檀君朝鮮の抹殺策動を手段、方法を選ばずに強行した。

かれらは檀君の抹殺をはかってなによりもまず、朝鮮の全国各地で檀君関係史書を全面的に掠奪し焼却する策動をおこなった。

日本帝国主義の初代朝鮮総督寺内は、憲兵を動員して朝鮮全国各地の書店や郷校、書院、民家をくまなく捜索し、植民地支配の妨げとなる檀君関係史書をはじめ朝鮮民族の貴重な歴史、文化、地理書を数十万巻も押収して焼き捨てる蛮行をはたらいた。その後かれらは悠久な朝鮮民族史を日本の歴史よりもおくれたものにつくりかえるため、1915 年には朝鮮総督府中枢院に「朝鮮史編纂課」を置き、1922 年には「朝鮮史編纂課」を「朝鮮史編纂委員会」に、1925 年にはさらに「朝鮮史編修会」に改編して、歴代朝鮮総督と政務総監の直接の指揮のもとに組織的な朝鮮史偽造行為をはたらいたのであった。

「朝鮮史編修会」が日本帝国主義の御用機関として朝鮮史をいかに歪曲したかは、そのメンバーをみればよくわかるのである。日本帝国主義は「朝鮮史編修会」に売国逆賊李完用をはじめ権重顕、朴泳孝などを「顧問」とし、日本側からは黒板、三浦、今西など歴史偽造のベテランを上部に配し、実務担当者には日本のブルジョア反動史家 20 名と朝鮮人史家 6 名を選定した。

「朝鮮史編修会」の日本人ブルジョア反動史家たちは、檀君と朝鮮古代史の歪曲、抹殺に全力を集中した。かれらは朝鮮史の編纂で年代が「不正確」であると認められる史料や神話は除き、いつ、どこで、だれが、なにをしたという「正確な」史料のみを編年体で叙述することを「基本原則」としてかかげた。

狡猾な日本帝国主養は、「朝鮮史」の「編纂」で資料不足を口実に「檀君朝鮮」の歴史を捨て、今西のような歴史偽造のベテランに檀君は後世に捏造された神的存在であり、実在の人物ではないと強引に「論証」させ、檀君は神話的人物であるため「朝鮮史」に記述できないとこじつけた。

日本帝国主義は檀君の抹殺に邪魔になる人物だと、たとえ日本人

であっても容赦なく「朝鮮史編修会」から除去した。
日本帝国主義がつくりあげた侵略的な歴史偽造機関「朝鮮史編修会」は、10 余年間にわたって 30 余冊にのぼる膨大な日本語版の『朝鮮史』を編纂したが、そこには約 3,000 年にわたって隆盛発展した古朝鮮の歴史は一言も言及されていない。
日本帝国主義はまた、檀君が実在の人物でなく後世につくられたひとつの架空の神話的人物であるという欺瞞的な『檀君神話』論を捏造して流布する策動を狡猾にくりひろげた。『檀君神話』論の捏造には日本の「歴史学の大家」をもって任ずる学者たちが各時期に多数参加しているが、かれらの論拠は、檀君神話が古代から伝承されてきたのでなく、13 世紀末の仏教の僧侶である一然の『三国遺事』と李承休の『帝王韻紀』などにはじめて記されたものであり、その後さまざまの史書に『三国遺事』や『帝王韻紀』の内容を転記する過程にその内容が潤色されたというものである。さらにかれらは、元来檀君の記録があったとして引用された『魏書』や檀君神話が記されている『古記』のような史書は、現存していないから信じられないと主張した。
『檀君神話』論の捏造者たちはまた、檀君神話の内容には仏教や道教の趣味が多く盛りこまれていることからみて、それは僧侶の一然が仏経や道蔵の文句を組み合わせてつくった荒唐なものだと主張した。
しかし、檀君朝鮮にかんする歴史的記録が一連の史書で枝葉の部分で多少違いがあるにせよ、その主な筋が一貫しているという事実は、この神話が後世に捏造されたものでなく、きわめて長い歴史的淵源をもっていることを反証しているものであり、また『三国遺事』に引用された『魏書』や『古記』が現存していないとの強弁は、古文献についての驚くべき無知を自らさらけだしたものにすぎないのである。.『三国遺事』は明らかに当時まで存在していた『古記』や『檀君古記』を正確に引用したものであって、架空の文献をでっち

あげたものではない。
　事実、檀君の記録がある現存最古の史書は、13 世紀末の『三国遺事』でなくそれよりも 1 世紀半も古い『三国史記』なのである。『三国史記』に「平壌は本来仙人王倹が住んでいたところである」と書かれているのは、平壌が昔檀君が都としていた地であるという意味である。だから日本の反動史家たちが言うところの檀君神話の 13 世紀末捏造説は全く成り立たないのである。
　日本の反動史家たちはまた、檀君についてあれやこれやと論じたあげく、檀君神話は結局高句麗の領域にかかわっているのだから、それは高句麗ツングース族の神話であって、今日の朝鮮民族の先祖である南方の三韓族とはなんら関係がないとし、三韓族の思想は原日本族の思想に等しいものであるなどとの雑言まで吐いている。
　かれらは檀君朝鮮を抹殺することとならんで、さらに陰険ないまひとつの野望を果たそうとしたのである。
　かれらは愚かにも朝鮮民族の歴史から強国高句麗の歴史を除いてツングース族の歴史に組み入れ、三韓の歴史を日本族の歴史に含めて「内鮮一体」を説教しようとしたのであった。かれらはその誤った主張を正当化するため、歴史学だの、考古学だの、神話学だの、人種学だの、人類学だの、言語学だのと雑多な学をつくりだしたが、健全な思考方式をもつ人であれば、これについて具体的な説明を与えなくても、それが荒唐な試みであるとただちに見抜けるであろう。
　朝鮮民族はかれらが言っているような移住民の混成体ではなく、はるかな昔から檀君を始祖として同じひとつの血筋をうけつぎ、同じ言語を使用しながらひとつの国土で同じ歴史と文化を発展させてきた単一民族である。
　日本帝国主義は、檀君を抹殺するためにまた、朝鮮の子どもたちに檀君について教えることや朝鮮人民が檀君を崇拝することさえきびしく禁じた。
　かれらが朝鮮人の子どもたちに檀君について教えることをどれほ

どきびしく弾圧したかは、1910 年代のある年に、わたしが通っていた書堂での出来事からもよくわかるのである。
　ある日、わたしが勉強していた書堂に日本人憲兵 2 人がいきなり現れた。そのとき書堂の老教師はなにか予感していたのか、子どもたちが読んでいる本のなかから 2 冊の本を隠し、落ち着きはらって座っていた。
　土足で書堂に上がりこんだ日本人憲兵は室内の本をかきまわしてみたが、狙っていた本がなかったらしく、老教師に本はこれしかないのかとあたりちらして引きあげた。
　わたしたちは憤りをおさえることができなかった。老教師の話によれば、憲兵が捜していたのは『童蒙先習』で、自分が隠した本がそれだったという。
　『童蒙先習』は、昔朝鮮の一学者が著した本で、『千字文』を学んだのちに、子どもたちが読むことになっている本であった。そこには「東方に最初君長がいなかった。そこへ天から神人が太白山の檀の木の下に降ってきたので国中の人びとがかれを国王におしたてた。西の堯と並び立ち、国名を朝鮮と号した。かれがすなわち檀君である」というくだりにはじまる簡単な朝鮮歴史がつづられている本であった。
　当時書堂で読む本のなかには外国の歴史を概説した『少微通鑑』という本もあったが、その本は日本帝国主義が禁じる書籍目録には入っていなかった。
　結局、日本帝国主義は檀君からはじまって叙述された朝鮮の史書を残らずなくしてしまう一方、幼時から朝鮮人の頭の中から檀君という概念さえすっかりとりのぞこうとしたのである。
　かれらはまた大倧教の教主をはじめ信徒たちが 1916 年 10 月、九月山の檀君祠堂である三聖祠（桓因、桓雄、檀君を祭った祠）でおこなっていた檀君祭儀を強制解散させて三聖祠を閉鎖するなど、檀君と関連した朝鮮人民の行事をいっさい禁ずる蛮行をはたらいた。

日本帝国主義のこのような檀君抹殺策動によって、檀君を実在の人物、朝鮮民族史の始祖と認めてきた先祖伝来の伝統的観念が次第に消え失せ、檀君を神話的な人物、架空の存在とみなす観念が広まるようになったのである。

こうした事実は、われわれに国を失えば民族の先祖も失うという悲痛な教訓を残している。

しかし、近年、金日成同志の正しい指導によって、檀君が実在の人物であり、古朝鮮の建国始祖であったことが科学的に解明された結果、朝鮮は実際に5,000年の悠久な歴史と輝かしい文化をもつ東方の先進的文明国として、檀君を始祖とする単一民族としての誇りを世界に広く誇れるようになり、檀君の後裔としての朝鮮人民の民族的矜持と自負は一段と高まるようになったのである。

朝鮮民族は古朝鮮時代から固有な民族文字を持っていた英知ある民族

社会科学院言語学研究所研究士
候補院士　教授　博士　柳　烈

偉大な金日成同志はつぎのように述べている。

「朝鮮人民は科学や文化の発展においても輝かしい伝統を創造した、才能あり英知に富む文化的な民族です。

われわれの祖先は古代から輝かしい文化を創造し、東方文化の開花をもたらしました」(『金日成著作集』第1巻、日本語版224ページ)

朝鮮人民は古朝鮮時代から固有の言語と文字を持ち、科学と文化を創造してきた。

朝鮮人民が誇りにしている民族文字訓民正音は、檀君の古朝鮮時代から使われたわれわれの文字にその源をおいている。

朝鮮の古い史書には訓民正音創製以前すでに一定の民族文字があったという記事がかなりみうけられる。

訓民正音創製に尽くした学者の一人申叔舟(15 世紀)の子孫である申景濬(18 世紀)も『訓民正音韻解』のなかで、訓民正音以前わが国には古くから民間で使われた文字があった、数が足りず、字形にも一定の規則がないので、一国の言語をすべて表記することはできないが、一部限られた範囲で使われた平易な文字であった、と書いている。

また高麗と耽羅(済州島)でも漢字ではない固有の文字が使われていたという記録がある。

著名な実学者李徳懋の『清脾録』は、11 世紀初戸部尚書張儒が中国の江南に行ったさい、高麗から流れてきた「瑟」という楽器の底部にある文字を中国人のために漢字に翻訳してやったというエピ

ソードを伝えている。これは高麗にも一定の固有の文字があったことを意味する。

朴趾源の『燕岩集』、韓致奫『海東繹史』、中国の古文書沈括の『夢渓筆談』などには耽羅（済州島）でも漢字でない固有の民族文字が使用されていたという記録がある。これはわれわれの固有な民族文字が済州島にも普及していたことを物語るものである。とくに注目に価するのは、訓民正音創製当時、集賢殿の副提学であった崔万里が訓民正音創製を思いとどまるよう世宗大王に建議した上奏文に「ある者は『諺文はすべて古い文字であって新しい文字ではない』と主張しているが…」「たとえ『諺文は前王朝（高麗）のときからあった』にせよ…そのまま使うべきか」と書いたことである。これは諺文すなわち訓民正音が古くからあった文字にもとづいたものであってまったく新しく作られた文字ではなく、またそのような文字は訓民正音創製以前高麗時代にもあったことを示している。

以上の史料を通しても訓民正音以前わが国には漢字と異なる固有の民族文字が使われていたことがわかる。

それでは訓民正音創製以前朝鮮ではどのような文字が使われたのであろうか？

15 世紀後半期以来国禁書であった『三聖記』では、「檀君時代に神篆（神誌篆書、神誌文字）があった」としており、16 世紀初の学者李陌の『太白逸史』（『太白遺事』ともいう）では、「檀君時代に神市篆書（神誌篆字、神誌文字）があり、太白山、黒竜江、青丘（朝鮮）、九黎（高句麗の前身である句麗の意、朝鮮語では発音が同じである）などの地域で広く使用された」と述べている。

16 世紀末に編纂された『平壌誌』では、平壌の法首橋に古い碑石があったが、その文字は訓民正音でもなく、インドの梵字、中国の篆字でもない、ある者は檀君時代の神誌が書かれたものだと言ったが、長い歳月が流れていまはもうない、と書かれている。

また、17 世紀に北崖が書いた『揆園史話』には、檀君時代に神誌が狩猟の途中鹿の足跡を見、そこからヒントを得てはじめて文字を作ったとし、以前聞いたところによれば六鎮地方には辰国以前の

時代に文字を刻んだ岩がときどき発見されており、梵字でも篆字でもないので解読できないというが、神誌が作ったという古代の文字ではないだろうか、という内容の記述がある。
　さらに李陌の『太白逸史』に引用されている「大弁説」の注には、「南海県良河里の渓谷にある岩に昔刻まれた神市文字があるが、そこには桓雄が狩猟に出かけて三神のために祭祀をおこなったと書かれている」と指摘している。この岩に刻まれた文字は「徐市の文字」とも言い伝えられたものでそれも元来は「古い朝鮮の文字」を指している。
　これらの記録を通して古朝鮮時代すでに神誌文字があったばかりでなく、朝鮮半島の北端六鎮地域から南端の南海地方にかけてはもとより、鴨緑江、豆満江以北の広い地域を占める古朝鮮の全域で広く使われたことがわかる。
　神誌は神市とも表記されたが、それは「大人物」を指す言葉で最初は「王」を指し、のちに高い官職名となり、さらに支配者、統治者を指すようになった。すなわち神誌文字とは「王や支配者、統治者の文字」という意味である。
　それでは神誌文字はどのような形をしているのであろうか？
　『寧辺誌』が伝えている神誌文字 16 字は、第 8 図のとおりである。
　字数が 16 字にすぎないところからみて、これが神誌文字のすべてではないと推察される。
　この文字の構成特徴は、表意文字ではなく表音文字、それも音節単位の音節文字であることである。
　また神誌文字の字形で一連の文字は、二つの文字要素が結合されたもので、それが字形の特徴をなしている。
　しかし、『寧辺誌』に収録されているこの 16 字だけでは、まだ神誌文字の総数やその体系、順序、各文字の音価、規則などを解明することが困難である。そこで今後とも多くの資料の収集と幅広い考察、深

第 8 図
神誌文字

度のある研究がまたれる。
　それにしても、神誌文字が檀君時代から古朝鮮で使用された朝鮮民族固有の文字であることは疑問の余地がない。
　それはなによりも、上述したように『三聖記』『太白逸史』『揆園史話』『平壌誌』『寧辺誌』などの古文書がいずれも、神誌文字は檀君朝鮮つまり古朝鮮で使用されたと記しているからである。
　それはまた、古朝鮮の遺跡からは神誌文字と同じかまたはそれと類似した文字が刻まれた土器が出土しているからである。
　平安北道竜川郡新岩里で出土した土器には、神誌文字に似た形の二つの文字（第 9 図）が刻まれており、中国、遼寧省旅大市白嵐子にある古朝鮮時代の古墳で出土した土器にもそれと類似した形の二つの文字（第 10 図）が刻まれている。古朝鮮の土器に『寧辺誌』の神誌文字にあたる文字が刻まれているということは、神誌文字が古朝鮮時代の社会で使用されたという明白な物証であり、また、それらの土器に『寧辺誌』の神誌文字に似た文字が見られるということは、『寧辺誌』があげた 16 字以外の文字があったことを示すものであって、いまひとつの重要な意義を持っている。

第 9 図 新岩里出土土器の文字

第 10 図 白嵐子出土土器の文字

　つぎに、その根拠は、文字の形が隣国の文字、例えば表意文字である中国の漢字やインドの梵字、モンゴルの文字とも異なり、音節文字である日本の仮名ともはっきり区別される独自の類型に属するということである。
　さらに神誌文字が最初から固有の民族文字として創製されたのは、文字生活と関連した基本的な語彙である「クル（文）」「プッ（筆）」「スダ（書く）」などの単語がすべて固有の朝鮮語からなり

たっているということからも明らかである。

古朝鮮時代の固有な民族文字、神誌文字の考察にあたって、解明を要するいまひとつの重要な問題は、これまで断片的にせよとりあげられてきた「王文字」や「三皇内文字」とはどのような文字であり、それらと神誌文字はどのような関係があるかということである。

「王文字」は『柳文化譜』という書物のなかで「王文が文字を書いたが、それは篆字のようでもあり、呪符のようでもある」と述べたことに由来する。この王文は古朝鮮時代の扶余国の人であるという説もあるが、実際はある個別人の名ではなく文字通り「王の文字」「支配者、統治者の文字」という意味であって、「神誌文字」を指しているのである。その字形が「篆字のようでもあり、呪符のようでもある」と言ったのは、神誌文字が中国の篆字やインドの梵字でないということを指摘したものと解釈できる。『柳文化譜』が檀君と深いかかわりのある黄海南道九月山一帯の旧文化県を本貫とする柳氏の古くからの『族譜』であるということはとくに注目に価する。

「三皇内文字」という字名は、中国の古文書である晋の葛弘の『抱朴子』にある記事に由来している。この本には「黄帝が東方の東丘（朝鮮）に来て、風山（大風山とも言う。白山、太白山を指す）を越えるとき、紫府先生に会って『三皇内文』を授かった」という記録がある。ここに言う三皇内文も「王や支配者、統治者の文字」を意味し、「王文字」と同様「神誌文字」を指しているのである。

これらの記録は神誌文字が古朝鮮時代から単一民族文字として使用され、外国にも知られたことを意味し、大きな意義を持っている。

それでは神誌文字と 15 世紀中期に創製された朝鮮の民族文字、訓民正音はどのような関係を有するのであろうか？

『世宗実録』25 年 12 月条には「この月、王が諺文 28 字を創製した。この文字は古い篆字を手本にした」とあり、当時の集賢殿大提学鄭麟址も『訓民正音』（解例）の序文でやはり、「文字は古い篆字を手本にした」と書いている。ここで言う「古い篆字」は神誌文

字を指すと解釈される。これは上述したように神誌文字を古文書ではいずれも「神誌篆」「神誌篆字」と言っているからであり、また神誌文字の後身と思われる文字が、訓民正音創製当時にもある程度使われていたからである。

あるいは「古い篆字を手本にした」という記述にある「古い篆字」を漢字の古い「篆字」と見ることもできよう。しかし、訓民正音創製者たちは「われわれの音声は中国のそれとは異なり、漢字では表現できない」と言い、鄭麟址も漢字を借用してわれわれの言葉を表記しようとするのは、「丸い穴に角形の柄をはめようとするようなものだ」と言っている。これらは漢字の古い篆字を手本にしたものでないことを端的に示している。

神誌文字から訓民正音にいたる発展継承関係を示す資料もある。

とくに 8 世紀の渤海人、大野勃の『檀奇古史』と 14 世紀李嵒の『檀君世紀』の「加林土文字」にかんする資料がその代表例である。

それらの文献には古朝鮮の第 3 代王嘉勒のときに正音 38 字を作ったが、その名を加林土と言ったと述べている。

この正音 38 字はその形が訓民正音と驚くほど酷似している。

加林土文字 38 字は第 11 図のとおりである。

第 11 図 加林土文字

これはほとんど疑う余地なく最初の神誌文字が一定の過程をへて加林土文字になり、やがては訓民正音に継承されるという系譜を示している。

神誌文字と加林土文字、訓民正音の継承関係でとくに注意を引

くのは加林土文字と日本の神代文字ー阿比留文字との関係である。

古い昔から対馬に保存されてきたという阿比留文字は第 12 図に示したように明らかに加林土文字から作られたものである。

日本の古文書である行智の『訓釈諺文解』は訓民正音（諺文）について、「古い字体といまの字体の二つがある。古い字体は三韓初（古朝鮮末期）のものが伝わったものであり、いまの字体は李朝の世宗時代に古い字体の文字を作りなおしたものである。いまその国には古い字体の文字は伝わっておらず、いまの字体の文字が伝わっているだけである。古い字体の文字はいま日本に伝わっている『肥人書』（朝鮮人の文字という意味で日本では神代文字と言われている）である」と述べている。

第 12 図 阿比留文字

ここでいう古い字体の文字とはすなわち「加林土文字」を指し、これはつまり「肥人書」「阿比留文字」「神代文字」である。

上の諸資料は古朝鮮初の神誌文字が一定の過程をへて加林土文字になり、それが古朝鮮末期の三韓初期に訓民正音の古い字体「肥人書」に発展し、不断の変遷、発展を経て訓民正音（いまの字体）に継承、完成されたことを示している。

このようにわれわれの先祖が古朝鮮時代から固有の文字を使用したことは、朝鮮民族の大きな誇りであると同時に、朝鮮の文字発展史と古朝鮮史の解明に重要な意義を持っている。

檀君と大倧教

祖国統一研究院参事
教授　博士　崔泰鎮

わが国の先祖は代々、檀君が朝鮮民族史上はじめて「朝鮮」という国を建てた建国始祖であり、人民に生業と衣食住の方法、道徳と礼儀作法を教えた聖人であったとしてかれを崇拝し、各地で祭祀をおこなってきた。

しかし朝鮮を占領した日本帝国主義は、朝鮮人の間で民族的衿持と反日民族思想が育つのを防ぎ、民族劣等意識、民族虚無主義を植えつける植民地支配政策に従って 5,000 年におよぶ悠久な朝鮮の歴史年代を半分に削減し、せいぜい 2,500 余年にしかならない日本の歴史開始年代と一致させる歴史の偽造行為を働き、あまつさえ建国始祖檀君の存在価値を否定する歴史抹殺行為をはたらいた。その結果、一部の人びとの間に檀君が実在の人物か、あるいは捏造された架空の人物かという問題が論議されるようになった。

ところが最近、社会科学院の学者たちが檀君陵を発掘して檀君の遺骨と貴重な遺物を発見し、檀君が実在の人物であったことを証明した。

朝鮮の先祖が檀君を崇拝していたことは大倧教の存在によっても実証される。大倧教の特徴は他の宗教が外来の宗教であることにひきかえて、民族内部に発生した土着宗教であり、他の宗教が外国の神を崇めているのとは違って実在した自民族の建国始祖檀君を崇拝する宗教であり、朝鮮民族の起源と単一性の視点を檀君の存在に求めるなど、民族愛を基底とする宗教だということである。

大倧教は 1909 年、日本帝国主義の侵略に抗する朝鮮人民の民族

自主意識の発現として生まれた。
大倧教の創始者は羅喆である。かれは剛直な民族主義者、反日愛国の士であった。1863 年、全羅南道宝城郡の儒学者の家に生まれたかれは、幼くして漢文を学び、29 歳のとき科挙に及第し李朝政府の官吏に登用された。それは日本帝国主義が日露戦争をひき起こし「韓日議定書」を強要するなど、朝鮮占領策動に狂奔していた時期であった。
このような侵略策動とそれに迎合する親日派、売国奴の阿諛屈従にたえかねた羅喆は、1905 年 5 月、官を辞し、志を同じくする反日愛国の士と手をとって「維新会」を組織し、反日救国運動の先頭に立った。
かれはポーツマスで日露戦争を締めくくる講和会議が進められていたとき、この講和会議で朝鮮問題がどのように処理されるかを探るため日本に渡った。東京滞在中かれは、ときの内閣総理大臣桂太郎に朝鮮の独立を保障せよと要求する手紙を送った。　、
そうしたとき、東京の各新聞には朝鮮の外交権を奪うため伊藤博文が朝鮮に派遣されるという記事が掲載された。驚きかつ憤ったかれは伊藤宛てに無謀な侵略企図を捨て、朝鮮の独立を保障せよという手紙を送った。伊藤からなんの応答も得られなかったかれは、今度は日本の天皇に同じ内容の抗議書簡を送った。天皇の返答も得られず義憤やるかたなかったかれは、その抗議として宮城前で三日間断食した。
他方羅喆は、外部大臣朴斉純宛てに「首を切られても条約に同意するな」という内容の電報を打ち、親日売国奴の売国行為を牽制した。
それにもかかわらず伊藤と「乙巳五賊」の共謀によって「乙巳条約」がでっちあげられた。これをこのうえない民族の恥とした羅喆は、日本からひそかに買い求めてきた武器で「乙巳五賊」を誅殺するたたかいを 3 度も組織したがままならず、いずれも失敗に帰した。

かれは日本帝国主義と売国逆賊に反対してたたかった罪ならぬ罪で、1907 年 7 月、27 名の仲間とともに孤島の智島に島流しにされた。

その後、刑期を終えた羅喆は、亡国の主因のひとつが事大主義に染まり、自民族の先祖をないがしろにし、孔子、孟子など外国の先祖を崇めてきたこと、言いかえれば自民族の建国始祖のことを知り崇めて団結し、外国勢力に抗してたたかわなかったことにあると痛感した。かれはこうした過ちを正すためには、檀君を崇拝し信仰する新しい宗教を創始すべきだと考えた。

かれは大倧教の創始にあたって、それまでにも朝鮮には檀君教が伝統的宗教として伝えられてきたことを念頭においた。従来の檀君教は俗に「ハンオル教」と呼ばれてきた。「ハンオル教」を扶余では「代天教」、高句麗では「真宗教」、高麗では「王倹教」、李朝では「檀君教」、間島地方では「主神教」または「天神教」と呼ばれてきた。このように檀君教の名称にはいろいろなものがあったが、檀君を崇める信仰にはいささかも異なるところがなかった。

羅喆は、このような檀君崇拝の伝統を重視して継承し、1909 年陰暦 1 月 15 日、大倧教創始運動にかかわっていた数十名の仲間とともに、ソウル斉洞の翠雲亭で大倧教の創始を宣布した。かれらはこの日を「重光節」と呼んだ。それは檀君教を大倧教と命名したことを記念する日だという意味である。大倧教の「大」は大きい、「倧」は神人という意味であり、したがって大倧教とは、偉大な聖人檀君を崇拝する宗教であるという意味である。

大倧教の創始者羅喆は、日本帝国主義が「韓日合併条約」の締結に狂奔していた 1910 年 6 月、万難を排して再び日本の東京へ行き、在野の頭山満や岡本柳之助と会って、日本帝国主義の「韓日合併」陰謀を痛烈に非難し、抗議したが、「韓日合併」を陰で助長していたかれらがそれに耳をかすはずはなかった。

その後、日本帝国主義のきびしい監視と迫害を受けた羅喆は、1916 年、九月山にある檀君の祠堂「三聖祠」へ行き、日本帝国主義の虐

政を痛嘆し糾弾する遺書を残して自決した。かれは遺書で弟子たちに、大倧教をいつまでも強く維持して檀君を崇拝し、信者の力を合わせて日本帝国主義と不屈にたたかうよう強調した。

大倧教が檀君を実在の人物として崇めたのはなによりも、先祖伝来の観念に従って檀君を朝鮮の建国始祖だと認めていたからである。

元来、民族自主意識が強かったわが国の先祖は、古朝鮮時代から建国始祖檀君を崇拝してきた。古朝鮮の人びとが平壌市江東郡に檀君陵を築き、大事に保存してきたことがそれを物語っている。高句麗人も古朝鮮の人びとのあとを受けて、平壌にある高句麗始祖東明王の陵とともに建国始祖檀君の陵をりっぱにつくり直して守護し、檀君を崇拝した。高麗人もこの伝統を守って檀君を建国始祖として崇拝した。李朝時代にも人びとは檀君を民族国家の最初の王として大いに崇拝したのだが、儒教・事大思想にとりつかれた一部の両班官吏が自国の先祖を軽んじ、他国の先祖を重んずる誤った風潮をつくりだしたため、檀君の存在が部分的にではあるが軽く見られるようになったのであった。

大倧教の教主羅喆は、李朝末朝鮮の実情を「国破民亡」と表現し、そのような事態がもたらされたのは檀君を軽視したためであると主張した。

かれは「李王朝の儒生は檀君の神聖な事跡を記録しながらも孔子、孟子、荘子、朱子の書におぼれ、檀君の神聖な教えを研究しなかった。…わが家を守ってくれた檀君を敬わずに他国の先祖を崇敬し、他国の神を敬い、他国の教理に従ったのだから、これこそ事理にもとり、常道にはずれたことではないか」と嘆いた。

かれは事大主義とその病弊をこのように慨嘆し、朝鮮民族の魂と祖先伝来の国と民族を愛する伝統を継承し、発展させて国の独立をかちとるべきだと強調し、そのためには檀君をとりもどすべきだと主張した。

大倧教創始後かれは、檀君の訓示を記録した『三一神誥』という

書物を入手し、それを大倧教の基本経典とした。
『三一神誥』は「天訓」「神訓」「天宮訓」「世界訓」「真理訓」の五つの章からなっている。これらの訓は、民衆にたいする檀君の訓戒である。これを集約して表現すれば「真理を悟り功を磨けば死後もハンオル様のもとで永遠に福楽を享受することができる」ということである。

『三一神誥』は、朝鮮の民族史上、民族自主意識が高度に発揚されていた高句麗時代に愛国名将乙支文徳や淵蓋蘇文によって深く研究され、渤海や高麗時代にもひきつづき研究された。

李朝時代にも儒教・事大主義者はこれを軽視したが、民族的良心のある無名の儒生たちによってほそぼそと研究がつづけられた。それが羅喆により大倧教の基本経典として復活したのである。

羅喆は大倧教を創始するにあたって、以前から伝えられてきた経典『檀君教八理』も重視し、それを大倧教の教理に含めた。『檀君教八理』は古朝鮮以来檀君教の原典として存在していたのを、高句麗時代に有名な宰相乙巴素が白雲山で祈りを捧げて得たといわれる経典である。乙巴素はこの『檀君教八理』を政治理念とし、政治に具現するために力を入れたという。

『檀君教八理』の基本的内容は誠、信、愛、済、禍、福、報、応の8理からなっている。それは檀君の政治理念と教化思想を8理に分けて詳説した経典である。

大倧教を創始した羅喆はつぎのような詩を詠んだ。

聖なる王倹
世を治めること4,000年
国の子々孫々すべて王倹を崇める
偉大な教化あまねく世を照らし
消えることなし
家いえで崇めまつれば
福楽とこしえに伝わらん

この詩は大倧教の信者が檀君を実在の人物と認め、檀君を朝鮮の建国始祖として崇拝してきたことを示している。

大倧教が檀君を実在の人物として崇拝するようになった根拠はつぎに、檀君がその治世理念「弘益人間」の理念を確信していたことにある。

『三国遺事』朝鮮条には、檀君が民衆に大きな利益を与えるため人間生活の360余の事柄を主管して政事をおこない、教化を施したと書かれており、『檀君古記』には「檀君王倹は三一神誥を世に布告し、366 日におよぶ神政で純朴に生きるよう民をさとしたため、その徳は天地にもひとしく、その明るさは日月のようであった」と書かれている。この記録は、朝鮮人の先祖が檀君の「弘益人間」政治を信奉してきたことを物語っている。

大倧教は檀君を実在の建国始祖と認めるとともに、檀君の政治道徳理念を心から信じ、それを広く布教した。

羅喆は大倧教を創始した直後、つぎのような『檀君歌』を詠んでいる。

われらの祖先檀君が
太白山に降臨し
はじめて国を建てて
子孫に与えた
聖なるかな聖なるかな
大皇祖の高恩聖なるかな

あらゆる苦難にうちかち
荒れ地を切り開いて
美田と良宅のいしずえ固め
われら子孫を育んだ
忘れまじ忘れまじ
大皇祖の高恩忘れまじ

…
兄弟よ　姉妹よ
倍達（朝鮮の別称）のすべてのはらからよ
わが兄弟姉妹よ
至誠をつくし心を合わせて
輝かせ輝かせ
大皇祖の恵み神教輝かせ

　このような『檀君歌』の内容は、大倧教の信者たちが檀君の政治理念を信奉してきたことを示している。
　檀君が創始したという「弘益人間」理念には、儒教の忠孝や仁愛の思想、仏教の慈悲思想、道教の「無為化」思想よりもさらに根元的である人間愛と互恵互助精神、人道主義と平和愛好精神がこもっているといえる。
　この思想は、古朝鮮以来今日にいたるまで、朝鮮民族の間で綿々と継がれてきた民族思想のひとつである。
　今日、南朝鮮にいる多くの大倧教徒は、檀君の「弘益人間」理念を信奉し、檀君の後裔である朝鮮民族は統一されるべきであると主張している。

檀君崇拝と関連した儀礼と風習

社会科学院歴史研究所室長
博士　副教授　曹大一

民族の始祖である檀君が神話のなかの存在ではなく、実在の人物であったことが解明された結果、朝鮮民族が悠久な歴史をもち、早くから先進的な文明開化の生活を営んだ民族であることが明らかになり、5,000 年の長い民族史を主体的に体系化しうる道が開かれた。

朝鮮民族は古くからこの地に単一民族として住み、自己の固有な生活風習を培ってきた。

われわれの先祖によってつくられ今日に伝わっている生活風習のなかには、民族の始祖檀君と関連のあるいろいろな儀礼風習がある。これは朝鮮民族が古代や中世はもちろんそれ以後も長い歳月にわたって檀君を敬うさまざまな信仰的儀礼や風習を継承してきたことを物語っている。

民族の歴史と思想・文化領域に特出した業績を残した実在の人物はしばしば神話的な伝説を生み、そこにかれを追慕、崇拝する儀礼風習が生まれている。

仏教の釈迦、イスラム教のマホメッド、古代エジプトのメネスなど宗教創始者や建国者を敬う儀礼や風習は、中世はもとより今日までも人間生活に深く根をおろして伝承されている。それらの儀礼風習がそれほど強い生命力を持つのは、かれらが幻想的な人物ではなく実在した人物であり、歴史のある時期において後世の人びとの精神生活や民族、国家の発展に不滅の業績と痕跡を残しているからにほかならない。

檀君を敬う古代と中世の儀礼風習の存在も、われわれの最初の国家古朝鮮の建国者であったかれの歴史的業績と実在性を示す具体的な証である。

檀君を敬う儀礼風習の特徴は、第１に、それが古代に形成され、さまざまな形で広く普及し固定化されたことであり、第２に、階級社会の歴史的環境や当代の人びとの政治的・文化的水準を反映して宗教的ベールをまとっていることであり、第３に、過去における民族固有の儀礼風習において主な内容をなしていることである。

それでは檀君崇拝の儀礼風習にはどのようなものがあったのだろうか。

まず檀君祭祀の風習をあげることができる。

檀君祭祀は李朝封建国家と当代社会の人びとの関心のなかで盛大にとりおこなわれた。『李朝実録』などの史書には、宮中、平壌の檀君祠、江東の檀君陵、九月山の三聖祠、江華島摩尼山の塹星壇などで中央と地方の官吏、一般住民の参加のもとに盛大な檀君祭祀がおこなわれたという記録がある。1412 年には太宗の命によって平壌で檀君祭祀がおこなわれ、1429 年には平壌に檀君祀堂（1725 年崇霊殿と改称）が建ち、檀君を追慕する儀礼が定期的におこなわれた。

1460 年には国王（世祖）が檀君を追慕する殿閣に出かけて祭祀をおこなった。また高麗時代に建設した九月山の桓因、桓雄、檀君天王を祭る三聖祠では 20 世紀初までほとんど毎年、春と秋およびひでりのときに飲食物を供え祭式にのっとった祭祀が盛大にとりおこなわれた。三聖祠における祭祀儀式のさいには、国王が香と祭文を送り、地方長官あるいはその代行官吏が祭式を執行するならわしだった。ときには王が側近の臣下を派遣して祭祀をおこなわせることもあった。一方、江東の檀君陵では日本帝国主義の悪辣な妨害にもかかわらず、全国各地から多くの人びとが集まり檀君祭礼をおごそかにとりおこなった。

これらの史実は檀君崇拝にかかわる儀礼が国王や一般民衆の深い関心と熱心な参加のもとでおこなわれたことを示している。

檀君祭祀は明らかに、李朝以前の高麗時代や三国時代、古代にさかのぼるに従っていっそう盛大におこなわれたものと思われる。

17 世紀に出版された『揆園史話』は、およそ天を祭って本源を忘れず恩義に報いる礼儀は檀君のときにはじまった、檀君が国中を巡行し、旧暦の 10 月には天を祭ったことがその後万代の礼法となった、と書いている。

ここで天を祭ったというのは、自種族の祖先を祭ったという意味に解釈できる。

檀君祭祀は本質上民族の始祖にたいする崇拝観念にもとづくものである。古朝鮮人にとって、自然崇拝観念とともに始祖崇拝の観念と行為は信仰心と信仰儀礼の主な内容をなしていた。かれらは、最初の文明国家を創建し広大な領土を占めて古朝鮮の政治、経済、軍事､文化の発展に多大な業績を積んだ檀君を始祖王として崇拝し、神秘視したところから、さまざまな儀礼をあみだしたのであった。

檀君を敬う祭祀風習はかれの死後に生まれ、近代に伝承されたものである。したがって古朝鮮の創建者檀君の祭祀は、朝鮮の階級社会のもっとも初期の儀礼風習であったといえる。

檀君祭祀風習は国家的、社会的にも、また民間にも広く普及していた。

朝鮮では毎年 10 月秋の収穫後新米で餅をつき、天にあるという檀君の霊を祭る風習があった。平安道をはじめ多くの地方でも、10 月初旬に住民たちが新米で餅をつき酒をつくり、家族や全村が一定の祭儀に従って檀君祭祀をおこなったのである。ある地方では新米でついた餅を庭の隅にあるわらや松づくりの檀君神壇に供えて、檀君の霊を慰め豊作を祝った。またある地方では祭祀と前後した期間には、供え物にする家畜だけをほふり、借金を取り立てるようなこともしなかった。

地方の風習や祭祀の規模に従っていくぶん差異はあったが、一般的に祭場は清浄な家の内部か外部、村の一定の場所を選び、祭壇にはきれいな紙などを敷き、その上に餅、果物、肉類、野菜、酒などを供えた。餅は必ず新米でつき、供え物にする家畜はとくに生後から飼料を十分に与えて飼育したものをあてた。

祭儀では斎戒と至誠が基本をなした。斎戒は祭祀がある 2、3 日前から体を清潔に保ち、不浄のものに触れず、よそものや病人を遠ざけることであり、至誠とは檀君を心から崇敬し、跪拝して祈願することである。

宗教や迷信のベール、格式化された虚礼虚飾を取り去ってみれば、檀君祭祀には礼儀正しく義理にあつい朝鮮人民の品性や、始祖檀君を敬慕し、人間に大きな利益をもたらすという「弘益人間」理念の実現を願う人民の念願や檀君の後裔であることの誇りが反映されていることがわかるであろう。

このような檀君祭祀は洞祭、香山祭、檀君祭、上山祭などさまざまの形式でおこなわれ、その風習はソウルをはじめ全国各地に広く普及していた。

民間における檀君祭祀の祈願内容は、豊年、家と家族の安寧、子孫の幸福、諸悪や災厄からの保護、万事の成功、村の繁栄などであった。このような祈願はその内容からしてわかるように階級社会のある発展段階ではなく、その初期から人間生活の死活的問題を反映して生まれたものである。これは檀君祭祀における祈願の形式と内容がたいへん早くからできあがっていたことを意味する。

檀君祭祀は国内ばかりでなく、いろいろないきさつで海外に住むようになった同胞のあいだでも、早くから継承された。それは壬辰祖国戦争のさい（1592～1598 年）日本の侵略者によって日本に連れ去られた多くの朝鮮人陶工とその子孫が檀君祭祀をおこなっていたことからも明らかである。

壬辰祖国戦争のとき、鍋島、島津、毛利、黒田、細川、松浦、

加藤など日本侵略軍の諸将は多数の朝鮮人陶工を自分の領地に拉致していき、陶磁器を焼かせた。かれらの才能と苦心さんたんたる努力によって、今日世界的に有名な有田焼、薩摩焼、萩焼、高取焼、上野焼、三河内焼などが普及した。かれらは檀君を祭り朝鮮民族の誇りを抱いて生きた。

日本の鹿児島県日置郡には玉山宮という村社がある。これは薩摩藩主島津義弘によって南原、熊川、昌原、金海などから拉致され、日本陶磁器の名物薩摩焼をおこした 22 の異なった姓をもつ男女約 80 名が祖国が忘れられず檀君を祭った祠である。かれらの子孫は玉山宮を奉じて約 400 年間変わりなく、冷遇と蔑視に苦しみながらも故郷での風習どおり檀君を祭ってきたのであった。

しかし日本帝国主義者は朝鮮の植民地化政策を積極的におし進めた 1905 年ごろ、1 村 1 社方針をうんぬんして朝鮮の神ー檀君を祭ることを禁じ、日本の神を祭るよう強制した。そこでかれらは昼は形式的に日本の神を祭り、夜はひそかに「朝鮮国開国始祖檀君」を祭った。1867 年の『玉山宮由来記』も玉山宮は朝鮮の開国始祖檀君の祠堂である、平壌の玉山では霊牌を奉じ大祠堂を建てて誠を尽くした、と書いている。

供え物は酒、餅、野菜のあえもの、米、塩などで餅は高麗餅（こしきで蒸した餅）であったが、それはいまでも供え物に使われている。そして祭祀は旧暦の 9 月 15 日におこなわれるが、昔は 8 月 15 日の中秋におこなわれた。玉山宮における檀君祭祀では、朝鮮でつくられた刀と鈴、太鼓、小鼓などの楽器が使われ、1903 年ごろまで朝鮮の祭服が着用された。そこではかれらが故郷で檀君を国の始祖として崇拝した儀礼風習がそのまま継承されていたのである。

檀君を敬う儀礼でとくに注目に価するのは、朝鮮反日民族解放闘争のすぐれた指導者金亨稷先生の指導のもとに朝鮮国民会の会員たちが江東の檀君陵における焚香式に積極的に参加したことである。これは日本帝国主義の檀君抹殺策に対抗して朝鮮の始祖を擁護し、

愛国心を鼓吹して反日闘争を強化するための活動であった。
　檀君崇拝風習にはまた、樹木神、扶婁壇地、三神袋などの儀礼もあった。　かつて民間に樹木神の信仰風習があった。この信仰は檀君以前に発生し、檀君と結びついてさらに広く伝播し風習化したものと思われる。すなわち桓雄が神聖な神壇樹の下に降り、檀君の母親がマユミ（檀）の木の下で子を授けてくれるよう祈ったということから、朝鮮人の樹木神風習が固まったのである。
　朝鮮では古くから老大木や奇形の木に精霊が宿っているとして敬う信仰があった。これらの樹木は城隍木、山神木、堂山木、府君木、大監木、洞神木などと呼ばれた。人びとは木の幹や枝に銅銭や布切れ、紙紐をくくりつけ、女たちは子を授けてくれるよう祈願した。村人たちはそれらの木を神聖視し、その木を伐れば病気にかかるとか死ぬ、家が崩れる、村に災厄が及ぶなどと信じた。1918 年、朝鮮にそのような樹木が 1,108 本あった。樹木に人びとは健康、安産、男子誕生、豊年、幸福を祈願した。このような信仰儀礼は檀君伝説の神檀樹、マユミ（檀）の樹の神聖説にあやかって檀君以来民間風習として広まったものと思われる。
　樹木神儀礼とともに扶婁壇地、三神袋の儀礼も伝わっている。
　民間では垣の下の清浄な場所に土を盛りあげて壇をつくり、その上に白米を入れた素焼きの土器を置き、わらをかぶせた。白米を入れた土器を置く壇を扶婁壇地と言ったが、扶婁は檀君の長子といわれる人物の名である。これも檀君崇拝にかかわりのある古くからの風習である。また民間では家ごとに白米を一杯入れて壁面のマユミの釘にかける紙袋、三神袋をそなえていた。毎年 10 月、女性たちは手をきれいに洗い、新米で餅をついて檀君に捧げた。17 世紀の文献『揆園史話』が扶婁壇地と三神袋の風習を檀君時代の遺習として伝えていることからみて、この風習はたいへん古い由来をもち、朝鮮人民の間に檀君崇拝風習がさまざまな形で普及していたことがわかる。

このほかにも檀君を敬うさまざまな儀礼風習があった。それらは朝鮮民族のもっとも古い儀礼形態であり、檀君が実在したことを裏づけている。檀君にかかわりのある天を祭る祭祀、檀君霊魂信仰、樹木神儀礼、扶婁壇地と三神袋の風習などは最初の国家建国者への崇拝心と密接に結びついて形成され、後世に伝わったのである。

檀君を敬う儀礼風習において二つの問題が正しく理解されなければならない。そのひとつは、実在しない「人物」にたいする儀礼風習もあるということである。しかし、この場合は歴史のある時代における特定の階層の限られた行為として存在した。しかもそれは主にクッ（巫女がおこなう厄払いの儀式）やムダン（巫女）などにみられる巫俗関係の幻想的「人物」にたいする儀礼風習が主な内容であった。

しかし、檀君儀礼風習はこのような幻想的で仮想的な人物にかんする儀礼風習とは異なる。檀君にたいする儀礼風習が数千年のあいだ伝承されてきたのはその証である。

いまひとつは、特定人物にたいする信仰的な儀礼と風習は、かれの伝説や神話がそれぞれの時代の儀礼風習と結びついて補充、削除、潤色されるようになることである。檀君伝説にもそうした要素が見られる。仏教と結びついた内容はその一例である。

しかし檀君を敬う固有の儀礼風習は、高麗時代や李朝時代の儀礼風習ではなく、民族最古の時代から伝承されてきた儀礼風習なのである。

朝鮮民族は檀君を始祖とする単一民族

社会科学院歴史研究所室長
教授　博士　孫永鐘

偉大な金日成同志はつぎのように述べている。

「朝鮮民族は同じ血筋を受け継ぎ、同じ文化と同じ言語をもって数千年のあいだ同じ領土で生活してきた単一民族です」（『金日成著作集』第38巻、日本語版、99ページ）

朝鮮民族は檀君による古朝鮮建国以来、今日の朝鮮半島を中心にした広大な国土で久しい間輝かしい歴史と文化を創造してきた。

檀君が朝鮮民族の始祖であることは、かれが朝鮮民族の最初の国家古朝鮮の建国者、先進文明をもって朝鮮民族を光り輝かせた傑出した人物であり、他方、朝鮮の歴代の国家と人民も檀君朝鮮の歴史と文化を連綿と継承してきたところにその根拠がある。

檀君は世界のほとんどすべての地域がまだ未開な原始社会の状態におかれていた5,000年前、すでに国（古朝鮮）を建て文明をもたらした、古代朝鮮民族を代表する歴史的な人物である。

檀君は、古朝鮮の国家統治体制を確立し、経済と文化を発展させることによって強大な古朝鮮国家の基礎を固めた。檀君朝鮮は国力が強化されるにつれて遼東、遼西地域へと領土を拡大し、周辺の同族に政治的にはもちろん経済的、文化的にも強い影響を与えて、社会の発展を促した。

このようにして先進的な古朝鮮の影響のもとに、扶余、高句麗、辰国などの古代国家があいついで建てられた。これらの国にたいする古朝鮮の決定的な影響については、朝鮮人が住んでいたすべての地域に古朝鮮の琵琶形短剣文化、細形青銅短剣文化が広く普及して

いたことからしても立証できる。
　それだけでなく古朝鮮は、朝鮮のどの古代国家よりも対外的に民族の力を伸ばし、外部勢力の侵略から国土と民族を守る砦の役割を果たしたのであった。
　だから古代以来朝鮮人はどこにいても檀君を朝鮮民族最初の建国者、民族の始祖王として崇敬してきたのである。
　前 277 年、東明王は朝鮮最初の封建制国家高句麗を建てて国力を強化し、東方千年大国の基礎をきずいた民族中興の祖である。高句麗は強大な外国の侵略を撃退するたたかいを通じ、古朝鮮の旧土と住民を回復して古朝鮮の歴史的地位と役割を継承し、その伝統をうけつぐ国となった。
　百済と新羅、伽倻も古朝鮮の経済と文化を継承している。百済は東明王の子温祚が建てた国であり、それ以前の辰国時代には、準王をはじめ多くの古朝鮮人が馬韓に移住している。だから百済はおのずと古朝鮮と高句麗の影響を強く受けたのである。
　新羅、伽倻などの封建国家を建てた勢力が「古朝鮮の遺民」であり、「天」すなわち北方からの移住民であったことは、これらの国が成立し発展するうえに古朝鮮と高句麗の影響が強く及んでいることを示している。.
　高句麗滅亡後の 7 世紀末、高句麗の旧土とそのほとんどの住民をもって渤海が建国されたが、このことは渤海も古朝鮮と高句麗を継承し朝鮮民族を代表した国家であったことを示している。
　10 世紀初、渤海領域の南部と多くの渤海住民を含む最初の統一国家高麗の成立によって、朝鮮民族ははじめて単一の主権国家のもとで暮らすようになった。
　このような歴史の発展過程は、民族史の伝統が古朝鮮から高句麗などの 3 国と渤海、高麗にうけつがれたことを示している。したがって高句麗、百済、新羅、渤海、高麗などの歴代王朝はいずれも朝鮮民族の始祖として檀君を崇敬し、その祭祀をおこなったのであ

り、また人民も檀君を朝鮮民族を文明開化へと導いた始祖王として深く崇拝してきたのである。
　江東のほかにも妙香山、九月山、金剛山などの名山や江華島、黄海北道の兎山郡をはじめ全国各地に檀君と関連した多くの伝説的遺跡が分布しているのは、朝鮮人が古くから檀君を朝鮮民族の始祖として広く崇拝していたことを語っている。
　三国時代に檀君を崇拝していたことは、高句麗時代に檀君陵を再築したことや、角抵塚の壁画にも大木の幹の両側に「檀君神話」の熊と虎が描かれていることからもうかがえる。これは「檀君神話」が日本帝国主義の御用学者が主張しているように、高麗中期につくられたのでなく、すでに古くから民間に広く伝えられてきた説話であることを証明している。
　渤海時代にも檀君が崇敬されたことは、当時檀君王朝の史書が存在していたことからも知ることができる。
　高麗時代はその初期に檀君を祭る祠堂（檀君祠、三聖祠）を九月山の最高峰四王峰に建てたが、中期には貝葉寺の西にある檀君台の下に移され、末期にはさらにそこから東へ 2.4 ㎞ほど離れた小甑山に移されて、国家的祭祀の対象となった。
　李朝（李氏朝鮮）も「朝鮮」という国号を継承していたことからもわかるように、檀君朝鮮をおしたてていた。この時代には九月山三聖祠のほかに、1429 年には檀君の都平壌に檀君祠堂を建てた。檀君の諸祠堂では 20 世紀初頭まで、国家的にはもちろん民間でも檀君祭祀が恒例の行事としておこなわれていた。
　朝鮮の建国始祖檀君にたいする崇拝熱はとくに、日本帝国主義の朝鮮占領と前後して全国各地で高まり、檀君を神格化して信奉する大倧教が生まれるまでになった。日本帝国主義の朝鮮支配中は悪辣な檀君抹殺政策が強行されたにもかかわらず、檀君と檀君朝鮮の史話は、朝鮮人民の間に広く伝わり、国と民族を愛する思想の鼓吹に寄与した。地方の有志によって「檀君陵修築期成会」が結成され、

各地人民の支援を得て 1936 年に檀君陵が修復されたことは、当時の朝鮮人民の民族的自主意識、国を愛し民族を愛する思想の集中的な表現であった。

檀君が朝鮮民族の始祖であることはつぎに、檀君が檀君朝鮮の単一民族としての発展を実際に裏付けたことにその根拠がある。

周知のように、新石器時代朝鮮の領域には朝鮮民族の先祖である朝鮮旧時代類型人が住んでいたが、かれらの言語および文化風習は似通っていた。しかし、かれらはまだ氏族や種族をなし、ひとつの民族を形成するまでにはいたっていなかった。

前 3000 年紀初、この地方でもっとも発達していた平壌地域で檀君が最初の古代国家を建て、朝鮮半島の西北地方を含む広大な地帯を古朝鮮の領域とした結果、当地の住民は単一国家主権のもとで緊密に結びつき、血縁的・言語的・文化的共通性を深めて単一の社会的集団である民族へと発展していったのである。その後檀君朝鮮の領域はさらに拡大し、檀君朝鮮の直接の影響のもとにいくつかの古代国家が形成されて諸国間の経済と文化のつながりが深まると、これらの諸国住民の間には同胞としての自覚、同族意識がいちだんと強まり、こうして次第にひとつの民族へと発展していったのである。

檀君朝鮮と他の古代国家の間で政治、経済、文化的に緊密なつながりが深まっていったことから、これら古代諸国の建国者もみな檀君の子孫であったし、封建国家の建国者たちもすべて檀君の後裔であるという説話が人びとの間に伝えられてきたのである。『三国遺事』や『檀君記』に、扶余王解夫婁や高句麗王高朱蒙（東明王）が檀君の直系子孫である解慕漱の子であると書かれていることや、『帝王韻紀』に扶余、沸流、尸羅、高礼、南沃沮、北沃沮、濊貊の統治者もすべて檀君の後裔であるとしているのは、このような史実の反映であった。

檀君朝鮮以来、朝鮮民族が単一民族として発展しえたのは、檀君が平壌で生まれて平壌を都とする古朝鮮を世界最古の時代に創建

し、強化、発展させて周辺の原始種族を制圧し、周辺諸族の侵入を防いで、どのような外来種族や異民族も朝鮮に侵入したり朝鮮を征服できないようにしたからである。

地球上には多くの民族があり、それぞれ興亡盛衰をくりかえしてきたが、朝鮮民族のように太古の昔からひとつの民族を形成し、その血統を守りながら発展してきた民族はないのである。

北アフリカ、中近東、南アジア、東アジア、ヨーロッパやラテンアメリカなど世界各地の数多くの国の歴史をふりかえってみると、ほとんどすべての国の民族形成過程が複雑をきわめていたということ、言いかえれば、少なくとも二つ以上の種族集団、二つ以上の民族が混ざりあってつくられていることがわかる。ある国では建国者自身が外来の征服者であったし、またある国ではたびたび外敵の侵入を受けてその支配下に入り、敵兵は撃退されたり同化されたりした。したがってこれらの国における民族形成は相対的に遅れ、一部の国では多くの相異なる血縁集団が長年混在して次第にひとつに統合されていくという道のりを歩んでいる。

かつて日本帝国主義の御用史家をはじめ帝国主義国の史家、事大主義史家、ブルジョア史家は、朝鮮民族が北方と南方からの移住民が混合してできたという「多起源論」を唱え、そのなかには檀君説話の三危山を中国の西北方辺境にある山だとし、アルタイ山脈、天山山脈一帯の住民が東に移ってきて朝鮮人の先祖のひとつになったと主張している学者もいる。

しかし、今回檀君陵から檀君の遺骨が発掘されてその年代が5,011 年であることが確定されたこと、人類学的研究の結果、檀君が朝鮮本土で生まれた朝鮮人であると判明したことなどから、檀君が遠方からやってきた外来者であるという説はまったく根拠を失ったのである。古朝鮮の建国始祖檀君は外来の征服者でなく、もともと朝鮮に住んでいた朝鮮人であるため、それだけ朝鮮民族の血筋は純粋であり、また世界のどの民族よりもはるかにさきがけて単一民

族になれたのである。
　また朝鮮の歴史は、檀君朝鮮以来いかなる侵略者も大挙侵入してきて長期間混在したことのなかったことをはっきりと示している。
　偉大な金日成同志と親愛な指導者金正日（キムジョンイル）同志の正しい指導によって、檀君がほかならぬ平壌を都にして前 3000 年紀初に古朝鮮国家を建てたという史実が判明したことは、朝鮮民族の大きな誇りである。このことは朝鮮人民の民族的衿持をいちだんと高め、自主的な単一民族として数千年もの間同じひとつの国土で生きてきた朝鮮民族が、いまになって二つに分かれてはならず、一日も早く．民族の統一を実現し、本然の姿にもどることこそ 7,000 万の民族に課せられた至上の課題であることを確かめることによって、統一への志向をさらに強めている。
　数千年間単一民族として形成されてきた血縁的単一性、言語と文化の共通性、民族的気質や感情、情緒の同一性は、国土の分断後数十年間にあらわれたいくらかの異質性よりもはるかに強くすぐれており、その強い民族的共通性は全朝鮮民族をかたく結びつけている。
　北と南、海外にいるすべての朝鮮同胞は、世にまたとない古くからの単一民族の一員としての民族的誇りをいだき、金日成同志の全民族大団結 10 大綱領の旗のもとに、思想と政見、信教と財産の違いを問わずかたく団結して外国勢力を排除し、一日も早く祖国の自主的平和統一を達成するため、力と知恵を尽くすべきである。

歴代檀君画像の史料的価値

平壌美術大学特設学部教員
準博士　李　澈

朝鮮では昔からわが国に最初の文明国家が檀君によって建てられ、それ以来単一の血縁的関係をもって民族が形成されたという厳然たる史実にもとづいて、檀君を形象した美術品がつくられ、発展させられてきた。

長年、間断なくつくられた檀君関係の美術品には、伝統的に檀君を民族の始祖、実在の歴史的人物として敬ってきた朝鮮人民の誇らしい歴史が反映されている。したがって檀君研究で檀君を形象した美術品がもつ意義はきわめて大きい。

檀君を形象した美術作品が最初に現れたのはいつごろのことであろうか。

この問題を解明するためには、なによりも檀君関係の美術作品が現れる歴史的前提を考察しなければならないであろう。ここでもっとも重要なのは、まず檀君への崇拝心形成問題である。

歴史的にみて、檀君崇拝の感情は、かれが建国し王位についたころから高まったといえようが、そうしたなかでかれの造形芸術作品がつくられるようになったとみるべきであろう。そのような作品には工芸品、彫刻、絵画、建築物などがあったであろうが、とくに檀君陵は最古の檀君関係造形芸術品のひとつだといえる。

もちろん現在の檀君陵は高句麗時代に改築されたものであるが、古朝鮮時代から檀君陵があったことはその遺骨の存在によって明らかである。

古朝鮮は伝統的に統治者の墓を大がかりに建造している。古朝

鮮の遺物安岳郡路岩里の支石墓は蓋石の重量が 40ｔを越え、高さは 270㎝に達している。

支石と蓋石で構成される支石墓の雄壮かつ独特な形式は、被葬者の地位を象徴している。

したがって、古朝鮮時代の檀君陵も檀君を崇め、その功績をたたえる古朝鮮人の思想感情を反映して、きわだった外観を呈していたであろうことは想像に難くない。そのように建築を通して表現された強い始祖崇拝心は、絵画や彫刻などの芸術作品にも少なからぬ影響を及ぼしたことであろう。

檀君関係美術作品創造の歴史的前提で重要なことはまた、人物形象創造の基礎と経験である。

人物を形象した彫刻や画像は、その人物を生き生きと表現することで、見る人に大きな感化を及ぼすものである。

われわれの先祖は原始時代から、重要な対象を彫刻や絵画で形象することに大きな関心を払い、その過程で人物形象の経験を積んだ。

朝鮮の新石器時代遺跡から出土した人物彫刻はその好例である。それらの彫刻品は男女を区別する程度のきわめて概念的なものではあるが、その後の人物形象創造上大切な基礎となった。

このような経験と基礎があったからこそ、古代の諸遺跡からは人物を形象した彫刻や線刻画が少なからず出土しているのである。

原始時代の人物彫刻は概して氏族・種族神信仰とかかわっている。したがって古代における人物形象上の主な関心も始祖の形象に向けられ、そのような美術作品がつくられたであろう。考古学的資料や民俗資料によれば、原始時代の人たちは祖神像を護身符としたし、また神殿などを建てて神像を安置していたことがわかる。

このような伝統を継承した古代にも、始祖を形象した造形芸術品がつくられたことは間違いないであろう。

一方、古代には技術と文化がかなり高まって、各種の造形芸術品がりっぱにつくれるようになっていた。

古朝鮮関係の古墳からは琵琶形短剣、帯鉤、青銅鏡、馬面、鈴などが少なからず出土し、なかにはその鋳型も出土している。このことはそのような金属製品が「輸入品」ではなく、古代の朝鮮人民自身の手でつくられたことを語っている。

以上見てきたように、古代には檀君関係のさまざまの芸術品がつくられる社会的・歴史的前提が十分に形成されていたのである。

では、古朝鮮に実際檀君崇拝にかかわる造形芸術品が創造されたのであろうか。

その可能性は十分にある。それには古朝鮮後期、あるいは古朝鮮遺民の残した遺跡から出土した遺物が答えている。

古代に檀君を形象した芸術品がつくられた可能性は、なによりも古朝鮮遺民が残した「虎図帯鉤」（貞栢洞 37 号墳）や「獣図帯鉤」（貞栢洞 92 号墳）から推察できる。これらの遺物は始祖崇拝にかかわる造形品だと考えられる。檀君神話では、虎は「忍耐力がない」ため人間になれなかったとされている。

しかし神話が語ろうとする基本的な内容は、檀君の出生当時、虎をトーテムとする氏族が熊をトーテムとする氏族の下位にあったという事実である。

そのような関係を反映している資料は、古代中国の『山海経』（10 巻、海外東経）にもある。そこには「君子国」の「人びとは衣服をまとい冠を被り帯剣しており、家畜を飼い、縞のある 2 頭の虎をはべらせている」という記録がある。ここで君子国とは古朝鮮のことである。古朝鮮人が 2 頭の虎をはべらせているというのは、古朝鮮の虎を崇拝する氏族が天神を崇拝する氏族に服従していたということを芸術的に表現したものと理解できる。それらの資料は、古朝鮮の支配的氏族に属する者たちが被支配氏族出の奴僕たちを従えていたことを示唆しているのである。

古代に檀君を形象した芸術品がつくられた可能性は、つぎに前 8～前 7 世紀の遺跡とされている十二台営子石槨墓から出土した人面

文装飾品からおしはかれる。中心に人面を刻み、そこから六つの光芒を放ち、そのまわりに円形の枠をめぐらした人物装飾品は、檀君を形象したものか、あるいは個別的種族ないし氏族の祖を象徴したものかは明らかではないが、そのような人物彫刻が出土したということ自体が始祖を形象した芸術作品創造の可能性を語っているのである。

以上の古代遺物は、檀君を形象した美術作品がつくられていたであろうことを示す重要な根拠のひとつである。

そのような造形芸術創造の豊かな経験と伝統があったからこそ、その後の三国時代に檀君造形芸術作品はかなりの水準に達したのである。

3国のうちもっとも発展した国は高句麗であった。

高句麗では古墳壁画にみられるように、王をはじめ貴族の画像が大いに制作された。国内の主な城邑には建国始祖東明王の彫像(高等神像) もつくられていた。

このような造形芸術の発展に相応して画像の創作でも一定の発展が遂げられた。その物証が檀君陵の壁画である。元来この古墳には高句麗時代の壁画があった。

1910 年代に出された『韋菴文稿』には、数年前に日本考古学者が檀君陵を発掘したが、玄室の4壁面に「昔の仙人」と「不思議な将帥」が描かれていたという。

『三国史記』が檀君を「仙人王倹」と表現していることから、高句麗では檀君を「仙人」として崇拝したと思われる。

当時代の人が檀君を「仙人」として崇めたのは、隣国の人たちが古朝鮮を不老長寿の「仙人の国」と呼び、松譲王が自らを「仙人の末裔」と称したことなどからもおしはかれよう。

したがって檀君陵に描かれた「昔の仙人」とは、檀君を「仙人王倹」と崇めて描いた一種の「檀君仙人画像」だったといえる。高句麗古墳壁画の一般的配置からおして、檀君陵でも南側入り口の左

右の壁には護衛の任務を果たす将帥を描いたであろうし、残る3面の壁には檀君とその父檀雄（桓雄）、祖父檀因（桓因）を仙人の姿でそれぞれ描いていたのかもしれない。

高句麗古墳壁画で仙人を各壁面に 1 人ずつ描いたのは、東明王陵付近の竜山里第4号墳（平康王の公主と温達将軍の墓）でも見られる。

＊ このように貴重な「檀君仙人画像」が描かれた檀君陵の壁画は、日本帝国主義侵略者の盗掘によってすべて喪失した。

高句麗でかなり発達していた檀君形象美術は同族の新羅にも影響を与え、さらに発展をとげた。

8 世紀中期、後期新羅の率居は全国に広く知られているすぐれた画家であった。かれは皇竜寺の壁に老松を描いたが、深いしわをきざんだ太い幹、曲りくねった枝々、繁茂する葉などがすぐれた技法で生きいきと描かれていたので、鳥が本当の松と思い、そこへ止まろうとしては壁にぶつかって落ちたという。

率居は皇竜寺の壁画以外にも慶州芬皇寺の観音菩薩像、晋州断俗寺の維摩像など多くの仏画を描き、人びとから「神技の画家」(『三国史記』48巻率居）と惜しみのない賛辞を受けた。

しかし、率居の作品でもっとも光彩を放ったのは始祖檀君の画像であった。

それについて『槿域書画徴』は『東事類考』に書かれた内容をつぎのように伝えている。「新羅の画家率居は農家の子である。幼時から絵画を志し、しばかりに行けばクズの根で岩に絵を描き、草取りをするときは手鍬の先で地面に絵を描いた。

かれの村は深い山奥にあり師の手ほどきを受けることができなかったので、絵の修業で成功は望めなかった。率居は昼も夜もひそかに神に教えを請うた。このようにして数年がすぎたある日、夢に老人が現れ、「わしは神人檀君だ。おまえの至誠に心をうたれ神霊こもる筆を授ける」と言った。夢から覚めたが、どうしても夢とは

思えなかった。かれはついに有名な画匠になった。
　率居は神人檀君の恩恵に感動し、「檀君御真」を 1,000 余枚描いた。夢で見た檀君の像である。
　高麗の李奎報（1168～1241 年）は率居の檀君画像に一筆書き入れたが、その内容はつぎのようである。

嶺の向こうの家々に
神人檀君の画像がある
率居その年
半ばは描いたであろう
　　　　『槿域書画徴』羅代編　率居

　以上の『東事類考』の記事は大きく二つの内容から構成されている。そのひとつは率居がどうして檀君画像を描くようになったかということであり、いまひとつは率居の絵画を李奎報が評価したということである。
　ここでとくに注意を引くのは、李奎報の文である。
　かれは高麗時代の大学者で、進歩的詩人、美術評論家でもあった。
　かれは日常生活でもまた著作でも虚偽を嫌い、真実を強く肯定した。李奎報のリアリズムはかれのすべての文章に一貫しているが、とりわけ絵画を評した詩にそれが著しい。かれが写実主義的な絵画を高く評価した詩のなかには、『魚の絵を見て』『肖像を描いてくれ』『モミの木の絵を見て』などがある。
　李奎報が率居の絵を高く評価し、嶺の向こうの家々で檀君画像をかかげ崇拝しているとしたのは、当時の史実を語ったものである。
　　＊ 嶺の向こうとは鳥嶺、竹嶺の南方を指したものと思われる。
　ところで『東事類考』が伝える率居の檀君画像制作の史料にはどのような価値があるのだろうか。
　それは第 1 に、後期新羅時代、家々では檀君の画像をかかげて

崇拝したということである。これはそれ以前の三国時代にも檀君崇拝思想が伝わっていたことを語っている。

三国時代に高句麗とともに新羅で檀君画像がつくられ普及したのは、新羅人も檀君を民族の始祖として崇拝したからである。これはその時代に檀君が全民族的な始祖として広く崇拝されていたことを立証するものであり、かつて国の分立によって朝鮮民族は一時的に分かれて暮らしたが、血縁的関係は断たれなかったことを物語っている。

新羅にその建国者朴赫居世を祭る始祖墓があったが、檀君画像を家々にかかげて崇拝したということは、新羅の住民が檀君を民族の始祖として認めていたことを語っているのである。

檀君画像制作の史料的価値は第 2 に、新羅で檀君画像が率居以前から伝えられてきたことを示唆している。

李奎報が指摘しているように率居は檀君画像を多く描いているが、それは全体の半分ほどであった。残りの画像は他の画家の作でかれ以前のもの、同時代のもの、かれ以後のものなど、さまざまの時代に描かれたものと考えてよい。

なぜなら率居が檀君の啓示で名画家になったというのはありえないことであり、かれが最初にそれも一度に多くの画像を描いて普及したということも考えられないことであるからである。率居が檀君の画像を多く描いたのは、以前から伝わる檀君画像を見ており、また檀君の画像を求める社会的要求が高かったことと関連している。

檀君画像制作の史料的価値は第 3 に、率居をはじめ当時の人たちが仏よりも始祖檀君を敬っていたということである。

率居が活動した時代は新羅の「仏教最盛期」であった。画家の率居自身も仏画の制作に精力を傾けた。しかし、かれは自分の画才が仏ならぬ始祖檀君のおかげによるものとし、檀君を崇めて数多くの檀君画像を描いたのである。

これはたんに率居自身だけでなく、当時民間でも檀君崇拝熱が

きわめて高かったことを物語る有力な根拠となる。
　このほかにも、率居の檀君画像制作史料からは、檀君画像が「檀君御真」（御真＝王の画像）と名づけられていたことからもわかるように、檀君が実在の古朝鮮王とみなされていたことなど、多くの問題が解明されている。
　率居の創作した多くの檀君画像は高麗後半期まで保存され、その後の檀君画像制作に大きな影響を与えた。
　高麗以後檀君崇拝と檀君の画像制作で注目に価するのは、檀君の生地であり、国都としたところであり、埋葬地である平壌がその中心地であったということである。
　太宗が 1412 年に檀君を祭るよう命じ、その後の 1429 年、平壌に檀君を祭る檀君祠（1725 年崇霊殿と改称）を建てたのはそのよい例である。
　檀君崇拝が国家的関心のもとに奨励されたことから、檀君画像の制作はその後いっそう積極的になった。
　檀君画像の制作は日本帝国主義の朝鮮占領と前後して、朝鮮人民の檀君崇拝思想がさらに広まり、それにつれてより高い水準でおこなわれるようになった。
　檀君画像のなかで一部は、「檀君祠」「檀君殿」など檀君崇敬の目的で建てられた祠堂に礼拝用にかかげられて伝えられ、また一部は『檀君教八理』『檀君教復興経略』などの書物に掲載して伝えられている。そのうち建物にかかげられ礼拝された檀君の画像は数十点を数えている。
　それらは『檀君聖祖御真図』『檀君天神図＝檀君影像』『王倹（檀君）図』『檀君画像』などさまざまの名で呼ばれている。
　檀君崇拝を反映した画像のなかには桓雄と桓因を並べて描いたものもある。
　現存する檀君画像のうち『檀君聖祖御真』は、その題名によって檀君が神聖な始祖王とみなされていたことを明らかにしている。

古くから朝鮮人が檀君を実在の聖祖とみなしたことは、檀君画像の造形的形式からもはっきりと見てとれる。

現存する檀君画像遺物のなかには座像や立像、それに人物だけを描いたものや周辺にマユミ（檀）の立っている風景を添えたものなど形式は同じでないが、そのすべてが古代以来の檀君画像にもとづいて描かれているのである。

檀君画像の形象的特徴はまず、檀君を実在の人物としてリアルに形象していることである。塊石を思わせる老木に合掌して座している檀君の姿にはなんら神秘的なところがない。顔形も典型的な朝鮮人である。眉、目、鼻そしてひげも人為的な誇張がなく、普通の朝鮮人の容貌である。ただ耳が少し大きく描かれているが、それも仏像に見られるような長く垂れ下がった耳とはまるで異なる。

こうした容貌を見ても、檀君が昔から幻想的な人物ではなく、典型的な朝鮮人､実在の人物と認められていたということがわかる。

檀君画像の形象的特徴はまた、檀君を60歳程度の老人、つまり、あまり老けてもいず若くもないように描いたことである。このような年齢で表現されていることからも、檀君が 1，908 年間も生きたという幻想的な話は、実際には信じられていなかったということがわかるであろう。

檀君画像の形象的特徴はまた、そのどれもが素朴な人格の所有者として描かれていることである。檀君の容貌からは平凡な人間の風格がにじみでており、身なりも質素である。とりわけ目を引くのは、袖が両班の道袍のように広いものでなく､. 簡便な衣服のように狭く描かれており、さらに履き物もわらじのような素朴なものだということである。

＊ 中世時代の一部檀君画像のなかには、肩に草を、腰にはクヌギの葉を掛けたものがあるが、それは檀君の実在性を否定するものでなく、檀君の死後阿達山の山神―朝鮮の「永遠な守護神」になったという信仰心を表現したものである。

朝鮮の土着信仰では実在の聖人が死後国を守る山神になるとみなされる場合がしばしばあった。過去檀君祭祀を切らさずおこなった理由のひとつも、檀君を「永生する祖神」と信じたことにあった。だからといって、このような信仰が檀君が実在の人間ならぬ架空の人物であるとする根拠にはならない。

このように檀君画像は朝鮮民族固有の始祖崇拝の産物、全民族的創造物として、時代を重ねて発展してきた。

檀君画像の重要な史料的価値はまさにここにある。

檀君の形象芸術は数千年間朝鮮人民のなかに広く普及し、その民族的自覚と誇りを呼び起こすうえに大きく寄与したのであった。

朝鮮民族は 5,000 年の悠久な
歴史をもつ単一民族

社会科学院歴史研究所室長
候補院士　教授　博士　許宗浩

偉大な金日成同志は、1993 年 9 月 27 日、檀君陵を訪れて陵とそこから出土した遺骨と遺物を見て、従来伝説上の存在とされていた檀君が実在の人物であると考証されたことは、朝鮮民族史において重要な意義をもつと指摘し、檀君と古朝鮮の歴史研究で守るべき綱領的指針を示した。

古朝鮮建国後、檀君を始祖とする「パクタル（朴達）民族」「ペダル（倍達）民族」として知られた朝鮮民族は、5,000 年の長い年月ひとつの血筋をうけつぎながら、自然と社会を改造するたたかいを休みなくくりひろげてきた。

偉大な金日成同志はつぎのように述べている。

「朝鮮民族は 5,000 年の悠久な歴史をもつ単一民族であり、昔から外来侵略者と歴代の反動支配者に抵抗して頑強に戦ってきた勇敢で覇気のある民族であり、人類の科学と文化の発展に大きく寄与した才知にたけた民族であります」（『金日成著作集』第 1 巻、日本語版 226 ページ）

檀君陵発掘事業の成果はまず、朝鮮民族の 5,000 年の歴史が檀君朝鮮からはじまったことを立証したことにある。

最近社会科学院考古学研究所は檀君陵とその遺物を発掘、分析し、檀君が神話のなかの存在ではなく、実在の人物であったことを明らかにした。

二つの機関は檀君陵出土の遺骨を最新型の年代測定器具でそれ

ぞれ 24 回、30 回測定し、そのどちらもほとんど同じ値 5,011 年を得た。これは、この遺骨が檀君のそれであり、したがって檀君朝鮮の歴史が 5,000 年前にはじまったことを実証するものである。

古文献は檀君が実在した人物であり、朝鮮民族の歴史が 5,000 年前にはじまったことを伝えている。

『三国遺事』は 3 世紀ごろの中国の史書『魏書』からつぎのような記事を引用している。「2,000 年前檀君王倹がいて、都を阿斯達に定め、国を開いて朝鮮と号した」また朝鮮の史書『古記』『三国遺事』『帝王韻紀』などは檀君を神話的人物にしたて、檀君の建国過程を神秘化して描いているが、その内実は人間の活動を描いたものであった。世界のどの国の歴史をみても自国の始祖王を神格化し、その建国過程を神話化していないようなものはほとんどみられない。それにもかかわらずかつて檀君を神話上の人物とみ、檀君朝鮮の歴史を虚構とみたところから、古朝鮮の歴史も誤って解釈されたのであった。

これは主に日本帝国主義者とその御用史家の檀君および檀君朝鮮史にたいする歪曲、抹殺行為に起因している。

周知のように、過去、日本帝国主義侵略者は朝鮮民族の魂を去勢して朝鮮人を「大和」民族に「同化」させようと檀君抹殺策を悪らつに強行した。かれらは朝鮮史から檀君朝鮮の歴史を抹殺するため、檀君関係書籍など朝鮮古代史部門の史書を数十万部も焼却する蛮行をはたらいた。

日本帝国主義のこの「焚書事件」は秦の始皇帝の「焚書坑儒」やヒトラー・ファシストの焚書騒動をしのぐ犯罪行為であった。

「文化」統治を標榜した朝鮮総督斉藤実は、朝鮮青年にたいする教育施策に触れ、まず朝鮮人が自分たちのこと、歴史、伝統を知らないようにして、民族の魂と民族文化を失わせ、自分の先祖を軽視し蔑視するようにしむけ、朝鮮青年が自国のすべての人物と事績にたいして否定的な知識を得て、失望と虚無感に陥るようにすべき

であり、そのときに日本の事績と日本の人物、日本の文化を紹介すれば、同化の効果が至大となるであろう、と公言した。
　檀君朝鮮の歴史を抹殺するための「焚書事件」は、このような目的で仕組まれたのである。
　日本帝国主義のこうした悪どい行為によって檀君関係書籍はほとんどすべて焼失し、檀君朝鮮の全貌を知る可能性が奪われ、檀君を神話上の存在とみる見解が広まった。それに古今を問わず有名な人物には伝説や神話がつきまとうもので、偉人檀君はそうした意味でなおさら伝説上の人物にされたのであった。
　金日成同志は檀君と檀君朝鮮史がねじまげられたことを遺憾として、檀君陵の発掘を指示し、われわれ史家たちに檀君の研究を主体的立場に立って深めるよう綱領的課題を示した。
　檀君陵発掘事業の成果はまた、過去のねじまげられた檀君観を正し、檀君朝鮮の歴史と 5,000 年の長い歴史を蘇らせて、朝鮮の古代史全般を科学的に体系化しうる確固とした礎をきずいたことにある。
　檀君が実在の人物であり、檀君朝鮮の歴史が神話や伝説ではないことが確認されて、朝鮮人は自分たちの民族が世界でもっとも早く文明社会に移行した民族のひとつである、という大きな民族的誇りをいだくようになった。
　世界には多くの国と民族があるが、朝鮮民族のように早くから国家を形成し文明時代に移行した民族はきわめてまれである。
　古朝鮮が形成された前 3000 年紀初はまだ、世界各大陸の多くの地域で野獣がばっこし、原始人たちが国家以前期の野蛮状態で原始生活を営んでいたときであった。発達した奴隷所有制国家であるという古代ローマも、前 8 世紀ごろに伝説的な王政期に入っている。
　日本の歴史は神話時代を国家時代として含めても、朝鮮の民族史より 2 千数百年もおくれているのである。
　檀君陵発掘事業の成果はさらに、平壌が人類発祥地のひとつであるばかりでなく、朝鮮民族の発祥地であり、檀君が都を定め最初

の国家を建てたところであることを明らかにしたところにある。
　すでに証明されているように、朝鮮で原人が出現したところは平壌市祥原郡黒隅（コムンモル）里であった。旧人の「力浦人」、新人の「竜谷人」「万達人」「勝利山人」そしてかれらの血筋を引く今日の朝鮮民族の祖先である朝鮮旧時代類型人も、平壌とそこを中心にした広大な地域に住んでいた。
　檀君の両親桓雄と熊女ももちろんその地方の人であった。
　檀君のような偉人は山紫水明の地に生まれ、国家は肥沃な土地、防御に有利な山勢に恵まれた、人民の住みよい地帯に建てられるものである。
　檀君はそれらの条件が揃った平壌地帯で生まれ、そこで国を建て、国力を強化して北方の広い地帯に領土を広げた。そしてその生まれ故郷で建国始祖としての多難な生涯を終えたのである。
　平壌が檀君王倹の生地であり、古朝鮮の都であったことは、金富軾がすでに『三国史記』に記しているところである。平壌はその後も歴代封建王朝の政治、経済、軍事、文化の中心地であった。
　実に平壌とその一円は早くから栄えた朝鮮民族の故郷だったのである。
　それにもかかわらず、かつて古朝鮮の発祥地を遼東地方に求める試みがあったのは、大陸文化が先に発達したとみる古いドグマにとらわれていたためであった。今日、檀君が実在の人物であったことが解明されて、遼東中心説が覆され平壌中心説が新たに定立したことは、事大主義的思考方式から解放され、チュチェ史観が結実したことを意味している。
　檀君陵発掘事業の成果はつぎに、朝鮮民族は始祖檀君の後裔、檀君王倹の子孫であるという認識をもって、5,000 余年間たくましく生きてきた単一民族であることを明らかにしたところにある。
　朝鮮民族は代々単一民族としての自覚が強かった。古朝鮮はもとよりその他の古代国家である高句麗、扶余、辰国の住民とその後

の歴代封建国家の住民も檀君を民族の始祖とする同族観念が強く、それを誇りにしていた。『帝王韻紀』が尸羅、高礼、扶余、穢、貊沃沮などはすべて檀君の後裔である、と記したのはそのひとつの例である。

『槿域書画徴』は『東事類考』の資料を引用し、新羅の有名な画家率居が檀君の画像を1,000点近く描いたと伝えているが、これはきわめて深い意味をもっている。

高句麗の建国者東明王とその息子の百済建国者温祚王がともに自らを檀君の後裔であると称したのは周知のことである。

しかし、新羅の住民が檀君を始祖とみなした事実はあまり知られていなかった。新羅国を建てた主な勢力は古朝鮮住民であった。これを念頭におくとき、率居が檀君の画像をあれほど多く描いたことは、当時新羅の住民が誰を始祖として崇めていたかを端的に物語るものである。このように檀君は三国時代と渤海および後期新羅時代にも地域的限界性を越え、全朝鮮民族の始祖、朝鮮民族史上最初の国家を建てた建国始祖として尊敬されてきたのである。

李奎報は「嶺外」（開京から見た鳥嶺の外、すなわち三南地方）の民家ではどこでも檀君の画像をかかげていると記しているが、これを見れば、高麗時代にも旧高句麗の領域だった北部地域はもとより、新羅と百済の領域だった南部地域でも檀君を始祖とみる単一民族としての自覚がゆきわたっていたことがわかる。

檀君の祠堂が各地の名山にあって、毎年「開天日」（旧暦の10月3日）に白衣姿の同胞たちがそこを訪ねて祭祀をおこなったことは、全民族の始祖としての檀君の地位を語っている。

朝鮮人民は古くからひとつの言語を使い、ひとつの文化を創造してきた英知に富む勇敢な民族であり、団結力が強くむつまじく暮らしてきた民族である。

檀君が古朝鮮の始祖であり、檀君朝鮮が民族史上最初の国家であることが確認された結果、朝鮮民族は檀君の後裔として民族の強

固な集団を形成し、古朝鮮—高句麗—渤海—高麗へとうけつがれた民族の伝統を今日にまで継承し、民族性を固守してきたことが証明された。

近代社会にいたり民族市場の形成にともなって民族が成立したとみるのは、ヨーロッパ的ドグマへの盲信である。民族の成立は国によって異なる。住民の構成が人種的に複雑で、種族の移動がひんぱんだったヨーロッパとそうでないアジアの一部地域では、民族の形成過程が大きく異なっているのである。

今日の朝鮮民族は本土起源の単血性人種、朝鮮旧時代類型人に源をおいている。文献に濊、貊、沃沮、韓などと記された種族もすべて朝鮮旧時代類型人の血筋であり、檀君の後裔であって、古代にすでにひとつの同胞として融合していたのである。

朝鮮史上異民族が朝鮮民族を征服して混血ないし同化現象を起こした例はない。そして地域も、古朝鮮以来、平壌を中心に朝鮮半島と遼東地方を領土としており、三国時代までは大きな変動がなかった。

このように血縁的に同一で、地域的共通性が早くから形成された朝鮮民族をローマ人、ゲルマン人、ギリシア人、アラビア人などの相異なる種族からなるイタリア民族やケルト人、ローマ人、ブリテン人、ゲルマン人などの種族からなるフランス民族と同一に論ずることはできない。かれらは四方八方から集まり、近代ブルジョア文明の確立とともに、言語、地域、文化の共通性が成立し、ブルジョア民族として結合したのである。しかし、朝鮮民族はかれらとは違った道を歩き、趣を異にしているのである。

朝鮮における最初の国家の成立は民族形成の重要な契機、その裏付けとなった。それは国家の中央集権的権力によって、もともと同一の血縁関係にある種族をひとつにまとめて支配階級が思いどおりに動かし、他民族（種族）の侵入を防ぎ自民族（種族）の自主性を守るために民族的自覚を高め、自己の文化の創造に一定の力を注

いだ事情とかかわっている。こうして、国家の形成とともに血縁と言語の共通性が強固になり、文化的・心理的共通性など民族を特徴づけるその他の要素も速やかに成長していった。

朝鮮民族は古朝鮮時代すでに自己の文字をつくっていた。朝鮮の言語学者たちが古文献や古朝鮮時代の土器から掘り起こした神誌文字は、表音文字で縦書き用の文字であった。

神誌文字の実体の発見は朝鮮民族史と文化史ばかりでなく、ひいては人類文字史の黎明期を飾る有意義な成果であり、朝鮮民族が古代初期からひとつの言語を使った事実を示すものである。

朝鮮人民の衣食住の生活風習や家族生活、労働生活の風習にも、他民族とは異なるすぐれた伝統がある。この経済・文化生活上の民族的特性もすでに古代に形成されはじめ、言語、血縁の共通性と同様、古代から今日にいたるまで綿々と継承され発展してきた。

朝鮮人民は古代朝鮮時代に創造された朝鮮式生活様式の伝統を発展させながらこの地でむつまじく暮らしてきた。

朝鮮人民の才知にたけ、勇敢で団結力の強い気性上の特性も、単一民族である朝鮮人民に固有の民族性である。

5,000 年の長い歴史において、朝鮮民族はしばしば外敵の侵略を受けたが、そのつど不屈の戦いを勇敢にくりひろげて朝鮮民族の精神を守り、他民族に同化されることなく、民族文化の伝統と単一民族としての誇りと血統の純潔を守ってきた。

渤海および後期新羅時代に高句麗と百済の遺民が新羅人民と協力して外部勢力を駆逐し、故土、故国の回復闘争をくりひろげたのは、かれらに単一民族としての誇りを守り抜こうとする自覚があったからにほかならない。また、渤海滅亡後、王子大光顕をはじめ数十万におよぶ王族、貴族、軍人などの渤海人が高麗に大挙移動し、高麗政府もかれらをすべて受け入れ、生活の安定をはかったのは、単一民族としての同族観念が強かったからである。

封建支配層に抗し武器をとって戦った農民暴動軍も、外敵の侵

入にさいしては一時停戦して、矛先を侵略者に向けた。1231 年、西北朝鮮の農民暴動軍は、蒙古侵略軍が侵入すると、守勢に陥った高麗軍を救援し、侵略者に手痛い打撃を与えた。これはそのひとつの実例である。もちろん当時、農民軍は封建支配層の階級的本性や動揺性を十分に見抜いていなかったにせよ、外部勢力が国土を侵し、民族の自主性をじゅうりんすると、民族の利益、民族の尊厳を先に考え、反侵略闘争にすべてを服従させたのである。

日本帝国主義がわが祖国を占領した受難の時期に、朝鮮人民は勇敢に立ち上がって反日闘争をくりひろげた。

金日成同志の指導する抗日革命闘争は反日闘争において主流をなした。全民族が金日成同志を民族解放の救いの星と仰いで正義の祖国解放戦争に決起し、反日人民革命軍を誠心誠意支援した。

朝鮮を占領した日本帝国主義が檀君抹殺策をおし進めたときも、それに反対して各階層人民が毎年全国各地から江東に集まって檀君陵で祭祀をおこなったし、また江東、平壌、順川などの地方有志は「檀君陵守護会」「檀君陵修築期成会」を結成し、資金を集めて檀君陵を補修、拡張した。

このように朝鮮人民はひとつの血筋をひき、ひとつの文化、ひとつの言語、ひとつの風習をもつ単一民族であるという民族性のきずなで結ばれ、ともに苦難に耐え、助け合い、力を合わせて民族の精神をしっかりうけついできたのである。

朝鮮民族は単一民族の血筋をうけつぎ民族精神を守ってきたことを誇りにしている。こうした矜持は北と南、海外にいるすべての朝鮮同胞が祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領の旗のもとに、民族の利益をもっとも重んじ、国土と民族の統一偉業を達成するために力を合わせてたたかうよう励ましている。

檀君が実在の人物であることが明らかにされたことは、7,000 万同胞にとって特筆すべき歴史的出来事であり、民族の大慶事である。

朝鮮民族が 5,000 年の長い歴史をもつ単一民族であることが証

明された結果、現世代ばかりでなく次の世代も、強い民族的自主精神と自負心をいだいて祖国と民族を熱烈に愛し、民族の繁栄のために力強くたたかっていけるようになった。また、檀君が建てた朝鮮民族最初の国家古朝鮮の歴史を科学的に定立し、すすんでは 5,000 年の長い民族史を主体的にさらに高い水準で体系化しうる道が開かれた。

　われわれ歴史学者は偉大なチュチェ思想を指針にし、檀君陵発掘報告にもとづいて文献資料を広く掘り起こし、まず檀君の活動と古朝鮮の建国過程、国家機構と社会制度、対外関係、古朝鮮王朝の継承関係、自主性をめざす人民大衆の創造的活動などの研究に力を注ぎ、古朝鮮史を主体的、科学的に体系化し、5,000 年の長い歴史を定立するための研究で革新をもたらすであろう。

平壌は朝鮮民族の発祥地

社会科学院考古学研究所室長
博士　副教授　張宇鎮

　最近朝鮮の考古学者たちは、平壌市江東郡にある檀君陵から檀君の遺骨と遺物を発掘し、総合的な研究を進めた。そして、これまで伝説のなかの神話的存在とみなされていた檀君が実在した歴史上の人物であることを科学的に解明した。これは朝鮮民族が長い歴史をもつ単一民族であることを証明するうえで画期的な成果であった。

　古朝鮮の建国始祖檀君と檀君朝鮮の史実が明らかにされた結果、朝鮮民族5,000年の悠久な歴史を科学的に解明する道が開かれ、また朝鮮民族が世界最古の国家を形成し、文明の段階を開いた英知に富む民族のひとつであることを世界に誇りうるようになった。

　親愛な指導者金正日同志はつぎのように述べている。

　「平壌は朝鮮人民の悠久な歴史と輝かしい文化、英知と才能を誇る歴史的都市であります」

　檀君が平壌を中心に古朝鮮を建てて文明の歴史を開くとともに民族の統一を達成し、平壌を基地にして広大な地域に国土を拡張して民族の英知を発揮したのは、決していわれのないことではない。それは今日の平壌とその一円が山紫水明の地として早くから人びとが集団をなして住み、文化が発達した人類の発祥地、人類文化発源地のひとつであったからである。だからこそ平壌は檀君のような歴史的人物を生んだ朝鮮民族の古い故郷となりえたのである。

　最初の古代国家にはじまる国の歴史、文明の歴史ばかりでなく、人類発生の黎明期につながる朝鮮民族史の始原をも含め、朝鮮民族の誇らしい悠久な歴史は、すべて平壌一円を中心にして発生し、発

展した。
　実に平壌一円は、朝鮮の地ではじまった人類史の原点であり、最初の国家の発生地、朝鮮民族の発祥地である。
　朝鮮民族の悠久な歴史は、1966 年平壌市祥原郡黒隅里で発見されたコムンモル遺跡によくあらわれている。風化作用で黒色をおびた石灰岩からなる山の一隅にあるということでコムンモル（黒隅）遺跡といわれるこの遺跡は、人類史の幕開きとともに、朝鮮民族の悠久な歴史がはじまったことを立証している。この遺跡は 100 万年前の人びとが残したものであり、したがって、朝鮮の国土は深い沈黙にとざされていた地球上に人間がはじめて呱々の声をあげた人類発祥地のひとつなのである。
　周知のように地球の東半球、とくに東アジアで人類の最初の痕跡をとどめていることで有名なインドネシアのジャワ島にあるピテカントロプスの遺跡も、数十万年前のものにすぎない。したがって、コムンモル遺跡の発見は、人類史がはじまった旧石器時代の初期から朝鮮の国土に人間が住みはじめ、独自に人類文化の芽をはぐくんでいったことを示している。
　朝鮮民族の先祖は、朝鮮半島を含むアジア大陸東北部の広大な地域で、原始社会の初期以来自然の束縛から抜け出すために、自主的かつ創造的活動をくりひろげて社会をたえず発展させ、固有な民族文化の源流を創造してきた。こうしてこの広大な地域で原始文化の共通性と、近隣地帯と区別される固有の特性が形成されたのである。
　どの時代、どの地域でも文化的共通性、とくにひとつの血筋をひいた民族の共通性は、一定の地域を中心にして形成されるものである。
　朝鮮では檀君が建てた最初の古代国家古朝鮮の首都平壌が、民族の共通性を形成する地域的拠点、中心地であった。
　朝鮮の文明史は平壌ではじまり、民族の共通性、同質性も平壌を中心にして形成されたが、これはそれ自体の発展の必然的結果で

あった。
　平壌が朝鮮民族の発祥地となったのは歴史的にみて、それ以前に平壌付近が人類発祥地、人類文化発源地のひとつであったからである。
　朝鮮民族史の始原を示す最古の遺跡も平壌付近で発見され、朝鮮民族の先祖の人骨化石も平壌一円に集中的に分布している。
　広く知られたコムンモル遺跡は平壌地域にあり、平壌を中心にした大同江流域には人骨化石が集中的に分布しているばかりでなく、この地域で原人が旧人に、旧人が新人に移行し、類人猿から分かれはじめた最初のヒトが現代人のような完成した身体構造をもつようになる、人類の進化過程がたゆみなくつづいたのである。
　それはまず旧人段階の人骨化石が発見されたことから立証される。コムンモル遺跡を残した原人段階の人たちについで、朝鮮の国土で人類の進化過程をになった旧人段階の人たちはその化石が出土した地方の名にちなんで「力浦人」および「徳川人」と呼ばれている。「力浦人」は1977年平壌市力浦区域大峴洞の洞窟遺跡から出土した。この化石は 7,8 歳の子どもの頭骨化石である。「徳川人」は 1973 年に大同江中上流一帯の平安南道徳川市勝利山洞窟遺跡から出土した。「徳川人」の二つの歯の化石は朝鮮で久しい前に死滅した洞窟ハイエナの下顎骨とともに発掘された。
　平壌を中心にした大同江流域では、旧人段階についで人類の進化過程をしめくくる新人段階の化石が少なからず発掘された。最初に発掘された新人段階の人骨化石は「勝利山人」である。「勝利山人」の化石は、下顎骨で、35 歳くらいの中年男子のものと推定される。この化石は、1972 年平安南道徳川市勝利山洞窟遺跡で「徳川人」とは異なる地層から出土した。1980 年には 2 か所で新人段階の人骨化石が出土した。そのひとつは平壌市勝湖区域万達里で出土した「万達人」であり、他のひとつは平壌市祥原郡竜谷里で出土した「竜谷人」である。万達洞窟では比較的よく保存された脳頭蓋

と下顎骨の化石、そして細石器の傾向が認められる旧石器時代後期の石器が出土した。竜谷洞窟では多くの体の骨とともに顔面部分まで保存された二つの頭骨が発見された。このほかにも平壌市祥原郡中里の錦川洞窟と平安南道北倉郡豊谷労働者区のコムンノン洞窟でも新人段階の人骨化石が発掘された。

朝鮮は人骨化石が多く分布していることでは世界で指折りの国のひとつである。そしてその大部分が平壌を中心にした大同江流域に集中しており、他の地域では1,2個体の人骨化石が発見されているにすぎない。したがって平壌一円が人類発祥地のひとつであることは確かである。

人類発祥地のひとつである平壌は、檀君時代にいたって朝鮮民族の発祥地となった。前 3000 年紀初に檀君は、平壌で最初の古代国家を建国し、やがて朝鮮半島の西北部地方を含む広い地域を古朝鮮国家の領域にした。ひとつの国家領域内の住民は自然に緊密な連係を結ぶようになる。これは平壌を中心にした古朝鮮国家領域内住民間で血縁および言語、文化の共通性を深める作用をした。

その後、古朝鮮の直接的な影響のもとに朝鮮の領域では古代諸国家が形成され、古朝鮮の領域もいっそう広がった。平壌を中心にして形成され強大になった古朝鮮の影響のもとに、同じ領域内の古代諸国家は経済的、文化的に緊密な連係を結び、深めていった。こうして古代諸国家住民のなかでは同じ民族、同胞であるという自覚と意識がいっそう高まり、かれらは単一民族として発展していった。

平壌が朝鮮民族の発祥地であり、朝鮮民族の単一性が平壌を拠点、中心にして形成されたことは、人類学の資料をとおしても認められるところである。

周知のように民族の共通性を示す人種的特徴は、新人段階で形成されはじめた。

朝鮮人の血縁的共通性、朝鮮民族の固有な形質が平壌付近で形成されはじめたことは、多くの人類学資料が立証している。

朝鮮人を血縁的に統一し、朝鮮民族の単一性を確認している形態学的基礎には、朝鮮人は誰であろうと、どの時代、どの地方に住もうとすべて頭骨がかなり高いが、顔面骨の高さは中程度であまり高くなく、額は後方に傾斜せず直立し、眼窩上隆起は相対的に高く、顎骨は広く、鼻根の部位は相対的に狭く高いということにある。朝鮮人の血縁的共通性、民族の単一性も形態学的にはこの特徴にもとづいて形成され、この特徴によって朝鮮人は他の人種と区別されるのである。

ところでこうした朝鮮人の固有な特徴は、平壌一円で発掘された人骨化石以来見うけられるもので、平壌一円、平壌を中心にする大同江流域で発掘された新人段階の人骨化石である「万達人」と「竜谷人」そして「豊谷人」でもそのような特徴が見られるのである。「万達人」と「竜谷人」の頭骨はたいへん高く、額は直立している。「竜谷人」の二つの頭骨にみられるように頭骨の高さが「万達人」の場合と同じく、東アジアでは異彩を放つほど高いが、それとは逆に顔面骨はそれほど高くなく中間程度にすぎない。また鼻の部位が保存されている「豊谷人」の化石でも朝鮮人固有の特徴が著しい。それは鼻根が東アジアの範囲では低くなくやや高いほうであり、鼻骨は広くなく相対的に狭いことにある。こうした特徴は鼻骨部位が残っている「竜谷人」の化石にも見られる。ところが隣接地域の住民は朝鮮人とまったく異なる傾向の特徴をもっている。それは頭骨がそれほど高くない反面、顔面骨が相対的に高く、額は後ろに傾斜し、鼻根が低く鼻骨が広いということである。

これは朝鮮民族が平壌を発祥地にしてこの地域で先に発生し、平壌を中心にしてひとつの民族に統一されていったことを意味する。したがって悠久な朝鮮民族の源流が平壌を中心にした地域であったことは確かである。

平壌が朝鮮民族の発祥地であることから、民族の単一性も平壌を中心にして形成された。

民族がひとつの民族として成立するためには血縁的共通性にもとづく単一性が形成されなければならない。ところでこの単一性が形成される方途は二つある。そのひとつは一定の発祥地で形成された民族がその発祥地から分布領域を広め、たえず放散および拡散する場合であり､他のひとつは一定の領域にいる諸種族がたえず接触、交流してひとつの血縁的共通性を形成していく場合である。

朝鮮民族の単一性は、前者の場合のように、平壌を中心とするひとつの発祥地で民族の始祖、共通の先祖が分化し、それがひきつづき北上および南下してその分布領域を広げた結果形成されたのである。これを主流にし、それに各地域住民間の接触と交流がひんぱんにおこなわれた結果、朝鮮民族の血縁的共通性はいっそう強固になったのであり、他民族の場合とは違って、朝鮮民族は血統の同質性を保つことができたのであった。

このように朝鮮人は出生地にはかかわりなく、みなが平壌一円で出土した人骨化石にその始原をおく同族の後裔であり、平壌で最初の古代国家を建て民族の共通性をなしとげた檀君朝鮮人の直系子孫である。

悠久な朝鮮民族の歴史が平壌ではじまり、朝鮮民族の単一性が平壌を中心にして形成されたことをひとつの定説として定立しえたのは、朝鮮人民に偉大な領袖、偉大な指導者がいるからである。

檀君陵発掘事業の成果によって、朝鮮民族の発祥地が平壌であり、朝鮮民族の単一性が平壌を中心にして形成されたことが新たに解明されたことは、ひとつの血筋をひく7,000万朝鮮同胞が民族的な誇りをいだいて祖国統一の聖業へ向けいっそうかたく団結してたたかっていく重要な契機となった。

注　　解

1.古朝鮮：古代朝鮮の正式国号は「朝鮮」で、15 世紀以後の李氏朝鮮と区別し、「古朝鮮」と呼びならわしている。

現在世界の多くの国では朝鮮を「コリア」と呼んでいるが、これは高句麗を継承し 10 世紀初に朝鮮の最初の統一国家を建てた「コリョ（高麗）」が地球上に広く知られて通用したものである。「朝鮮民主主義人民共和国」の「朝鮮」を音訳すれば「コリア」ではなく「チョソン」である。「朝鮮」は文字通り「鮮やかな朝」の国という意味である。

一時、朝鮮を「韓」と称したが、それは、7 世紀中期、唐の支配層が高句麗、百済、新羅の 3 国をかつて朝鮮半島南部にあった辰国の 3 小国三韓と混同して「三韓」と呼んだところに起因している。

2.パクタル王：「パクタル」という名称は平壌一円で古朝鮮国家を建てた種族の名に由来している。

太陽を燃える火の塊と考えたこの種族の祖先は、自分の種族を太陽を指す「プル／パラ」族と呼び、居住地の山「太白山」を指す古い朝鮮語「タラ」を加えて「プルタラ」または「パラタラ」族と称した。

その後言語生活で閉音節が使われるようになってから「プル（pulu)」は「プル（pul)」、「パラ（pala)」はパル（pal）／パク（palk)」、「タラ（tala)」は「タル（tal)」になり、「パル（pal）／パク（palk）」は同義語「パク（pak）」になり、「パラタラ（palatala)」は結局パクタル（paktal）となった。これはパクタル王の父方の種族名であった。

中国の古文献『管子』『左伝』『逸周書』『史記』などでも、古朝

鮮住民を「夫婁、不、発、亳」などと記録している。朝鮮民族の祖先は古朝鮮の建国始祖を「パクタル・イムグム（王）」と言ったが、後世になって漢字で「檀君」と表記した。朝鮮語の「パクタル」はマユミ（檀）をも意味することから「檀」、イムグムは王、つまり君のことであるから「君」と表記したが、もともと「明るい族の王」という意味である。

「パクタル・イムグム（檀君）」という名称はしだいに古代朝鮮の統治者を指す特定の尊称となり、その後、古朝鮮国家の建国者である第１代王を指す固有名詞となった。

「パクタル・イムグム」の「パクタル」を「ペダル（漢字で倍達と表記）」とも言った。

これは朝鮮語の語音的変化現象で「パク（pak）／ペク（paek）」が「ペ（pae）」にも通ずるからである。

「パクタル／ペダル」の「パク／ペ」は古文献には「夫婁、不、発、亳、倍」などと表記されていた。そこに音韻上多少の違いはあるが、いずれも古代朝鮮住民集団の名称に由来しているのである。

朝鮮の祖先は自分たちがパクタル王を始祖とする単一民族の「夫婁（プル）族」または「檀（パクタル）族」「倍達（ペダル）族」であることを誇りにした。

3. 檀君王倹：「王倹」は王の朝鮮語「イムグム」の音訳である。

4. 朝鮮旧時代類型人：平壌市周辺の祥原郡竜谷里、勝湖区域万達里で「竜谷人」「万達人」と呼ばれる新人の化石が発見された。これは新石器時代末～青銅器時代に朝鮮半島を中心にした地域に住んでいた新人のうちでもっとも現代人に近く、すでに朝鮮人の人類学的特徴をそなえていた。かれらは朝鮮民族の祖先であるので朝鮮旧時代類型人と呼んでいる。かれらの言語と風習は類似していたが、まだ氏族・種族段階にとどまり、民族をなしていなかった。

5. 仙人王倹：「仙人王倹」の「仙人」は中国の神仙思想による仙人ではなく、朝鮮の固有信仰である「仙」思想によるものである。それで『三国史記』には朝鮮に儒教、仏教、道教とは異なる「玄妙な道」があるといい、それを「仙」と称した。またそれは朝鮮民族の始祖パクタル王にたいする尊称に使われた。『帝王韻紀』は沸流国の松譲王が高句麗の朱蒙王と技量を争ったとき、「わしは仙人の後裔だ」と言ったことに注釈をつけ、「かれもパクタル王の後裔であるらしい」と書いている。

古代朝鮮族の固有信仰である「仙」思想は、その後国家始祖への崇拝心と結びついて発展し、パクタル王は「仙」思想における崇拝対象となり、仙人と結びつくようになったのである。

1325年李叔琪は「平壌を開いたのは仙人王倹である…平壌君（檀君）は三韓以前の人で1,000余年生きた」と書いているが、これは仙人王倹がパクタル王（檀君）であることを示している。

三韓は古朝鮮建国以後朝鮮半島南部に成立した辰国に属する3小国である。

6. 「箕子東来説」：前12世紀、中国人の「箕子」が朝鮮にやってきて国を建てその王になったという、過去中国の反動的封建史家たちにより捏造された「説」。本来「箕子」とは「箕」という国（諸侯国）の侯という意味で、人名ではない。「箕子東来説がはじめて記録に現れたのは、正体のつまびらかでない本とされている『尚書大伝』（前2世紀初）においてである。この本は中国で殷が滅び周が立つと、「箕子」は周の臣となるのをきらって朝鮮に逃げ、周の武王はかれを諸侯に封じたとして、あたかも朝鮮が「箕子」によって建てられた国、中国の諸侯国であったかのように歴史をねじまげている。

しかし、中国の史書『史記』や『漢書』もあえてこのでっちあげられた「説」を採用することはしなかった。

「箕子東来説」は前 3 世紀末～前 2 世紀初、中国の封建史家たちが漢の古朝鮮侵略政策を合理化するためにでっちあげたものである。過去、中国の封建大国主義史家たちが近隣の氏族、種族の祖先や指導者をつねに中国漢族の出身として描写してきたのは、かれらの常套的な歴史偽造手法であって、「箕子東来説」もその例にもれないのである。

20 世紀にいたって、日本帝国主義侵略者は朝鮮民族の自主性をじゅうりんするために「箕子東来説」を悪辣に利用した。

1945 年の朝鮮解放後、「箕子東来説」は科学的な諸史料によってその虚構が白日のもとにさらされた。

7. **支石墓**：これは地表を一定の深さまで掘り、4 つの板石（支石）を立てて箱形の墓室をつくり、その上に 1 枚の大きな蓋石をのせて石室とした古代朝鮮の墓である。大きなものになると高さが 3m近く、蓋石は長さおよび幅がそれぞれ 9m、6mを越え、重さ 40ｔ以上の巨大なものもある。

支石墓からは琵琶形短剣や素焼きの土器、玉や耳輪などの装身具が出土している。

支石墓はその規模や副葬品からみて、古代貴族の墳墓であると認められる。

平壌付近に当代文化を代表する支石墓が集中的に分布している事実は、平壌が古朝鮮の首都であり、大貴族や官僚たちが集まって住んでいた政治的中心地であったことを示している。

8. **琵琶形短剣**：楽器の琵琶に似ているのでその名があるこの短剣は、隣国には見られない古代朝鮮独特の遺物で、当時の金属加工術が高い水準にあったことをうかがわせる。

この短剣は古代朝鮮の全領域すなわち朝鮮半島、遼河および松花江流域で発見されている。それが出土した地域の他の遺物もすべ

て古代朝鮮特有のものである。
　琵琶形短剣関係文化の分布は、古代朝鮮国の人たちの文化的共通性が成立し、隣国隣接地域の文化とはまったく異なる古代朝鮮固有の文化が栄えていたことを物語っている。

主要文献目録

1. 『江東誌』——平壌市江東郡の歴史、地理、軍事、文化にかんする書籍。1626 年編纂。
2. 『古記』——古代朝鮮および三国の史書。高麗時代に編纂。
3. 『高麗史』——封建国家高麗（918～1392 年）の史書。1451 年編纂。
4. 『玉山宮由来記』——日本・九州にある神宮（玉山宮）の由来を記した書籍。玉山宮には檀君が祭られている。
5. 『揆園史話』——古朝鮮の史書。1675 年発行。
6. 『槿域書画徴』——朝鮮の書画にかんする書籍。1928 年編纂。
7. 『鶏林類事』——12 世紀中国・宋の人の高麗紀行文。
8. 『箕子』——前 7 世紀中国・斉時代の書籍。
9. 『寧辺誌』——平安北道寧辺郡の歴史、地理、経済、軍事、文化を概括した書籍。
10. 『檀君古記』——『三国遺事』に引用された檀君王倹の史書。
11. 『檀君本紀』——『世宗実録』に引用された檀君の史書。
12. 『檀君世紀』——檀君の史書。14 世紀初編纂。
13. 『檀奇古史』——古朝鮮の史書。渤海時代（698～926 年）に編纂されたといわれる。
14. 『東国歴代総目』——17 世紀までの朝鮮史書。1705 年編纂。
15. 『東国史略』——高句麗、新羅、百済の史書。『三国史略』ともいう。1403 年編纂。
16. 『東史補遺』——高麗王朝以前の朝鮮史書。1646 年編纂。
17. 『東国歴史』『東国通鑑』『東史輯略』『東史纂要』『東史年表』——中世以後の朝鮮の諸史書を概括した書籍。
18. 『東事類考』——朝鮮史上の出来事、人物をあつかったと推

定される書籍。著者、年代不詳。

19. 『童蒙先習』——李朝時代の漢字入門用教科書。
20. 『大弁説』——古朝鮮史をあつかったと推定される古書のひとつ。著者、年代不詳。
21. 『留記』——史書。高句麗初に編纂。
22. 『柳文化譜』——黄海道九月山一帯にあった昔の文化県を中心に栄えた柳氏一族の系譜。
23. 『李朝実録』——李朝 500 年の歴代王の年代記。1409 年以来 500 年間編纂しつづけた。
24. 『夢渓筆談』——中国・宋代の書籍。
25. 『史記』——古代から前 87 年までの中国王朝史。漢代に編纂。
26. 『山海経』——中国の古代地理書。前 3 世紀ごろのものといわれる。
27. 『三国史記』——儒教的史観にもとづいた高句麗、百済、新羅の史書。1145 年編纂。
28. 『三国志』——中国の封建国家魏、蜀、呉の史書。3 世紀に晋で編纂。
29. 『三国遺事』——高句麗、百済、新羅の歴史、伝説、逸話を集録。13 世紀末編纂。
30. 『三聖記』——桓雄、桓因、檀君の 3 聖人にかんする書籍で、儒教の教理に反するかどで李朝時代に禁書になった。新羅時代に編纂されたといわれる。
31. 『三一神誥』——大倧教経典のひとつ。
32. 『尚書（書経)』——孔子の儒教教理を記した経典のひとつ。
33. 『尚書大伝』——『尚書』の解説書。
34. 『少微通鑑』——中国の史書『資治通鑑』のダイジェスト版。
35. 『粛宗実録』——李朝粛宗王時代（1675～1720 年）の日記体の史書。
36. 『新増東国輿地勝覧』——『東国輿地勝覧』（1481 年編纂）

を 1530 年に補完した朝鮮地理書。

37. 『世祖実録』――李朝世祖王時代（1455～1468 年）の日記体の史書。
38. 『世宗実録』――李朝世宗王時代（1419～1450 年）の日記体の史書。
39. 『正祖実録』――李朝正祖王時代（1777－1800 年）の日記体の史書。
40. 『増補文献備考』――1770 年に中世朝鮮の政治・経済・文化制度を項目別、年代順に分類、整理して編纂した本を、1903～1907 年、250 巻にまとめて修正編纂した書籍。
41. 『帝王韻紀』――中国と朝鮮の高麗時代までの史実を韻文体でつづった長編歴史叙事詩。1287 年編纂。
42. 『左伝』――『春秋左氏伝』の略称。中国古代の史書。
43. 『千字文』――李朝時代に使われた韻文体の漢字入門用教科書。
44. 『清脾録』――18 世紀の詩評論集。
45. 『春秋』――中国・春秋時代（前 770～前 476 年）盧（前 722～481 年）の史書。孔子の手になるという。
46. 『太白逸史（太白遺史）』――史書。1520 年編纂。
47. 『八域志』――朝鮮の地理誌で『択里志』とも言う。18 世紀編纂。
48. 『抱朴子』――中国・晋代の書籍。
49. 『漢書』――前漢王朝 230 年の史書。1 世紀後漢時代に編纂。
50. 『後魏書』――後魏（220－265 年）の史書。いまは伝わっていない。『魏記』『魏略』をはじめ本論文集で扱われた後魏の史書はほとんどが伝わっていない。
51. 『訓釈諺文解』――19 世紀前期に日本人が朝鮮の民族文字「訓民正音」の沿革を記した書籍。
52. 『海東繹史』――外国の史書にある 17 世紀までの朝鮮王朝史

を抜粋、編纂した書籍。

53. 『燕岩集』——朝鮮の実学者朴趾源（1737～1805 年）の著作集。

54. 『輿地志』——朝鮮の地理誌。17 世紀編纂。

55. 『英祖実録』——李朝英祖王時代（1725～1776 年）の日記体の史書。

56. 『応製詩註』——14 世紀末に編纂された詩集を 15 世紀初に解説した書籍。

57. 『逸周書』——中国・周の史書。

編　集　後　記

「第 1 回檀君および古朝鮮に関する学術発表会」（1993 年 10 月 12〜13 日）後のこの 1 年間、朝鮮の歴史学界は檀君と古朝鮮の歴史の研究で一連の成果をあげ、平壌で第 2 回学術発表会（1994 年 10 月 5〜7 日）を開催した。

ここでは 27 の研究論文が発表された。

第 2 回学術発表会では、檀君が神話的な存在ではなく実在の人物であったことが現代科学によって証明された事実を踏まえて、檀君朝鮮の歴史をその起源から基本体系、内容にいたるまで新たに定立すべきことが指摘され、そのさい誤った史観による既成の文献や考古学資料そしてこれらの資料による檀君と古朝鮮にかんする既成の見解を全面的に見直し、批判を加える立場を堅持しなければならないことが強調された。

ここで解決すべき基本的な問題点は、古朝鮮の建国年代、古朝鮮王朝、檀君の出生地と首都、古朝鮮の領域などの問題を正しく解明することである。それは、これらの問題が民族の歴史を科学的に体系づけるうえでの原点であり、民族の発祥地、文化の中心地にかかわる重要な問題であるからである。

朝鮮の考古学者たちは平壌一帯で檀君および古朝鮮時代の遺跡遺物の発掘に広く取り組んだ。

そうしたなかで檀君朝鮮の建国期を示す古代の城壁や、平壌が檀君朝鮮時代以来古朝鮮の首都であったことを証明する 500 余の支石墓と 150 余の石槨墳が発掘された。また、100 余の住居址が確認され、そのうち 18 の住居址が調査、発掘された。

さらに今回平壌付近ではじめて殉葬墓が発掘された。ここで出土した 30 余体の人骨の絶対年代測定値は 5,069±426 年（1994 年

現在）であった。これは檀君朝鮮の成立以前すでに平壌一帯の住民のあいだでは奴隷主と奴隷の階級分化がなされていたことを物語っている。

平壌が古朝鮮文化の中心地であったことを立証する遺物も多数出土した。

遺物と一緒に出土した人骨の絶対年代測定値を通して、前 26 世紀のものと判明した青銅琵琶形槍先と、前 25～前 24 世紀のものと確認された金銅および純金の耳飾りと指輪、同時代の陶器などがそれである。

絶対年代測定値が 3,104±179 年であると判明した鉄鏡の出土は、早くも前 12 世紀に平壌一帯で鉄器文化がおこっていたことを示している。

平壌一帯の地質条件で人骨が 5,000 年間保存されえたことをあかす物質的資料もいろいろと見出された。

平壌一帯の支石墓と石槨墓出土の、ほとんどが十分に保存されていた人骨の絶対年代測定値を見ると、もっとも古いものは 5,069 年前のものであり、その他は 4,400～4,700 余年前のものであった。

第 2 回学術発表会では、檀君朝鮮の領域問題、政治経済制度と哲学思想にかんする論文、神誌文字が朝鮮人民の固有の文字であることを論証する論文なども発表された。

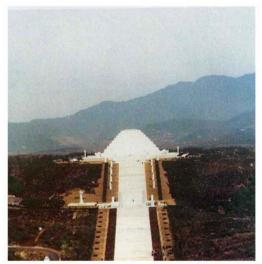
古朝鮮の建国年代と存在期間を解明する論文は、前 30 世紀初、具体的には檀君が 25 歳であった前 2993 年に国が建てられたこと、檀君王朝は前 14 世紀ごろまで 1,500 年以上存在し、檀君朝鮮（前朝鮮）を引き継いで後朝鮮が、さらにそのあと満朝鮮が前 108 年まで存在したことを論証している。

最初の国号朝鮮の起源についての論文は、それが太陽を崇拝する東方の明るい国という固有な意味をもち、建国始祖檀君ひいてはその出身種族名パクタルとも深くかかわっていることを明らかにしている。

1994年10月、平壌市江東郡の風光秀麗な大朴山麓に、金日成同志の生前の意を体して、檀君陵が古朝鮮建国始祖の墓にふさわしく、歴史的な国宝としてりっぱに再建された。

檀君陵は檀君朝鮮時代の歴史的内容が豊富にそして生きいきと表現されており、その形式も古代朝鮮の風習が生かされ独特な味わいを見せている。檀君陵はまた、東方の強国檀君朝鮮の気象にふさわしく、彫刻や建築工学的処理もりっぱになされて、始祖陵としての威厳と荘重さをそなえている。

檀君陵は朝鮮民族の現世代だけでなく、遠い後の世代にも連綿と民族的な誇りを植えつけていく民族の聖地として永遠に光り輝くであろう。

檀君画像

平壌市江東郡大朴山の山腹に改建された檀君陵の敷地総面積は45haに及び、駐車場から陵の頂上までの高さは70m、石段総数279段、石の加工総面積は25,400余㎡である。

東西両側に5個ずつ建てられた立石型式の花崗石門柱は、他の王陵の門とは異なる建築形式で、ここを訪れる人たちをはるか5,000年前へ案内するという意味をもっている。最高の門柱は10m、最低の門柱は1.5m

檀君陵改建記念碑の高さは8m、重量は25.5ｔ、記念碑の裏面に献詩が刻まれている。

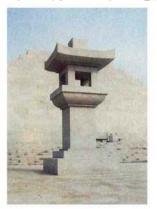
王子像　　長男　夫婁
　　　　　3男　夫虞

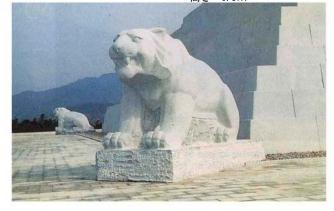
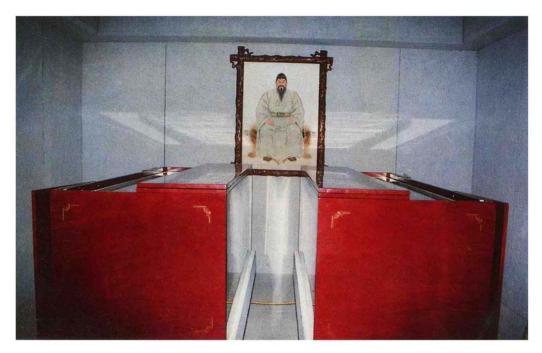
臣下像　神誌　蚩尤　朱因　余守己

王子像　２男　夫蘇
　　　　４男　夫余

臣下像　彭虞　　高矢　海月　緋天生

9 層段々式石墳である檀君陵の高さは 22m、正方形の底辺の 1 辺の長さ 50m、築造に使われた石 1,994 個、そのうち最大のものは重量 21ｔ。
9 という数は歴史的にもっとも多いということを象徴してきている。

古朝鮮文化を代表する琵琶形短剣を象徴した剣塔。
総高　7m
青銅剣の高さ　5m

石灯、一晩中灯すというので長明灯ともいう。
高さ　5.5m

陵の標識碑さながらに立つ望柱石。望頭石、望石あるいは華表柱ともいう。
高さ　6.5m

墳墓の衛兵さながらの石虎
長さ　5.7m
高さ　3.5m
重さ　90ｔ

墓室に保存された遺骨のガラス棺
　墓室の壁の高さ　3.4m
　3 角持ち送り天井までの高さ　5.2m
　陵の入口には古代式の石門がある。

太鼓形式の台石に置かれた祭壇（長さ 6m、幅 3m）とその手前の壺型の焚香炉（高さ 1.5m）

「ここで注目すべきことは、檀君の実存を解明する遺骨が出土したという衝撃的なニュースよりも、われわれすべての共通分母である檀君を再照明し、民族の始祖を確実に闡明したという事実である。これは朝鮮民族の悠久性を確かなものとし、われわれの歴史を民族の上において、主体的歴史を究明しようというその間の努力の結晶であるといえる。

…これを機に、檀君を求心体としてともに民族統一の近道につくよう望むものである」(南朝鮮の出版物『檀君を求めて』の序文から)